

# 湯の口横穴群

(II)

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)

1988

山鹿市教育委員会

# 湯の口横穴群

( II )

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)

1988

山鹿市教育委員会

## 序

湯の口横穴群調査報告書第2集をお届けいたします。

昭和59年度の第1次調査において、横穴の配列状況や装飾様式を通して当横穴群の特異性を見ることができましたが、昭和62年度の第2次調査においては、更に横穴群の性格を示唆する特筆すべき発見がありました。それは轡や鐙といった馬具にとどまらず、菊池川流域で初の貝輪の出土を見たことからも充分うかがい知ることができます。規模においても都合258基の横穴が確認され、県下屈指の大横穴群であることは否めません。今後、一層の追跡調査が期待されるところであります。

この調査に際し、調査に従事された多くの方々や惜しみない指導、助言をいただいた県文化課並びに長崎大学に対し、心から感謝の意を表し、本報告書が学術研究の一資料として活用され、文化財の保存や愛護思想振興の一助となりますよう祈念してやみません。

昭和63年3月31日

山鹿市教育長 弓掛正久

## 例　　言

1. 本書は、山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した菊池川中流域古墳、横穴群総合調査の報告書である。
2. 本調査は、菊池川中流域に所在する古墳、横穴群の実態を把握することを目的としたもので、4年目の事業として湯の口横穴群を実施した。
3. 調査に際しては、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。
4. 本書の執筆は中村幸史郎が行い、人骨に関しては長崎大学医学部より玉稿をいただいた。
5. 本書の横穴、古墳、遺物の実測図および、製図は挿図目次に示すとおりである。
6. 本書に掲載した写真は中村が撮影し、富田清子が焼付けた。
7. 本書の編集は中村と有働八千代が行った。
8. 本書の題字は山鹿市文化財保護委員長、幸平和氏にお願いした。

## 本 文 目 次

### 序 文

I	調査の経過 (湯の口横穴群)	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II	調査の成果	3
1.	横穴分布の概要	3
2.	横穴と遺物	4
III	小結	52
IV	付論…熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨	53

## 図 版 目 次

図 版 1	湯の口横穴群遠景
2	1. 1、2号横穴
	2. 2号横穴
3	1～6. 2-B号横穴出土遺物
	7. 3号横穴
4	3-A号横穴人骨出土状況
5	1. 3-C号横穴
	2. 3-C号横穴人骨出土状況
	3. 3-C号横穴出土遺物
	4. 3-B号横穴出土遺物
6	4号横穴
7	1. 2. 閉塞石及び遺物出土状況
	3～5. 4号横穴出土遺物
8	1. 5号横穴 (内部より羨門を見る)
	2. 5号横穴出土遺物
	3. 5-B号横穴

- 9 1. 5-B号横穴閉塞石（内部より）
  - 2. 5-B号横穴人骨出土状況
- 10 1. 2. 5-B号横穴遺物出土状況
  - 3. 5-B号横穴轡物出土状況
- 11 5-B号横穴出土遺物
- 12 1. 6号横穴奥壁
  - 2. 3. 6号横穴出土遺物
  - 4. 7号横穴
- 13 1. 2. 7号横穴閉塞石出土状況
  - 3. 9号横穴閉塞石出土状況
- 14 1. 9号横穴
  - 2. 3. 11号横穴出土遺物
  - 4. 13号横穴羨門部
- 15 13号横穴
- 16 1～7. 17号横穴出土遺物
  - 8. 17-B号横穴羨門部
- 17 17-B号横穴遺物
- 18 1. 17-B号横穴羨門閉塞状況
  - 2. 17-B号横穴羨門閉塞石除去状況
  - 3. 貝輪出土状況
- 19 17-B号横穴遺物出土状況
- 20 17-B号横穴出土遺物
- 21 17-B号横穴出土遺物
- 22 17-B号横穴出土遺物
- 23 17-B号横穴出土遺物
- 24 1. 17-C号横穴
  - 2. 20-C号横穴閉塞状況
  - 3. 20-C号横穴閉塞状況
- 25 1. 20-C号横穴出土遺物
  - 2. 3. 20-D号横穴出土遺物
- 26 1. 20-D号横穴遺物出土状況
  - 2～11. 20-D号横穴出土遺物
- 27 1. 21号横穴遺物出土状況
  - 2. 21号横穴出土遺物
  - 3. 30号横穴

- 28 1～5. 30号横穴出土遺物  
6. 32号横穴出土遺物
- 29 1. 2. 33号横穴  
3. 4. 33号横穴出土遺物
- 30 1. 34号横穴羨門  
2～9. 34号横穴出土遺物
- 31 1～3. 34号横穴出土遺物  
4. 43号横穴  
5. 43号横穴人骨出土狀況
- 32 1. 2. 43号横穴出土遺物  
3. 46号横穴遺物出土狀況  
4. 5. 46号横穴出土遺物

## 挿 図 目 次

第 1 図 周辺遺跡分布図（中村幸史郎作成）	2
第 2 図 横穴配置図（中村作成、富田清子製図）	5～6
第 3 図 1号横穴実測図（中村実測、国友紀里子製図）	7
第 4 図 1号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	7
第 5 図 2号横穴実測図（中村実測、国友製図）	8
第 6 図 2号横穴出土遺物実測図（中村実測、国友製図）	8
第 7 図 2-B号横穴実測図（中村実測、富田製図）	9
第 8 図 2-B号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	9
第 9 図 3号横穴実測図（中村実測、富田製図）	10
第 10 図 3-A号横穴実測図（中村実測、国友・富田製図）	11
第 11 図 3-B号横穴出土遺物実測図（富田実測、製図）	12
第 12 図 3-C号横穴実測図（中村実測、国友製図）	12
第 13 図 3-C号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	12
第 14 図 4号横穴実測図（中村実測、国友製図）	13
第 15 図 4号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	14
第 16 図 5号横穴実測図（中村実測、国友製図）	14
第 17 図 5号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	15
第 18 図 5-B号横穴実測図（中村実測、国友製図）	15

第 19 図	5－B号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	16
第 20 図	5－B号横穴出土遺物実測図（富田実測、製図）	17
第 21 図	6号横穴実測図（中村実測、国友製図）	18
第 22 図	6号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	18
第 23 図	7号横穴実測図（中村実測、国友製図）	19
第 24 図	9号横穴実測図（中村実測、国友製図）	20
第 25 図	11号横穴実測図（中村実測、国友製図）	21
第 26 図	11号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	21
第 27 図	13号横穴実測図（中村実測、国友製図）	22
第 28 図	13号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	23
第 29 図	14号横穴実測図（中村実測、富田製図）	23
第 30 図	14号横穴出土遺物実測図（富田実測、有働八千代製図）	24
第 31 図	15号横穴実測図（中村実測、富田製図）	25
第 32 図	15号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田・有働製図）	25
第 33 図	16号横穴実測図（中村実測、国友製図）	26
第 34 図	16号横穴出土遺物実測図（富田実測、有働製図）	26
第 35 図	16号横穴出土遺物実測図（富田実測、有働製図）	27
第 36 図	17号横穴出土遺物実測図（富田実測、製図）	27
第 37 図	17－B号横穴実測図（中村実測、富田製図）	29
第 38 図	17－B号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田・有働製図）	30
第 39 図	17－B号横穴出土遺物実測図（富田実測、製図）	31
第 40 図	17－B号横穴出土遺物実測図（富田実測、製図）	32
第 41 図	17－B号横穴出土遺物実測図（中村実測、製図）	33
第 42 図	17－C号横穴実測図（富田実測、製図）	34
第 43 図	20－C号横穴実測図（中村実測、富田製図）	35
第 44 図	20－C号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	36
第 45 図	20－D号横穴実測図（中村実測、富田製図）	37
第 46 図	20－D号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田製図）	38
第 47 図	21号横穴実測図（中村実測、富田製図）	38
第 48 図	21号横穴出土遺物実測（中村・富田実測、富田製図）	39
第 49 図	26－B号横穴実測図（中村実測、富田製図）	39
第 50 図	30号横穴実測図（中村実測、富田製図）	40
第 51 図	30号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田製図）	41
第 52 図	30号横穴出土遺物実測図（富田実測、富田・有働製図）	42
第 53 図	32号横穴実測図（中村実測、富田製図）	43
第 54 図	32号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田製図）	43

第 55 図	33号横穴実測図（中村実測、富田製図）	44
第 56 図	33号横穴出土遺物実測図（富田実測、製図）	45
第 57 図	34号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田製図）	46
第 58 図	41号横穴実測図（中村実測、富田製図）	47
第 59 図	41号横穴出土遺物実測図（富田実測、有働製図）	47
第 60 図	43号横穴実測図（中村実測、富田製図）	48
第 61 図	43号横穴出土遺物実測図（中村実測、富田製図）	48
第 62 図	46号横穴実測図（中村実測、富田製図）	50
第 63 図	46号横穴出土遺物実測図（中村・富田実測、富田・有働製図）	51



# I 調査の経過

## 1. 調査に至る経過

国庫および県費補助を得て開始した遺跡詳細分布調査の菊池川中流域古墳・横穴群総合調査も4年目を迎えた。これまで昭和59年度は湯の口横穴群の調査、60年度は城横穴群の調査と湯の口横穴群調査報告書の作成、61年度は馬見塚古墳群をはじめとした古墳の調査と城横穴群調査報告書の作成、そして今年度は再び湯の口横穴群の調査および馬見塚古墳群調査を含めた報告書の作成を行った。

とくに今年度実施した湯の口横穴群については、昭和59年度事業として調査を実施し、数多くの成果をあげることができた。

とりわけ横穴群の規模については、湯の口溜池を中心に東西約1kmにわたって196基の横穴群を確認することができた。さらに、確認した横穴の外にも相当数横穴が埋没している可能性が高く、この段階で瀬戸戸横穴群に次ぐ県下第2位の大横穴群であることが明らかになり、今後の調査に期待をかけつつ昭和59年度の調査を終了したのであった。

このような状況において、県文化課からも再度分布調査を実施する様強い要望があり、市としても何とか実施したいと計画し、ようやく今年度実施するに至ったものである。

なお今回の調査は湯の口横穴群の中でも鹿本町と境を接する東端部を中心として長さ200mにわたる範囲において実施したものである。

また、横穴の号数については昭和59年度調査時に付した番号をもとに、新たに発見した横穴にはアルファベットを付した。

## 2. 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

総括 弓掛正久（山鹿市教育長）

調査団長 藤木正斗（山鹿市立博物館館長）

専門調査員 内藤芳篤（長崎大学医学部教授）

山本愛三（長崎県立野母崎高校教諭）

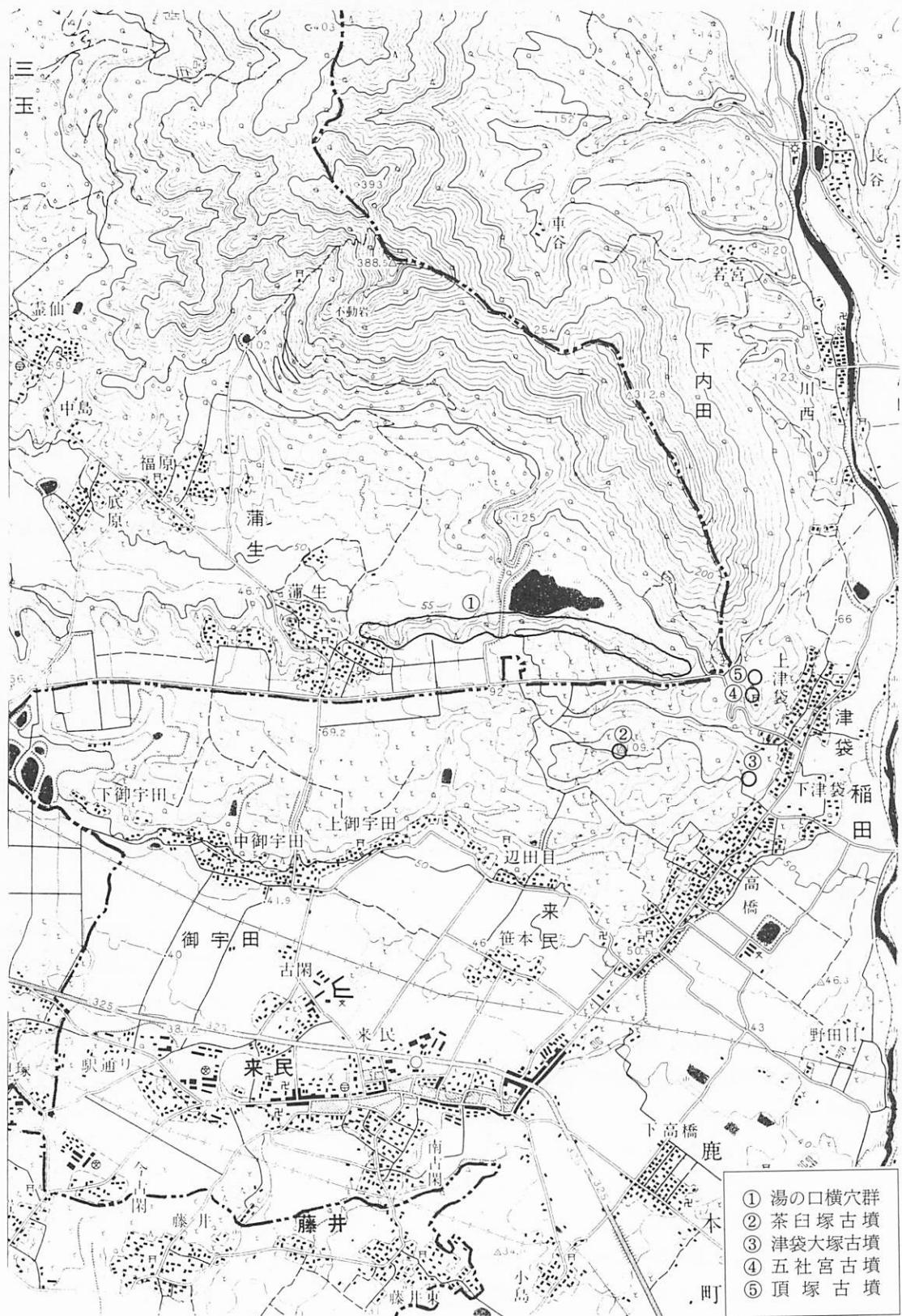
松下孝幸（長崎大学医学部助教授）

分部哲秋（長崎大学医学部講師）

調査事務 次木万里子（山鹿市立博物館事務吏員）

調査員 中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）

作業員 緒方泰男、野田辰起、前川誠一、脇山源市、木庭誠意、高橋信子、渕上美里、



第1図 周辺遺跡分布図

池田珠生、富田清子、国友紀里子

整理員 富田清子、国友紀里子、有働八千代

協力者 工藤公代、田北幸徳、田北幸博

## II 調査の成果

### 1. 横穴分布の概要

湯の口横穴群の地形と分布状況について、昭和59年度調査の段階では詳細な地形図の作成には至ることができなかった。そのため、横穴の分布も地理的要因も述べることができず、概略的な紹介をするに留まってしまった。<sup>註1</sup> その反省にたって今回の調査においては地形測量および横穴配置図の作成と横穴内部の実測を行うことを目的として実施したものである。

従ってここでは今回調査対象とした地区200mにわたっての分布状況を述べるもので、全体的な紹介は先の報告書を参照していただきたい。

さて、調査対象とした地区は、湯の口溜池堤防から東へ約550m～750mの区域で、横穴群東端部の1号横穴から72号横穴の間である。この中で52号横穴から72号横穴までは昭和59年度の調査で一部実測調査を終わっていたが、今回は地形測量と横穴配置図作成をするために再度調査区域内に含めたものである。

調査した地は、御宇田台地の東端部北側斜面にあたり、東側が最も高く標高116.5mを測り西側に向かって低くなっている。また斜面の比高差は横穴が分布している範囲においては、概ね25～35mの比高差を保っている。これらの地域は樹齢100年以上の榎や棕の大木をはじめ、杉、檜がしっかりと根を張り、深い森林を形成している。そのため自然の力によっての風化作用はもとより、樹木の倒壊によっても地形の変化が生じている。この様な状況の中において、今回の調査対象地区には大小5の谷が刻まれ、それぞれ左右には小さな尾根が両腕の様に延びており、谷の奥や尾根の末端部を中心として横穴が構築されていた。東から1番目の谷として、西側へと概観してみるとこととしよう。

1番目の谷は溜池堤防から約750mの位置にあたり、間口35m、奥行50mで中央は段々畠状に5段の平坦面が見られ、全面に杉が植えられている。そのため昼でも薄暗い状態である。横穴は谷の奥を中心に分布しており、尾根の基部や先端にも存在することが確認された。

横穴は奥の斜面に僅かに延びる平坦面に埋没した状態で検出されているが、これらは総じて天井部を欠いており、この平坦面が旧状を示すものでないことは容易に判断できる。従って羨門の位置から本来平坦面となるべき所は、現在横穴が位置している平坦面の北側斜面であることが考えられる。

この谷ではかつて9基程度が存在すると推察していたが、今回新たに11基を確認し合計20基の存在が明らかとなった。

2番目の谷は間口30m、奥行60mで中央部は同じく段々畠状に平坦面を造り、杉の大木と雑草が繁茂し、立入ることができない状況である。そのため測量も一部未完成のままである。

この谷では奥壁に沿って数基が開口しており、とくに9、14～16号横穴は完全な姿で開口していた。従ってこの段は旧地形を留めているものと判断された。

さらに右側には今回新たに発見した17—B、C、D号横穴をはじめ、多くの横穴が埋もれている可能性が高い。

これらの上位にも11号横穴が羨門上部を壊しながら開口しており、他にも11基程度その存在が確認されている。左右の尾根の基部と先端部でも8基を新たに確認し、総数28基の存在を明らかにした。

3番目から間口が多少小さくなり、台地上からの斜面が広くなっている。そのため間口33m、奥行45mを測る。この谷も中央部は5段の平坦面を有し最上段に20—C～23号横穴まで築いている。

これらの上位には横一列に並んで18～20—B号横穴が存在していることが明らかとなった。左右の尾根でも4基程度確認し、これまでに13基が存在していることが判明した。

4番目の谷は間口30m、奥行40mで、このうち台地上からの斜面が約20mを測る。そのため平坦面および横穴構築地点までは20mの奥行を測るのみである。

中央部は4段の平坦面を築き、横穴は奥壁に面した部分と、尾根の先端部に集中して見ることができる。この部分では総数17基の存在が明らかになった。

5番目の谷は間口25m、奥行40mで、台地上からの斜面12mを差し引いても、谷の入口から奥壁までは28m程度である。平坦面は5段目までは数えることができ、奥壁および左右の尾根に横穴が築かれている。この谷ではかつて14基の横穴を確認していたが、今回30基の存在が明らかとなった。

5番目の谷と6番目の谷の間には約40m幅の尾根が延びており、この周辺に24基の横穴が見られ部分的ではあるが上下に6列の横穴が構築されていたことが明らかとなっている。

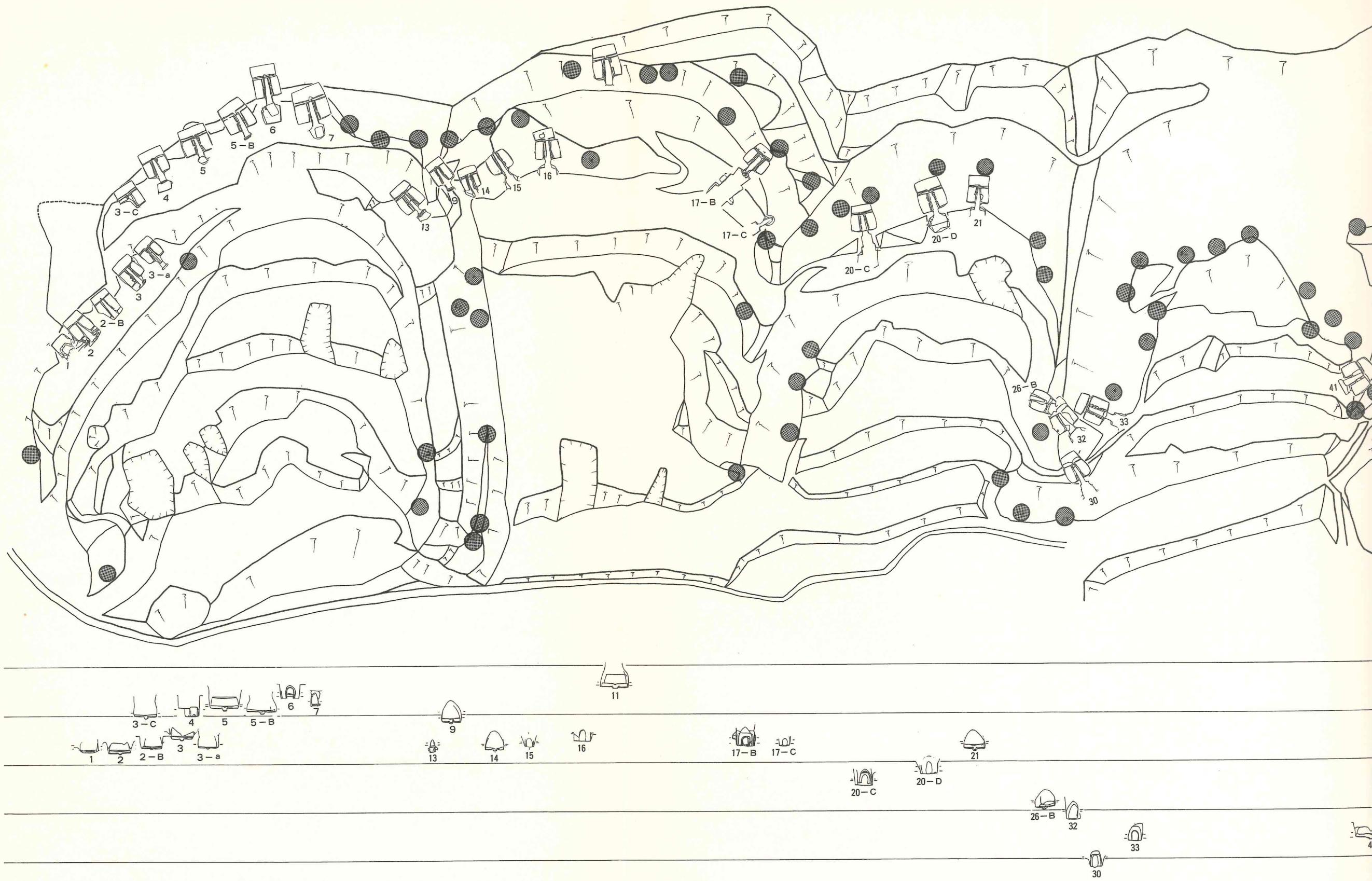
なおこの部分は昭和59年度調査の際、その対象としていたが、今回は配置図に入れるためあえて再度その対象としたものである。なお今年度調査した範囲においては、かつて72基を確認していたに過ぎなかつたが、今回新たに60基を確認することができた。従って、昭和59年度総数198基していたものが、少なくとも258基存在することが明らかになった。さらに今後の調査で増加する可能性は非常に高い。

註1.「湯の口横穴群」山鹿市教育委員会1986

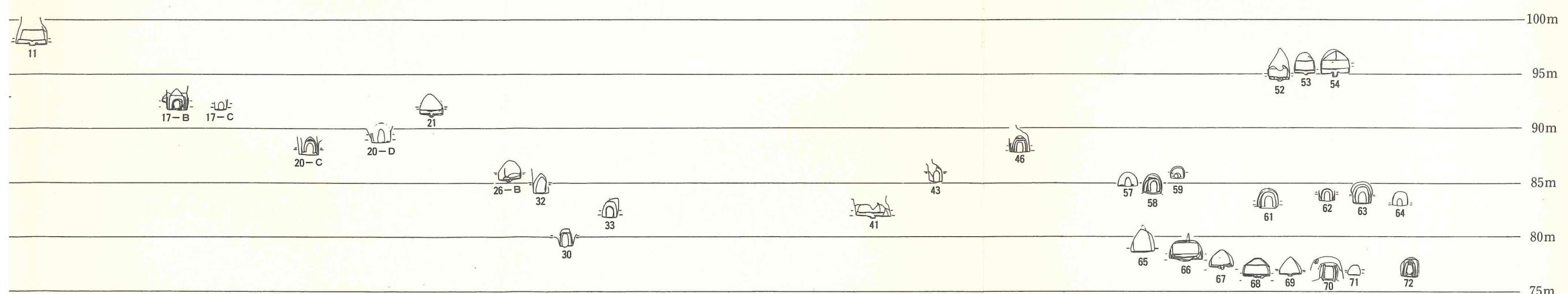
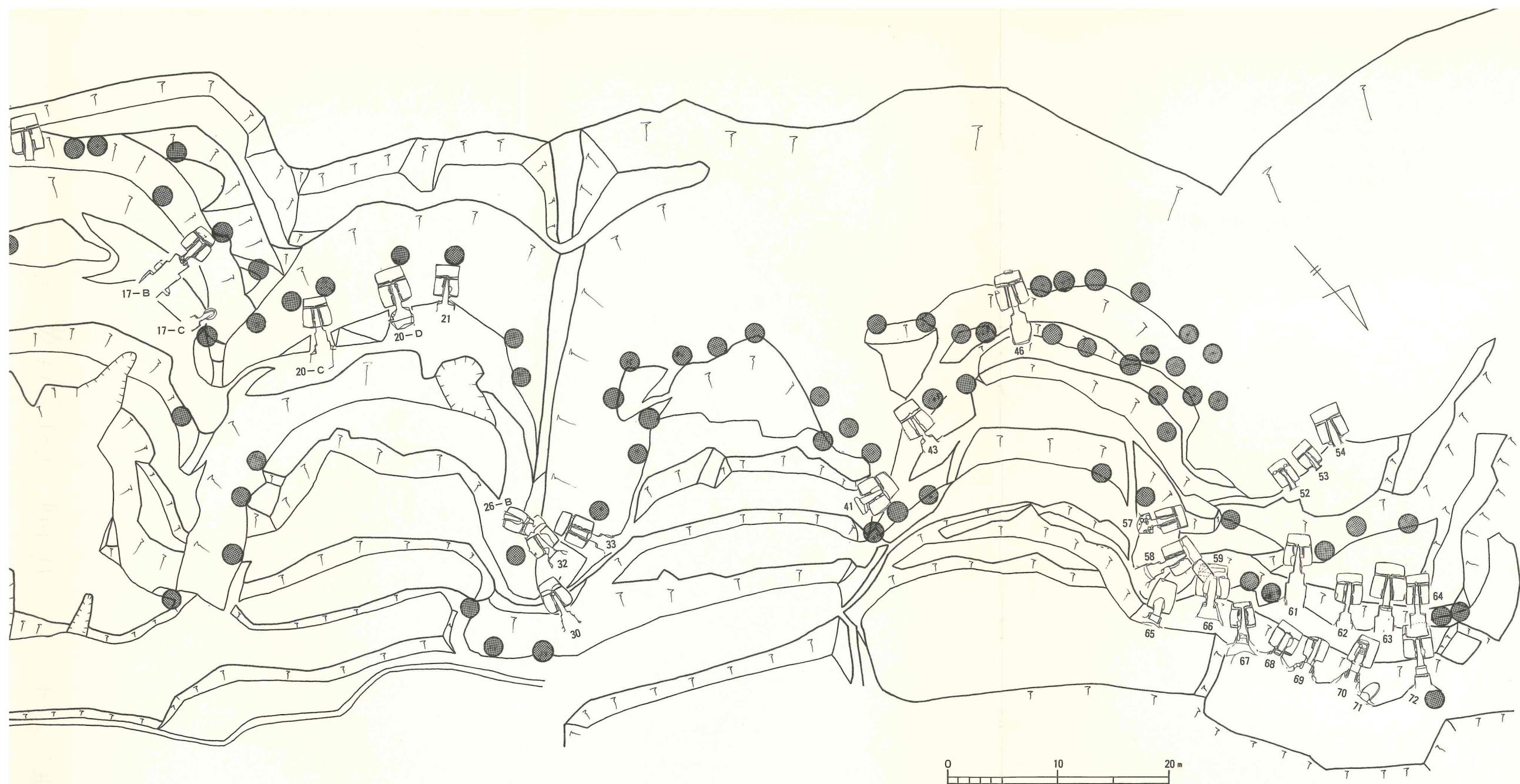
## 2. 横穴と遺物

### 1号横穴

1号横穴から3—B号横穴までの6基は、1番目の谷の左側壁近くの長さが23m、幅5m、標高97mの小さなステップに築かれていた。これらはすでに天井部を欠いており、現状では床面を残すのみで埋没した状態であった。



第2図 横穴配置図



第2図 横穴配置図

1号横穴はその中でも最も左端部に位置し、主軸を N10°E とほぼ北に向かって築いている。羨門および天井を全て欠いており、床面の一部も削り取られていた。そのため残存部分から玄室プランは長方形に近く、僅かに奥壁の166cmを測るのみで、屍床も平坦となっている。なお羨門部では岩盤に亀裂が生じているところから、羨門の崩壊は自然現象によるものと考えられる。また、亀裂は2号横穴の方向に延びており相当大きな力が加わったものと思われる。

#### 遺物

埋土中より須恵器片が僅かに2点出土

している。1は平瓶の口縁部で12径8cmを測る。器面は両ナデ仕上げで、胎土は砂粒を含まない。2も平瓶の破片である。表面にはカキ目を施している。

#### 2号横穴

1号横穴の右側に隣接する様に築かれていた。さらに右側には今回新たに発見した2-B号横穴が存在する。

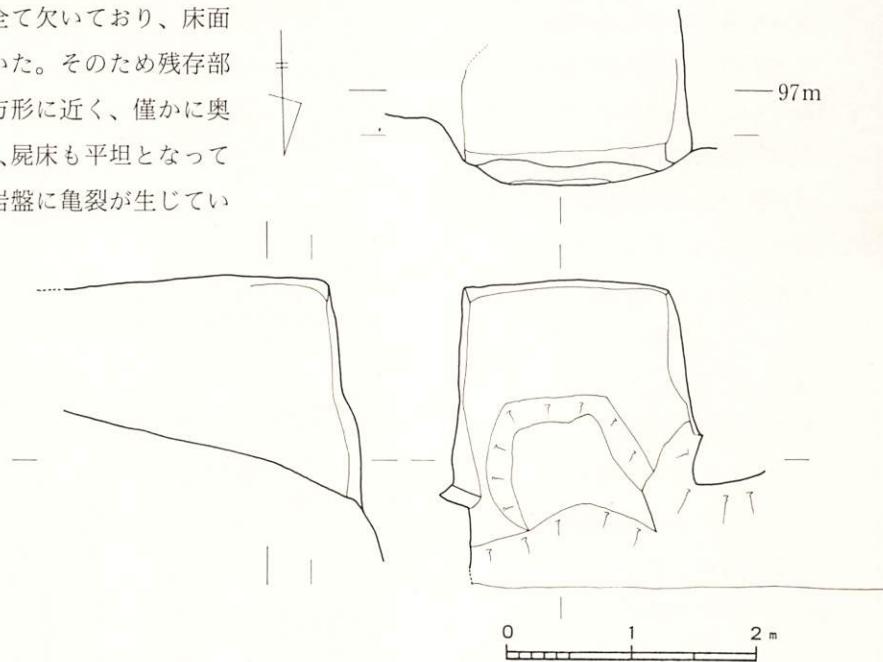
1号横穴との先後関係は不明で、天井は完全に近く欠損した状態で埋没していた。主軸は N 0°E と磁北に向かって開口する様に築かれている。

羨門部は下部  $\frac{1}{3}$  程度しか残っておらず、閉塞石も欠いていた。さらに1号横穴より延びて来た亀裂が羨門にまで達しており、崩壊の一因となったものと考えられた。羨門から20cm程外側には根固め石が3個顔をのぞかせていた。この石は角閃石の礫で非常に堅くて重い石であった。玄室は長方形プランで、入口部幅220cm、奥壁幅204cm、左側壁245cm、右側壁245cmを測った。

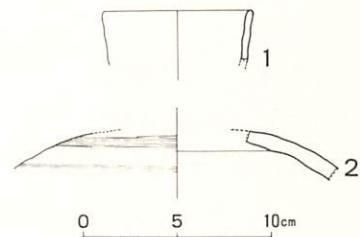
屍床は「コ」字形で仕切や排水用の溝は刻まれていなかった。

#### 遺物

埋土中より須恵器片が数点出土した。1は壺蓋の破片である。天井部は平坦でヘラ削りを行っているが、つまみの有無については不明である。かえりは短くて太目である。口径7.2cm、最大径9.8



第3図 1号横穴実測図



第4図 1号横穴出土遺物実測図

cm、かえり高0.9cmを測る。胎土には砂粒を含み、焼成も良くない。そのため須恵器と土師器の中間みたいな出来である。色調は全面黒色である。2は平瓶口縁部から頸部の破片である。口径は11cm程度になるが、全体の大きさは不明。胴部外面にはカキ目を施している。色調は小豆色に近い。この他平瓶の破片が出土していたが、2-B号横穴出土の資料と接合したので、そちらで併せて記すこととした。

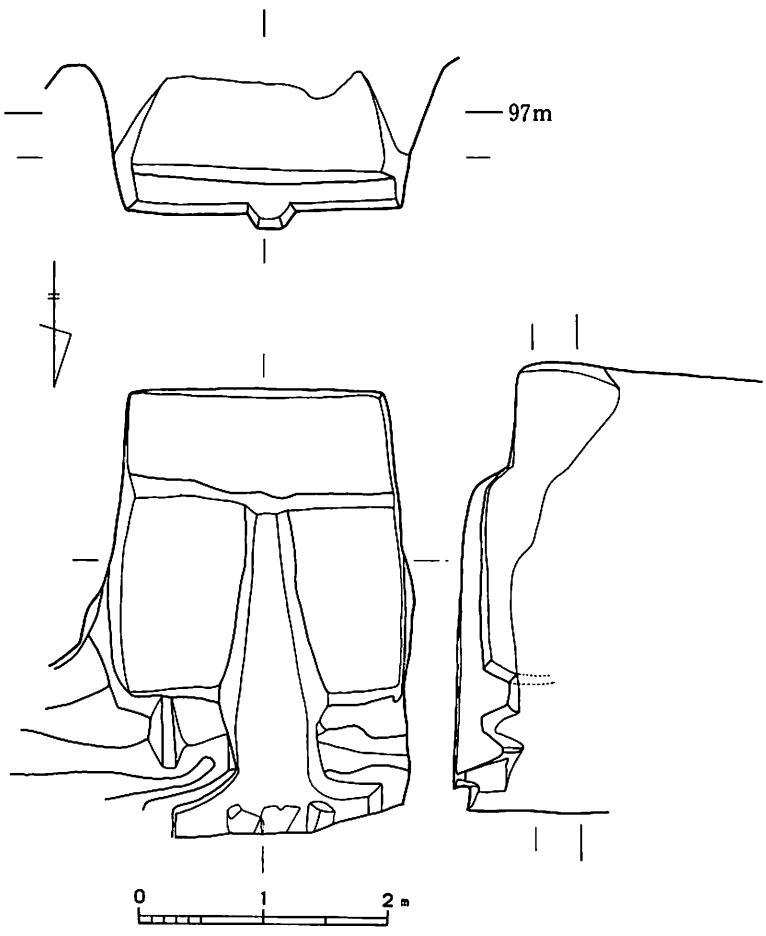
## 2-B号横穴

2号横穴と3号横穴の間から今回新たに発見されたもので、2-B号横穴とした。主軸はN 3°E でほぼ北に向かって開口する様築かれている。現状では天井部と羨門、壁面の殆どが壊され、僅かに床面が原形を保っていると言えよう。羨門は $\frac{1}{3}$ 程度も残っておらず、その形状は不明であった。プランは長方形になるが、杉の根のため左隅は確認できなかった。そのため奥壁幅188cm、右側壁244cmを測るのみである。

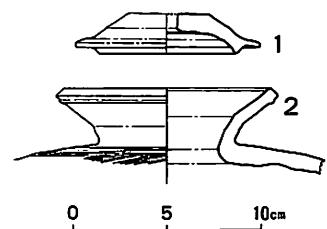
屍床は「コ」字形で、左右の屍床には仕切を有しているが、奥屍床には見られなかった。しかし排水溝の切り込みは3ヶ所全てに施されていた。天井は壁面と共に崩壊しているので形状不明であるが、奥壁左右隅棟線の一部が残っていた。軒の確認も出来なかった。

### 遺物

埋土中より須恵器片と鉄片が出土した。また、左側屍床からは頭蓋骨の一部が出土したが図化しなかった。



第5図 2号横穴実測図



第6図 2号横穴出土遺物実測図

1は壺蓋である。

半欠の状態である  
が口径11cm器高は  
3.9cm前後になる  
ものと思われる。  
かえりを有せず、  
天井部は回転ヘラ  
ケズリを施してい  
る。胎土には僅か  
に砂粒を含むが、  
焼成は良く白灰色  
を呈している。

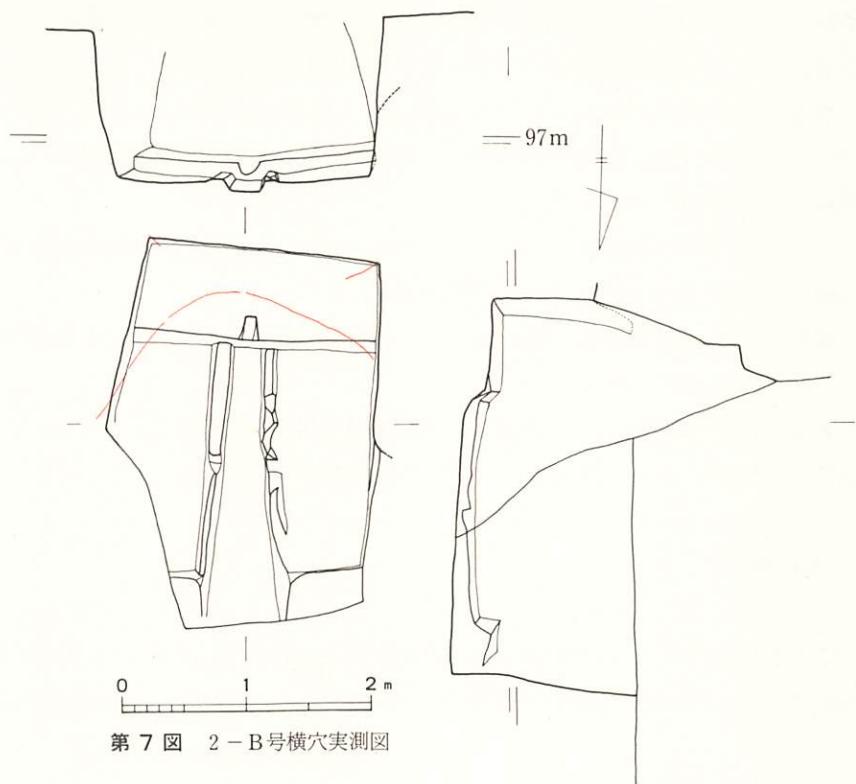
2はかえりのあ  
る壺蓋である。半  
欠の状態だが口径  
9cm、最大径11cm  
器高3.1cmを測る。  
かえり高は0.4cm

で内傾している。  
天井部は回転ヘラ

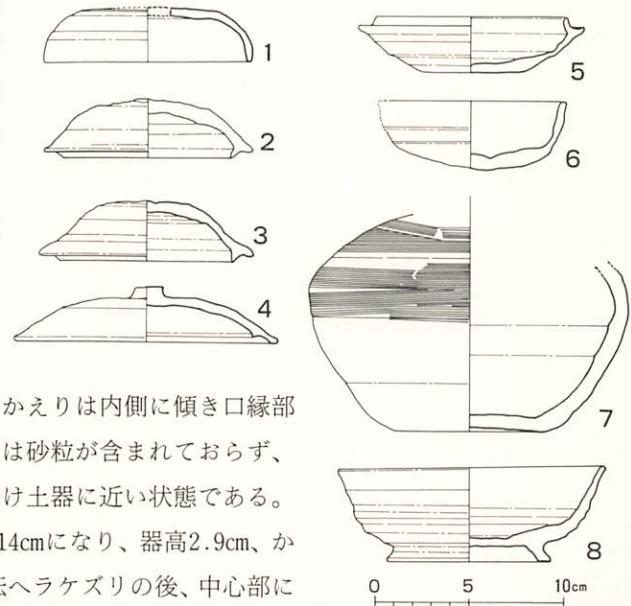
ケズリで、中心部に僅かにつまみ状に粘  
土が盛り上がって、さらにヘラ記号  
を記している。全体の仕上がりは雑で胎  
土に砂粒を含んでいる。焼成は良く暗灰  
色を呈していた。

3もかえりのある壺蓋である。半欠の  
状態で口径9cm、最大径11.4cmになる。  
器高は3.2cm、かえり高は0.4cmを測る。  
天井部は小さく、肩が張る如く裾部へと  
続き、口縁部近くで大きく開いている。かえりは内側に傾き口縁部  
から僅かに出る形となっている。胎土には砂粒が含まれておらず、  
焼成も良好である。色調は茶褐色で赤焼け土器に近い状態である。

4も壺蓋である。口径11.4cm、最大径14cmになり、器高2.9cm、か  
えり高は僅か0.2cmである。天井部は回転ヘラケズリの後、中心部に  
は上部が平垣なつまみを有している。胎土には砂粒を含み、焼成も  
良くない。色調は暗灰色である。



第7図 2-B号横穴実測図



第8図 2-B号横穴出土遺物実測図

5は壊身で半欠の状態である。口径10cm、最大径12cm、器高2.9cmになる。立上り高0.6cmで、やや傾き気味である。受け部は浅くなっている。胴部はナデ調整で、底部は回転ヘラケズリを行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く暗灰色を呈している。

6も壊身である。立上りを有せず口径9.8cm、器高3.6cmになる。底部は平坦にならず、回転ヘラケズリを施している。口縁部はやや開き気味に直口し、全体に器壁が厚い。仕上りも多少粗く胎土、焼成ともあまり良くない。青灰色をしている。

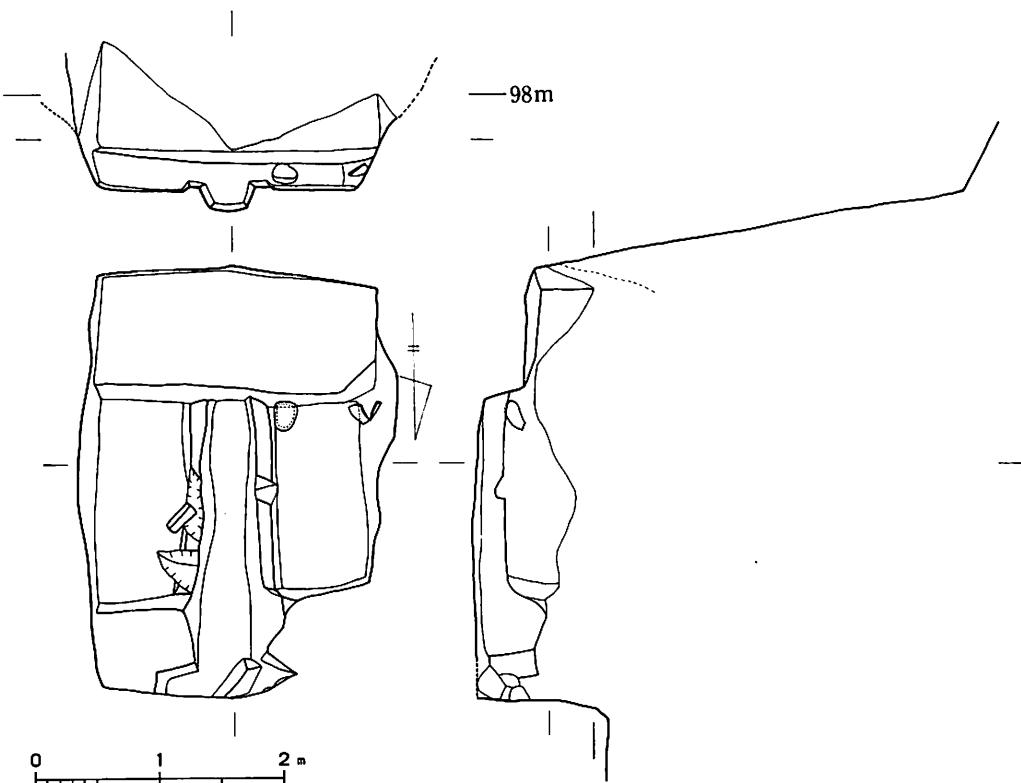
7は平瓶で口縁部を欠いているため最大径17cmのみを測る。この資料は2号横穴埋土から出土した破片と接合したもので、本来の位置が問題となろう。

胴部上位はカキ目を施し、他は全面ナデ調整を行っている。胎土にはあまり砂粒を含まず焼成も良い。黒灰色を呈している。

8は高台付の碗である。口径14cm、器高5cmを測る。口縁部は反り気味に開いている。器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが焼成は良く白灰色を呈している。

### 3号横穴

2-B号横穴と3-A号横穴に挟まれた位置に存在する。主軸はN 0°Eと北に向かって開口する様築かれているが、玄室および羨門の天井と壁面の大半を欠いており、僅かに床面近くのみを残



第9図 3号横穴実測図

している。そのため羨門の形状や玄室天井の形態についているのは不明である。羨門の外側には閉塞石根固石数個が顔をのぞかせている。玄室は長方形のプランで入口部分幅222cm、奥壁226cm、左側壁270cm、右側壁236cmを測る。

屍床は「コ」字形で2-B号横穴同様、奥屍床には仕切が見られず、左右屍床のみに設置していた。なお排水溝については右屍床のみ残しており、左屍床は一部破損しているため不明。

#### 遺物

埋土中より須恵器と土師器片が少量出土したが細片のため図化しなかった。また須恵器は平瓶の破片で2-B号横穴出土の資料と接合できた。その結果2号横穴、2-B号横穴、3号横穴から同一資料の破片が出土したこととなる。いずれも埋土中の出土であることから、これらの横穴の副葬品とは断定できず、単に埋土に混入したと見る方が妥当であろう。ただこの混入が人為的なものか自然現象による遺物の転落破損なのかは断定できなかった。

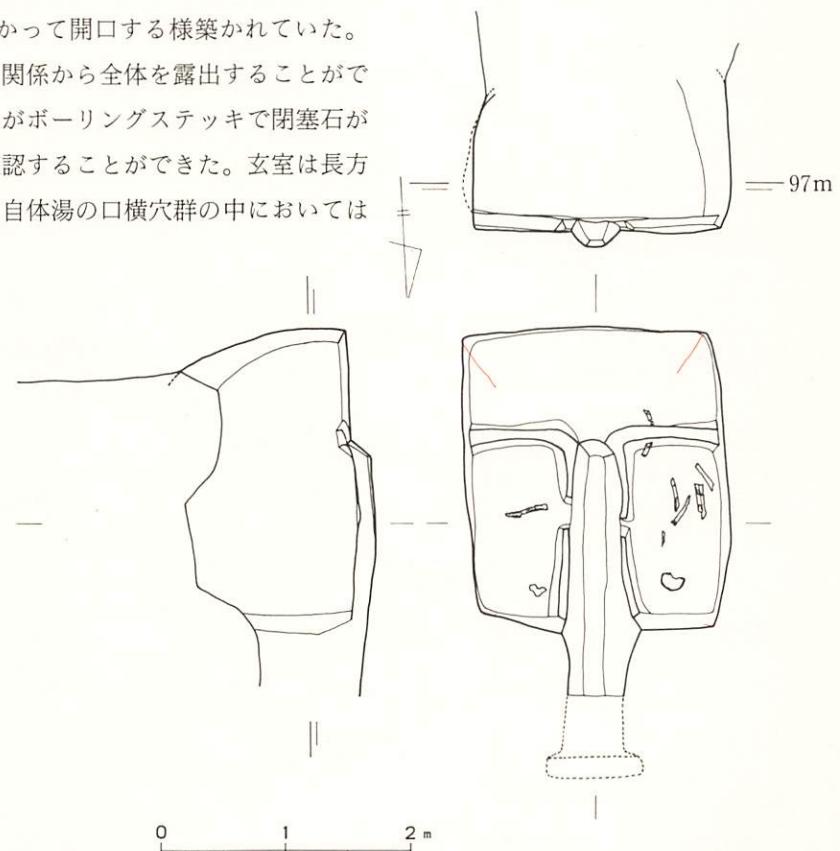
### 3-A号横穴

3号横穴と3-B号横穴の間から発見されたので3-A号とした。玄室および羨門の天井部はすべて欠損しているが、壁面は半分程度を残している。主軸

はN 3°Eとほぼ北に向かって開口する様築かれていた。

羨門は調査区域と排土の関係から全体を露出することができず、形態は不明であるがボーリングステッキで閉塞石が立てられていることを確認することができた。玄室は長方形に近いプランで、広さ自体湯の口横穴群の中においては小さい部類に属し、入口部分幅190cm、奥壁198cm、左側壁220cm、右側壁235cmを測る。

屍床は「コ」字形で各屍床とも仕切を有し、とくに奥屍床の仕切は左右屍床の仕切と「L」字状に連続して刻まれ天井は欠いているが、四隅で隅棟線の一部を残しているところからドーム状になる可能性が高い。



第10図 3-A号横穴実測図

## 遺物

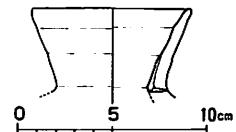
人工遺物の出土は少なく、人骨が左右屍床より検出された。左屍床では頭蓋骨片と大腿骨の一部が検出され、右屍床では頭蓋骨、大腿骨、脛骨の一部が2人分検出された。

## 3-B号横穴

3-A号横穴の右側で新たに発見した横穴である。ステップ右端に埋没した状態で存在し、現在閉塞石が立った状態で土手に顔をのぞかせている。さらに杉の根によって天井部を崩壊しており、石室の空間が確認されている。なお今回は杉の木を切り倒さなければならぬため内部の調査は出来なかった。

## 遺物

閉塞石外側の羨門前庭部より平瓶の口縁部1点が出土した。多少歪んでいるため口径は長軸8.9cm、短軸8cmの不正円となっている。胎土には砂粒を含むが焼成は良く暗灰色を呈している。

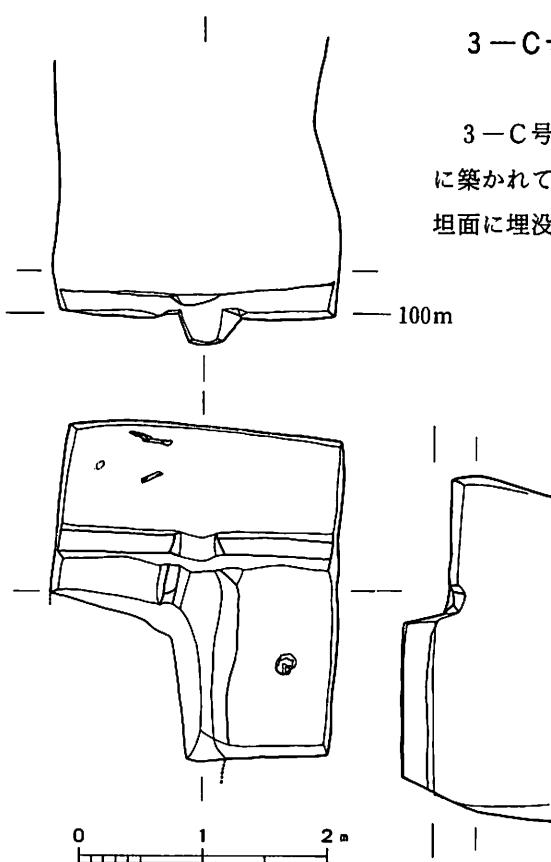


第11図 3-B号横穴出土  
遺物実測図

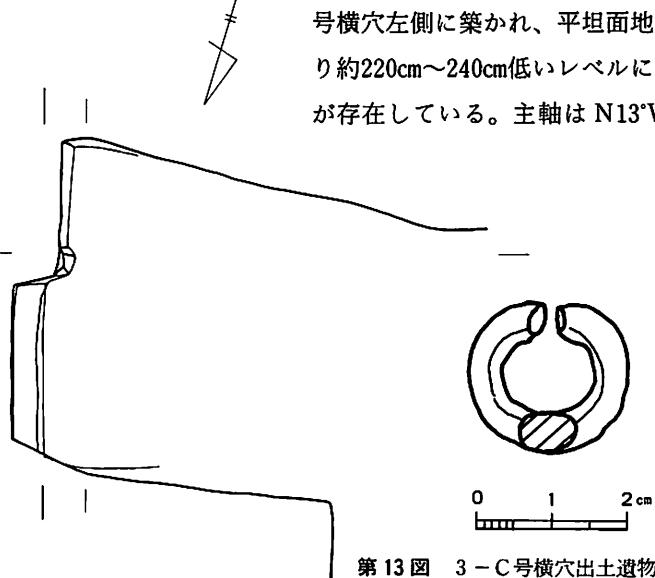
## 3-C号横穴

3-C号横穴から8号横穴までの9基は1番目の谷の奥壁に築かれており、現在長さ34m、幅5~7mの三か月状の平坦面に埋没した状態で存在している。この平坦面は標高102m

前後を測り、先の1号~3-B号横穴の段より一段高くなっている。4号横穴左側に築かれ、平坦面地表より約220cm~240cm低いレベルに床面が存在している。主軸はN13°Wで



第12図 3-C号横穴実測図



第13図 3-C号横穴出土遺物実測図

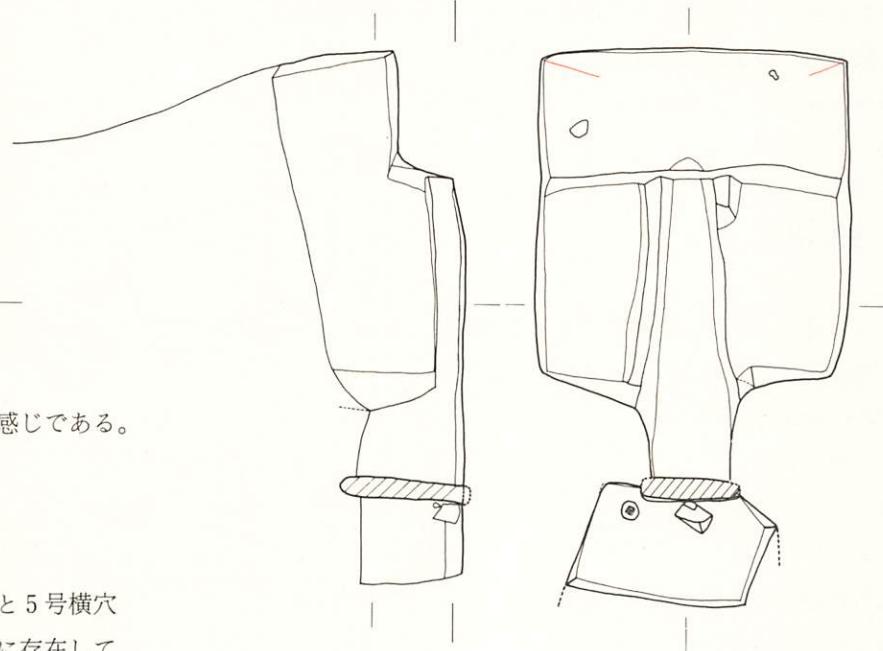
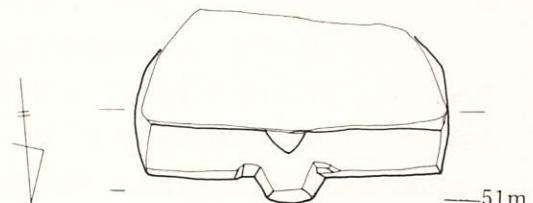
北と北北西の中間に向かって開口する様築かれているが、天井部を崩壊し、さらに杉の根が広がっているので横穴全体を調査することができなかった。従って、羨門の形態も不明で、玄室プランも方形に近いが僅かに奥壁220cm、右側壁251cmを測ることができる。

屍床は「コ」字形で奥と左側屍床には仕切を配し、右側屍床には奥屍床寄りにその痕跡を残すのみであった。なお奥屍床仕切の中央には排水溝を刻んでいた。天井は崩壊しているため形態は不明である。

#### 遺物

奥屍床では大腿骨と脛骨の一部が検出されたが、左側より耳環が出土しており、頭位を左にしていたと推察された。右屍床からは頭蓋骨が検出された。耳環は全面に緑青が付着していたが、一部除去したところ金環であることが判明した。

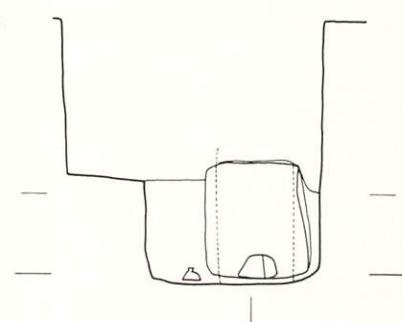
金は全面に残っており、他の耳環においても再度見直すべきであると痛感した。  
最大径2.16cm、重さ11.2gを測り、大きさの割には重たい感じである。



#### 4号横穴

3-C号横穴と5号横穴に挟まれた位置に存在している。天井と壁面の $\frac{1}{3}$ を欠いた状態で埋没していた。主軸はN 5°Eを測り、ほぼ北に向かって開口する様築かれている。羨門には長さ95cm、幅85cm、厚さ17cmの凝灰岩切石の閉塞石を立て、根固石1個を外側に置いている。玄室は長方形で入口部分幅233cm、奥壁247cm、左側壁251cm、右側壁254cmを測る。この例は3-C号横穴でも見ることができる。なお奥屍床

第14図 4号横穴実測図



には仕切は見られなかった。また、左屍床仕切には排水溝を見出すことができなかった。天井は全て崩壊しており、僅かに隅棟線の一部を残していたところからドーム状になるものと考えられる。

#### 遺物

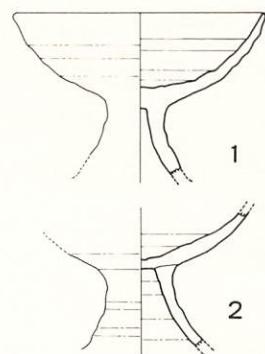
羨門外側の閉塞石左側から赤焼土器の高壺が壺部を下にしておかれていた。玄室内では奥屍床の左右から頭蓋骨の一部が検出され、右側屍床からは四肢骨の一部が検出された。これらは保存状態が極めて悪く、そのまま埋め戻して調査の対象としなかった。

1は赤焼土器の高壺である。脚裾部を欠いているが、ほぼ原形を保っている。壺部口径は14cmを測り、器高は現長8cmである。無蓋の高壺で、口縁部は内湾気味に大きく開いている。脚はしづらながら壺部と接合している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。

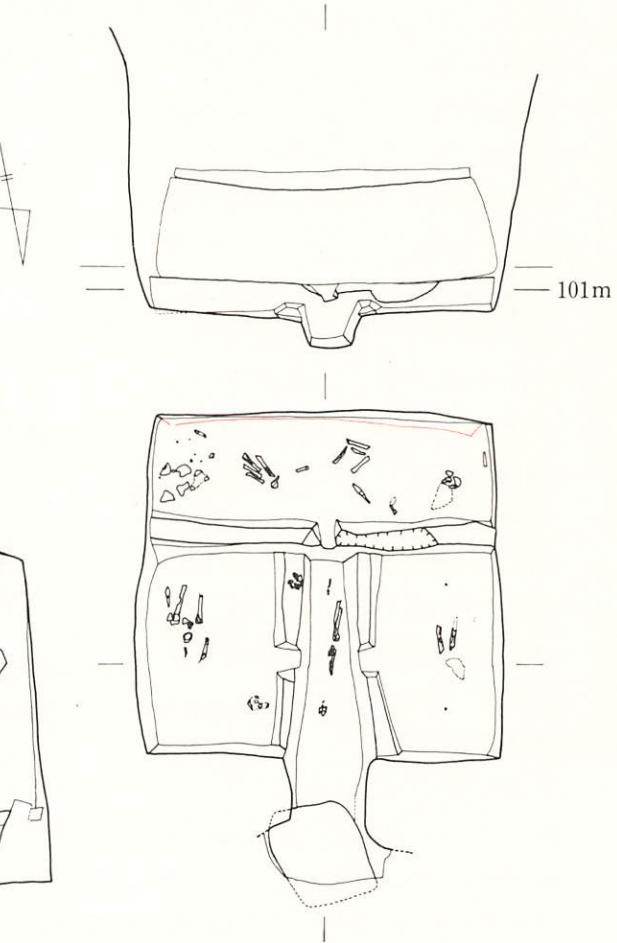
2も埋土中からの出土であるが赤焼土器の高壺である。口縁部と脚裾部を欠くため大きさは不明。胎土には砂粒を含まず、焼成も良く、堅く仕上っている。

#### 5号横穴

4号横穴の右側に位置し、5-B号横穴に挟まれて存在している。平坦面の地下表160~180cmの深さに築かれているが、すでに羨門および玄室の天井は崩壊し埋没していた。主軸はN11°Eを測り、北と北北東の間に向かって開口する様に築かれている。羨門外側には凝灰岩切石の閉塞石が引き倒された状態で残され



第15図 4号横穴出土遺物実測図



第16図 5号横穴実測図

ていた。玄室は正方形に近いプランで入口部分幅297cm、奥壁271cm、左側壁272cm、右側壁270cmを測り、比較的大きい横穴と言えよう。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を設け、中央部に排水溝を刻んでいた。天井は全面的に崩れているため形式は不明だが、奥壁に軒先線を残していた。

### 遺物

人工遺物は埋土中から刀子が出土し、人骨が各屍床より検出された。奥屍床では3人、左屍床は2人、右屍床では1人分の計6人分の人骨が検出された。

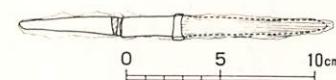
刀子は折れているが、全長16.6cm、重さ21gを測る。茎には木質が付着し、刀部も鋒の付着が著しい。

### 5—B号横穴

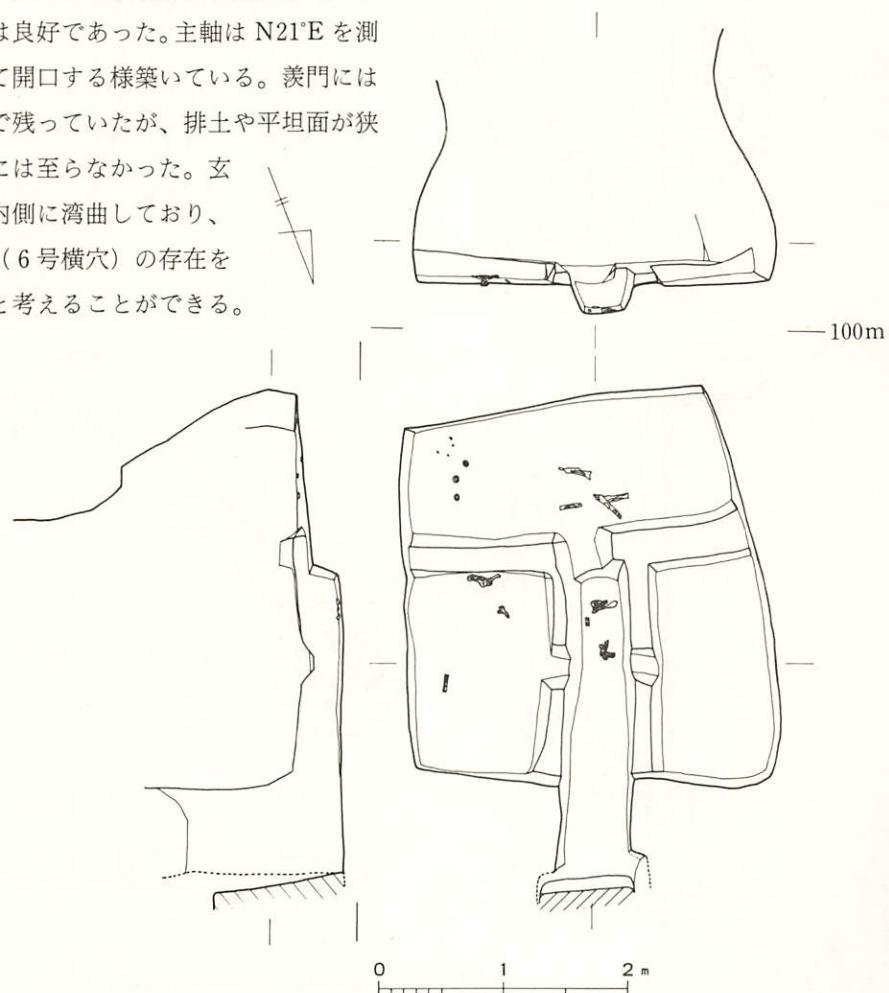
谷の奥壁中央部近くに築かれており5号横穴と6号横穴の間から新たに発見された横穴である。天井部を崩壊しているが横穴自体保存状態は良好であった。主軸はN21°Eを測り、北北東に向かって開口する様築いている。羨門には閉塞石が立った状態で残っていたが、排土や平坦面が狭いため前庭部の調査には至らなかった。玄室は右側壁が大きく内側に湾曲しており、明らかに右側の横穴（6号横穴）の存在を意識した築造であると考えることができる。

そのため、入口部分幅285cm、奥壁291cm、左側壁251cm、右側壁320cmを測る。

屍床は「コ」字形で各屍床には幅広い仕切を造っているが、とくに奥屍床においては左右屍床のそれと「L」字状に連続性をもつたものとなっていた。この様な例は3—A



第17図 5号横穴出土遺物実測図

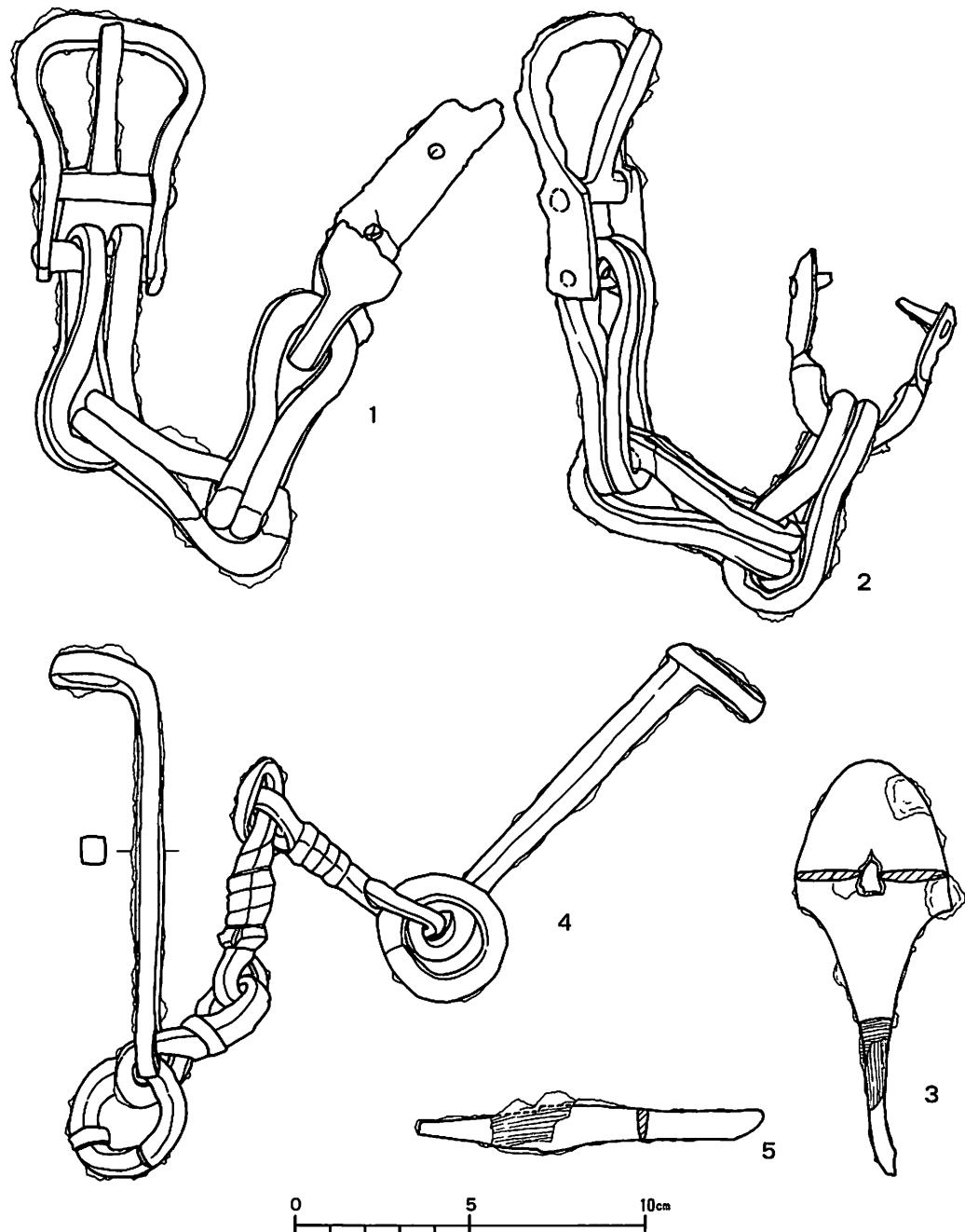


第18図 5—B号横穴実測図

号横穴に見ることができるが極めて少ない。さらに仕切中央には排水溝を刻んでいた。天井部は崩壊しているため形態は不明である。

#### 遺物

土器の出土は見られなかつたが、鉄器が集中して出土した。奥屍床では3個の耳環、左屍床からは轡と刀子、通路では鑑2点と鎌が出土した。とくに馬具類に関しては保存状態が極めて良好であ



第19図 5-B号横穴出土遺物実測図

った。人骨は奥屍床から大腿骨と歯、左屍床からは四肢骨の一部が検出された。

1と2は通路から出土した鎧である。これはむろん対になるもので鉢具と3連の兵庫鎖、さらに壺證へと連なっている。共に保存状態が極めて良く、鉢具と鎖さらに鎧金具は可動する状態である。とくに鉢具と兵庫鎖を繋ぐ芯棒には著しい磨滅が観察される。この磨滅は芯棒の片側に偏って生じており、1が右側を2が左側を磨滅していたところから、恐らく1を左足、2を右足に使用していたものと考えられる。またその使用頻度の高さを示しているものとして、1の芯棒は本来直径0.94cmの太さであったのが0.6cmまで細くなっている、2は0.77cmのものが僅か0.26cmになで細くなっていた。

同様のことが兵庫鎖と鎧本体との接点でも観察することができた。これらのことから考えても鎧にかかる力とその頻度の高さを示す資料として貴重な資料と言えよう。なお1は重さ336g、2は335gとほぼ同じ重さである。

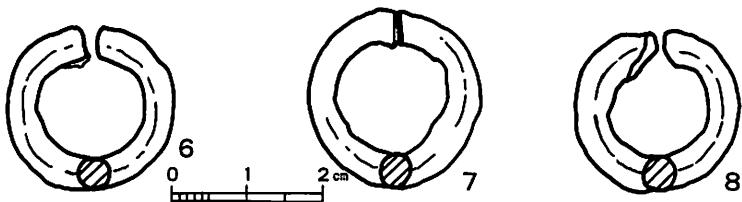
3も通路から出土した資料で1の下から検出されたものである。現長11.8cm、幅4.4cm、厚さ0.3cm、重さ36.2gを測る広根鎌で身の中央には透かしを入れている。

4の轡と5の刀子は左側屍床より出土したもので、とくに轡は1、2の鎧とセットになるものである。この資料も保存状態が極めて良好で喰の部分が可動する状態であった。鏡板は素環で喰は「8」字形に振り3本で構成されている。重さは231gを測る。

5は刀子で全長9.9cmのうち茎3.4cm、刃部は幅0.9cm、厚さ0.3cmで重さ10.2gを測る。茎に鹿角製茎の破片が残っていた。

6～8は奥屍床左側からほぼ1列に並んで出土した耳環である。これらがほぼ等間隔になって出土しているためいずれがセット関係にあるのかを明らかにすることはできなかった。

これらは鉄地金張りの耳環で6は最大径2.2cm、重さ4.7g。7は最大径2.3cm、重さ6g。8は最大径2.2cm、重さ7.9gを測る。



第20図 5-B号横穴出土遺物実測図

## 6号横穴

5-B号横穴と7号横穴の間に位置し、谷奥壁の中央部にあたる所に存在している。横穴自体が、他の横穴に比べると奥に入り込んでいたため、ほぼ完全な姿で検出することができた。主軸はN29°Eを測り、ほぼ北北東に向かって開口する様築かれていた。羨門外側には長さ120cm、幅88cm、厚さ13cmの凝灰岩切石の閉塞石が引き倒された状態で出土した。羨門は高さ104cm、幅65cmのアーチ形で、玄室まで70cmを測る。玄室は壁面が直線的な長方形で、入口部分258cm、奥壁245cm、左側壁327cm、右側壁313cmを測る。

屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を造り、中央部には排水溝を刻んでいた。とくに奥屍床の仕切は、左右側壁に立ち上る様な格好をとっていた。天井は切妻造の妻入りとなっており、妻側には棟持柱を刻んでいた。さらに壁面上部には線刻で軒先線を巡らしていた。横穴としては整った形

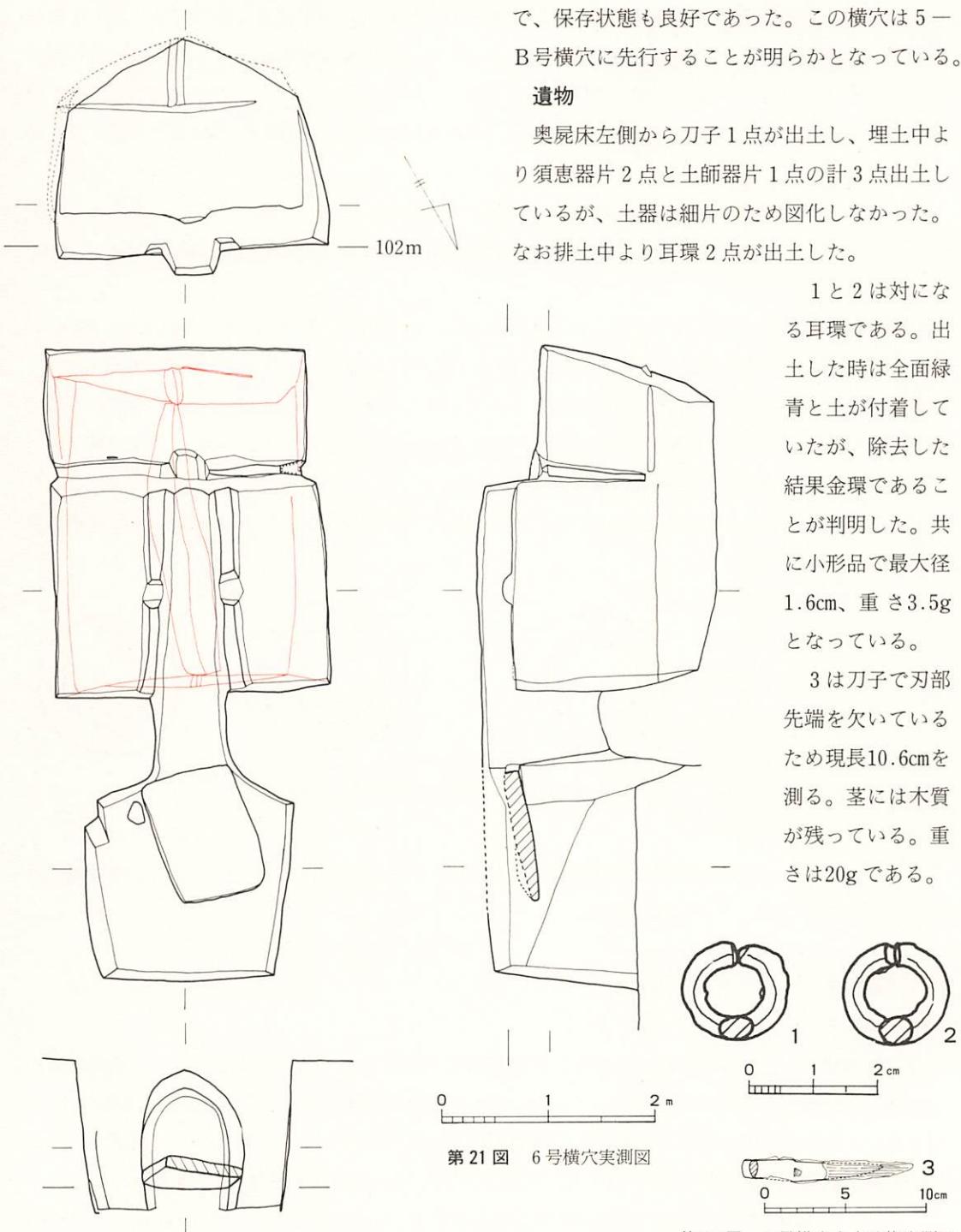
で、保存状態も良好であった。この横穴は5—B号横穴に先行することが明らかとなっている。

#### 遺物

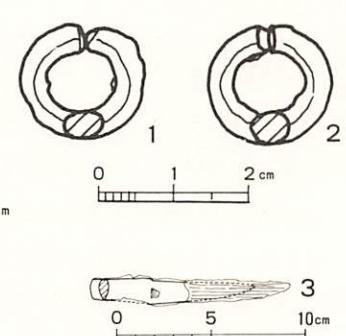
奥屍床左側から刀子1点が出土し、埋土中より須恵器片2点と土師器片1点の計3点出土しているが、土器は細片のため図化しなかつた。なお排土中より耳環2点が出土した。

1と2は対になる耳環である。出土した時は全面緑青と土が付着していたが、除去した結果金環であることが判明した。共に小形品で最大径1.6cm、重さ3.5gとなっている。

3は刀子で刃部先端を欠いているため現長10.6cmを測る。茎には木質が残っている。重さは20gである。



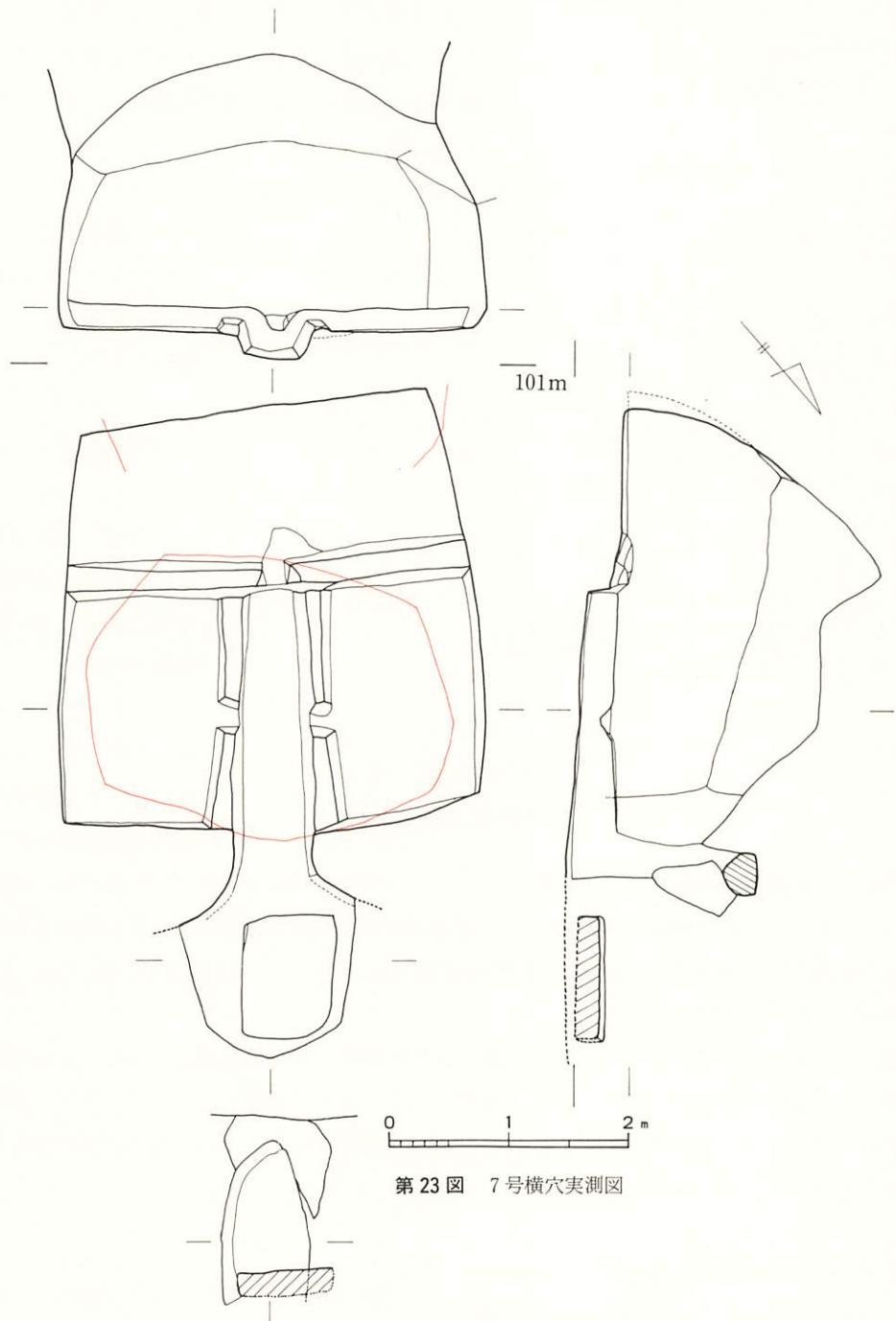
第21図 6号横穴実測図



第22図 6号横穴出土遺物実測図

## 7号横穴

6号横穴の右側に位置し、天井を大きく欠いた横穴である。主軸は N40°E にとり、ほぼ北東に向かって開口する様築かれていた。羨門外側には長さ105cm、幅79cm、厚さ18cmを測る凝灰岩切石の閉塞石が引き倒されており、羨門天井も破損が著しかった。玄室は極めて大きく、入口部分幅350cm、



第23図 7号横穴実測図



第24図 9号横穴実測図

奥壁292cm、左側壁324cm、右側壁340cmを測る。プランは台形に近いが、右側壁が大きく左側に曲がっており変形した形をとっている。このことは左側に横穴が存在していたことを示唆しており、7-B号横穴が先行して築かれていたことを推察できる。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を設け、中央部には排水溝を刻んでいる。天井は崩壊しているが、隅棟線が奥壁に沿って僅かに残っているところから、ドーム状になるものと考えられる。

#### 遺物

人工遺物の出土は見られなかったが、右屍床より人骨片が粉状になって検出された。

#### 9号横穴

9号横穴からは基本的には2番目の谷に面した横穴である。谷の奥壁左端部に位置し、この横穴の下には13号横穴と14号横穴が存在し、上部には8号横穴と10号横穴が存在している。横穴は主軸

をN 1°Wで、ほぼ北に向かって築かれている。さらに閉塞石を残し、羨門上部を崩壊した状態で開口していた。閉塞石は長さ100cm、幅64cm、厚さ18cmの凝灰岩切石を使用している。羨門上部を崩壊しているため羨門の形態は不明。玄室は直線的な壁面の長方形で小さく、入口部分幅195cm、奥壁178cm、左側壁245cm、右側壁250cmを測る。

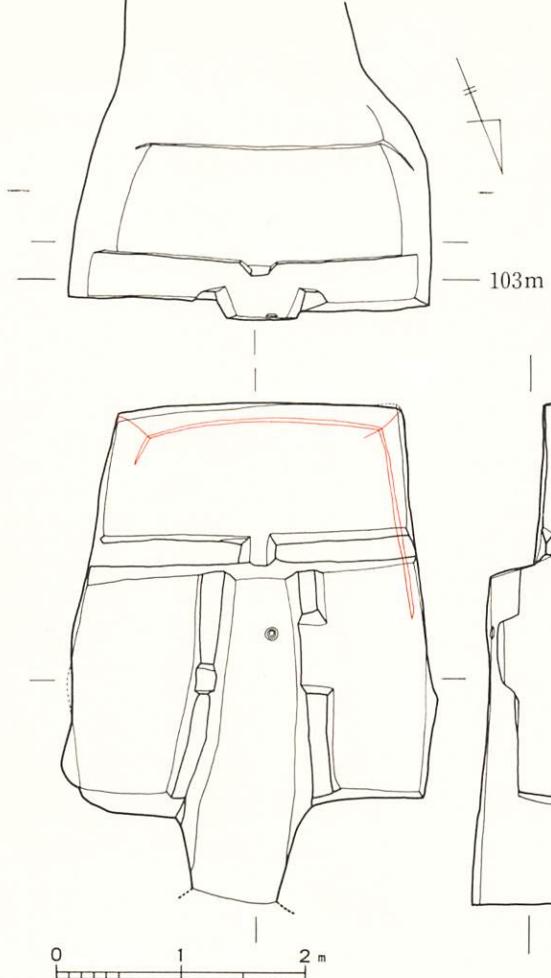
屍床は「コ」字形で左右屍床にのみ仕切を設け、その中央に排水溝を刻んでいた。なお奥屍床では排水溝のみを刻んでいる。天井は大部分を崩壊したり、壁面が剥離したりしているが、奥壁に沿って隅棟線が残っているところから方形造になるものと考えられる。そのため67号横穴や69号横穴と似た感じを受ける。<sup>註1</sup>

#### 遺物

開口していたため遺物の出土は見なかった。

註1. 「湯の口横穴群」山鹿市教育委員会1986

### 11号横穴



第25図 11号横穴実測図

2番目の谷の奥壁最上部中央に位置している。主軸はN23°Eにとり北北東に向かって開口する様築かれている。すでに羨門から玄室にかけて天井部を崩壊しているが、羨門には閉塞石を確認することができなかった。玄室は大きく、入口部分幅293cm、奥壁227cm、左側壁308cm、右側壁311cmを測り、台形に近いプランである。

屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を設け、その中央には排水溝を刻んでいる。とくに右屍床の排水路は大きく造られていた。天井は崩壊しているため全体の形態は不明だが、奥壁および右

側壁上部には軒先線を残していた。

#### 遺物

通路内より須恵器坏身1点が伏せた状態で出土した。口径8.6cm、最大径11cm、器高3cmで、立ち上り高は内傾して0.5cmを測り、受け部は僅かに凹んでいる。器面は全面ナデ調整で底部にはヘラ記号を記している。胎土、焼成とも良好で暗灰色である。



0 5 10cm

第26図 11号横穴出土遺物  
実測図

### 13号横穴

1番目の谷と2番目の谷の間に伸びる尾根の上に位置している。すでに横穴の左側壁の上部が崩壊して、あたかも1番目の谷に向かって開口する様に

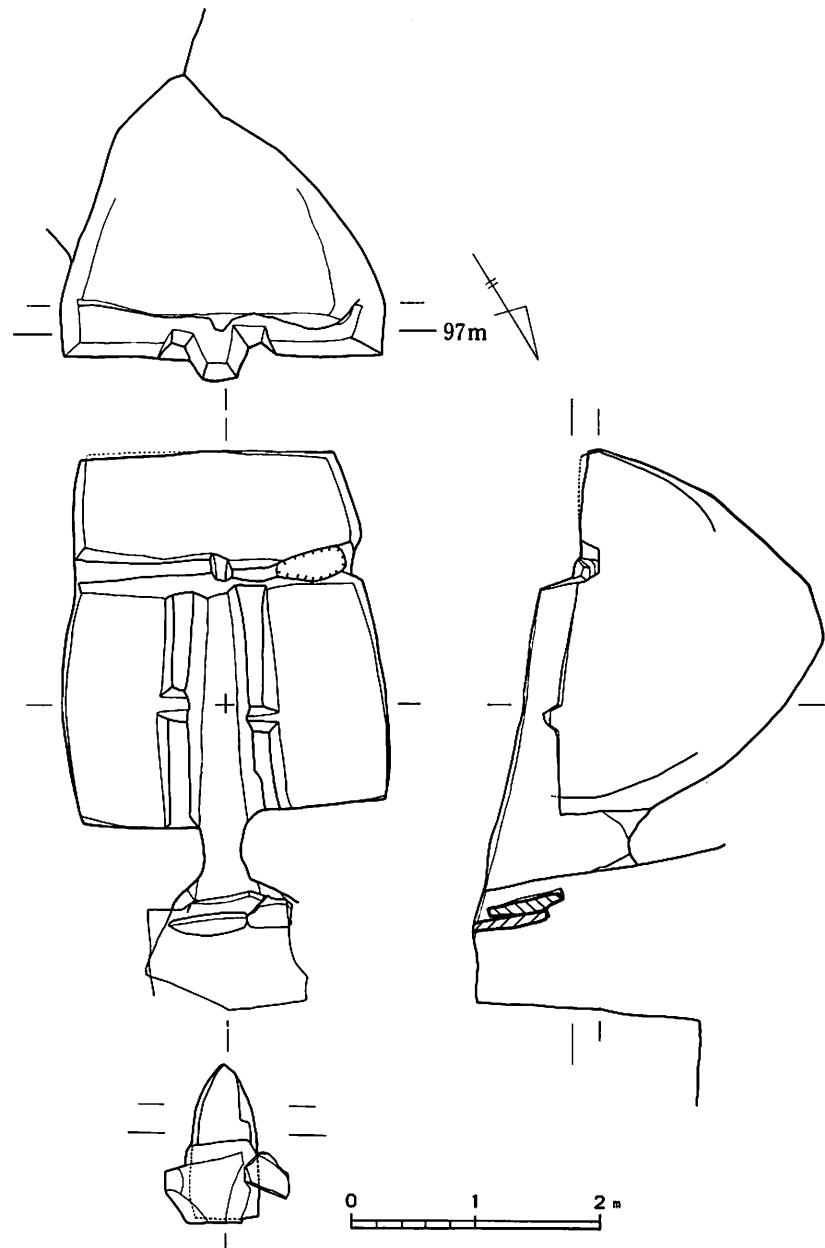
見えるが、羨門は2番目の谷に向かって、主軸はN32°Eにとり北北東からやや北東に寄って開口する様に築かれていた。羨門には安山岩板石3枚を使用していたが、これらの片面には全面赤色顔料を塗っており、明らかに組合せ式箱式石棺の石材であった。他の横穴には凝灰岩切石によって閉塞石を作っているが、この様に石棺石材を閉塞石として転用した例は極めて珍らしい例と言えよう。羨門は高さ124cm、幅60cmを測り、多少狭い感じがする。玄室は長方形に近く、入口部分幅247cm、奥壁205cm、左側壁293cm、右側壁280cmを測る。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を設け、ほぼ中央部に

排水溝を刻んでいた。なお羨門から奥屍床に向かう通路の傾斜がきつくなっていた。先に述べた様に、左側壁が崩壊し、この部分が開口する格好であったが、そのため天井全体に剥落が目立っていた。しかし、隅棟線の残存状態からドーム状になるものと思われた。

#### 遺物

須恵器片が羨門外側埋土中より出土した。1は甕の口縁部片で口径37cmになり、頸部以下を欠き全体の大きさは不明。器面には二段にわたり粗い波状文を施している。胎土は砂粒を含み焼成も悪



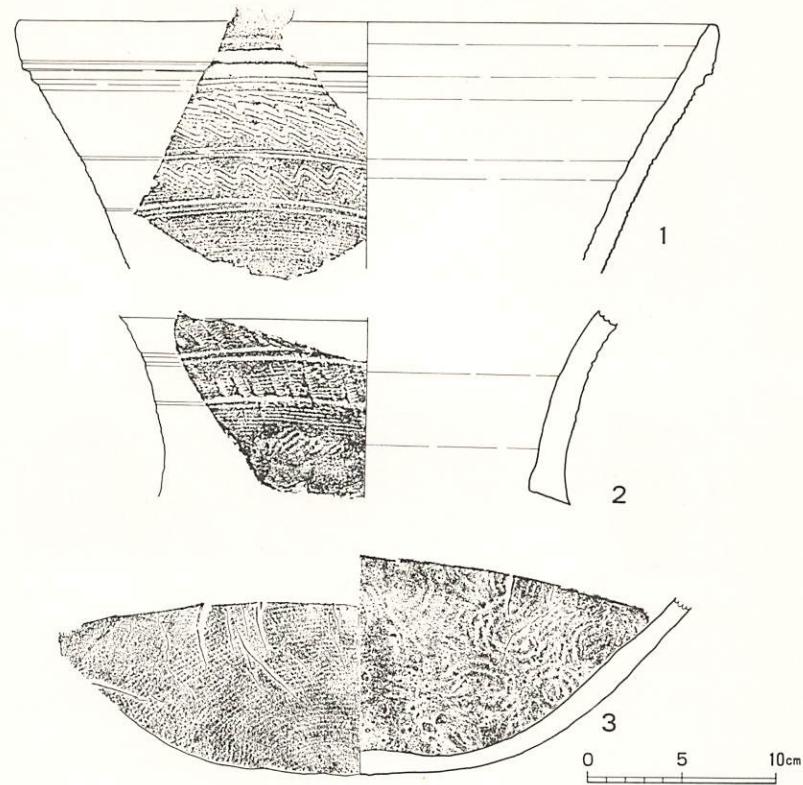
第27図 13号横穴実測図

く灰色を呈している。2も甕の口縁部片であるが端部を欠いているため口径は不明。二段に波状文を施しているが、一部消されていた。胎土に砂粒を含まず、焼成も良い。外面は黒色であった。

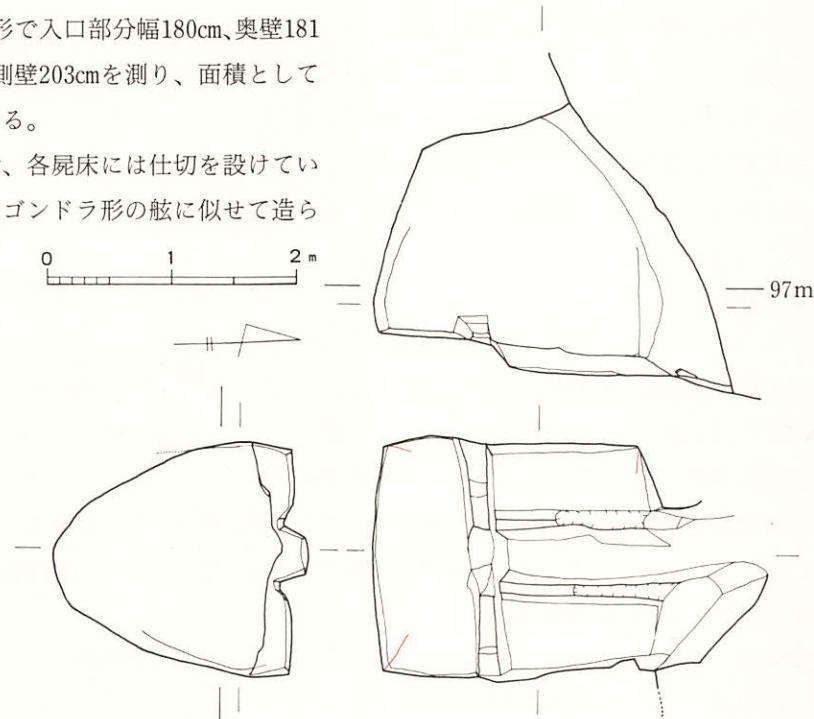
#### 14号横穴

9号横穴直下で、右側に15号横穴が存在する位置に築かれていた。主軸はN 2°Eでほぼ北に向かっており、羨門と玄室の天井を崩壊しているため一部開口した状態であった。さらに閉塞石は失っていた。玄室は長方形で入口部分幅180cm、奥壁181cm、左側壁220cm、右側壁203cmを測り、面積としては比較的狭い横穴である。

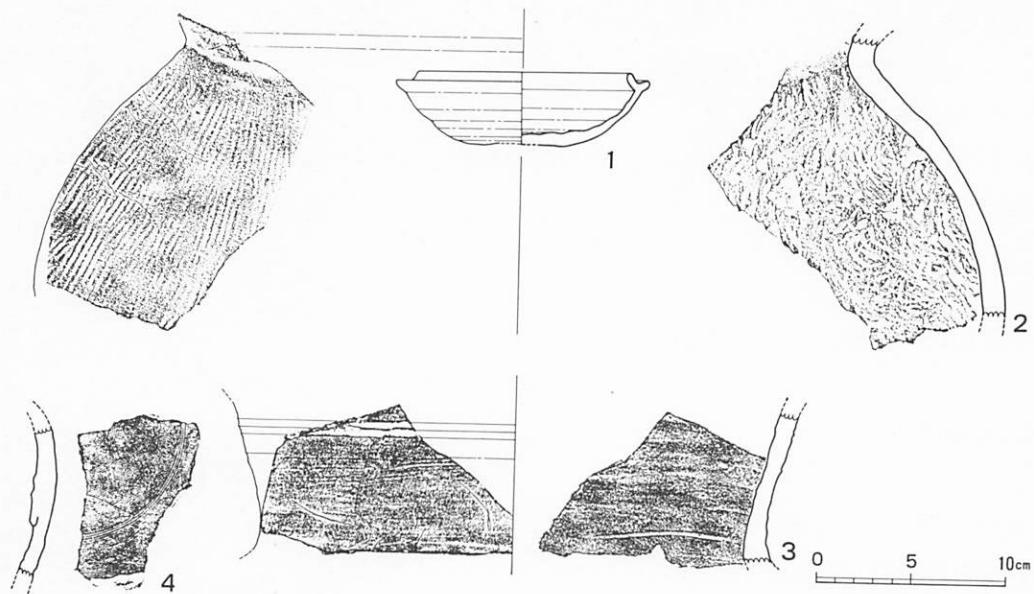
屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を設けていた。とくに奥屍床ではゴンドラ形の舷に似せて造られていた。左右屍床の仕切は羨門寄りの所が破損していた。天井はその大半が剥落しているが、僅かに隅棟線を残している。この横穴は羨門と通路および右屍床仕切において不自然な構造となっていた。羨門から通



第28図 13号横穴出土遺物実測図



第29図 14号横穴実測図



第30図 14号横穴出土遺物実測図

路へはそのまま延長した様になるのが常であるが、ここでは右屍床仕切が張り出した様に造られていた。

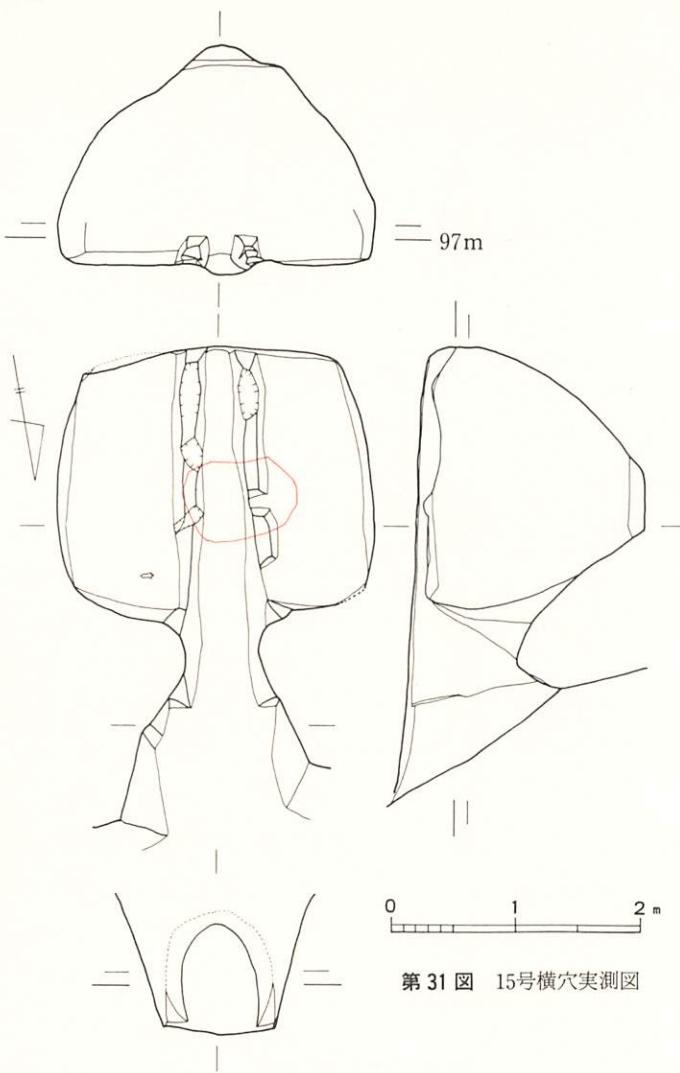
#### 遺物

羨門部から須恵器片数点が出土したが、上からの落下物の可能性も残されている。1は壊身の破片であるが、復原口径11.2cm、最大径13.4cm、器高3.8cmになる。立ち上りは短く0.5cmで内傾しつつ先端部のみ上に向かっている。胎土、焼成共に良く灰色を呈している。2は甕の破片で肩部のみを残している。胴部はかなり丸味をおびていて底部へと続く。器面は叩目を施しているが、外面には自然釉で白色を呈している。3も甕の破片で頸部のみである。中位に外面には2条の凹線をめぐらしており、上位には櫛描波状文を施しているものと思われる。

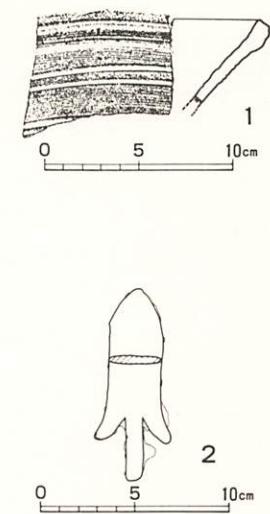
#### 15号横穴

14号横穴から17-C号横穴までは同レベルのステップに存在し、開口する様に築かれている。その中でも14号横穴から16号横穴まではすでに開口していた。15号横穴は主軸をN10°Eにとり、北と北北東の中間に向けて開口していた。すでに閉塞石は失っているが、高さ85cm、幅60cmを測るアーチ形の羨門は比較的良好な状態で残っていた。なお飾縁が下部で確認されたが、上部は風化していた。玄室は壁面が曲線を描いて丸味をおびたプランとなって、入口部分幅248cm、奥壁203cm、左側壁180cm、右側壁185cmを測る。

屍床は「二」字形で左右の屍床には仕切を設けていた。天井には棟状の最上部を造り出しているが、隅棟線が無く、ドーム形とすべきである。



第31図 15号横穴実測図



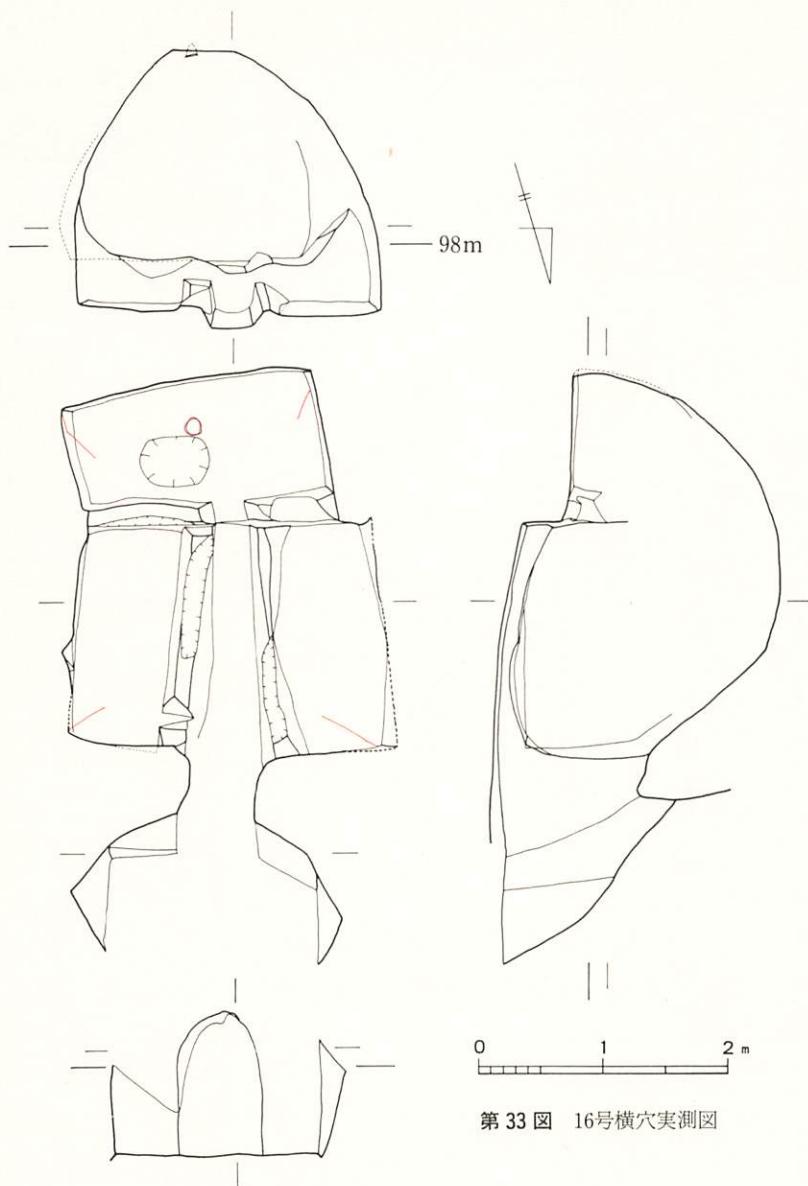
第32図 15号横穴出土遺物実測図

### 遺物

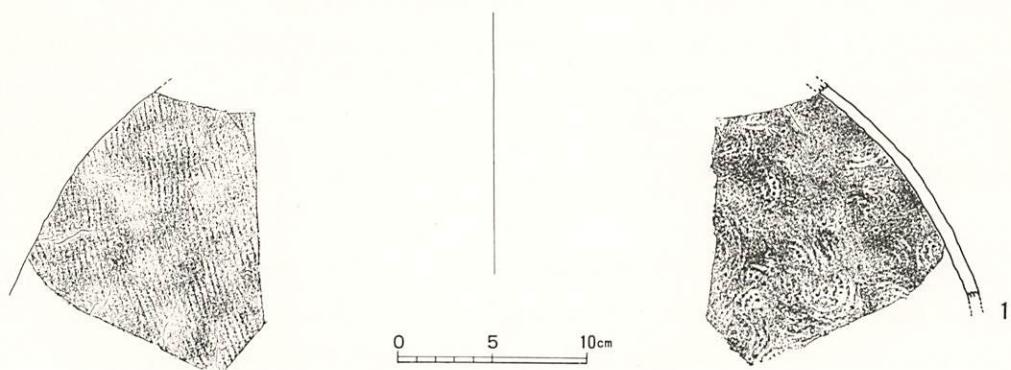
左側屍床から鉄鎌1点が出土し、埋土中からは須恵器片が出土している。1は甕の口縁部片で3本の凹線をめぐらしその下には全面にカキ目を残している。2は広根式の鎌で逆刺が反って長い。現長10.1cm、幅4cm、厚さ0.4cmを測る。

### 16号横穴

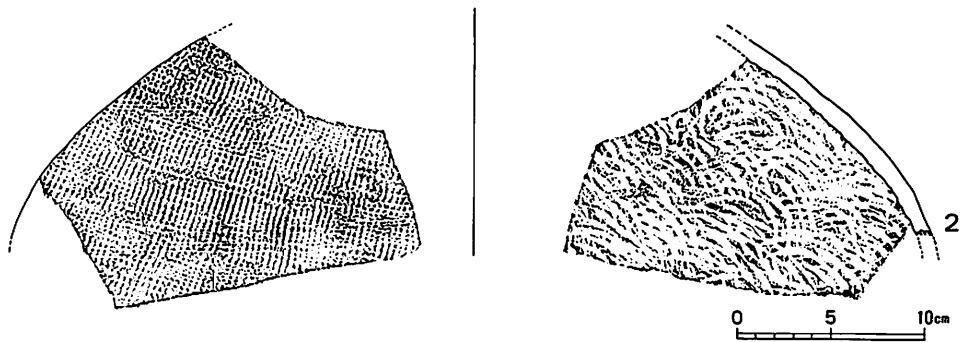
15号横穴の右側に位置し、すでに閉塞石を欠いて開口していた。主軸はN15°Eを測り、北北東に向かって築かれている。高さ110cm、幅68cmの羨門はアーチ形をなしている。玄室は入口部分248cm、奥壁204cm、左側壁260cm、右側壁306cmを測り、とくに右側壁が左側へ大きく曲線を描いていた。これは右側に横穴が先行して構築されていることを示唆するものである。右側には17号横穴が存在し



第33図 16号横穴実測図



第34図 16号横穴出土遺物実測図



第35図 16号横穴出土遺物実測図

ていると考え調査を行ったが、遺物のみ出土し、横穴自体の確認には至らなかった。恐らく羨門部がもっと奥に在るものと思われる。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を設けていた。奥屍床では後世円形に掘り込まれていた。天井は剥落が著しく原形を保っていない。しかし、隅棟線は残されていた。

#### 遺物

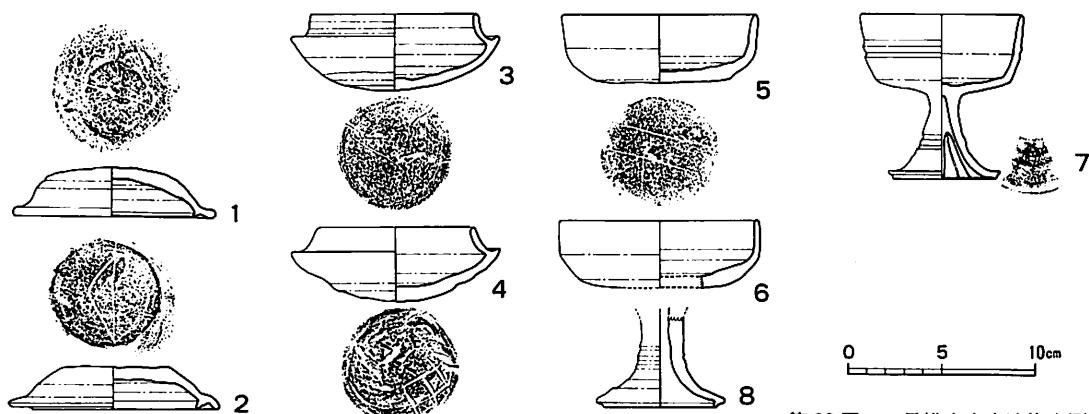
埋土中より須恵器大甕の破片が出土している。1も2も胴部の破片であるが、1がやや薄手で器面の叩目も薄い。

### 17号横穴

横穴内部の調査は行うことができなかったが、前庭部から須恵器や土師器が出土した。

#### 遺物

1と2は壺蓋である。1は口径8.4cm、最大径10.8cm、器高2.7cm、かえり高0.1cmを測る。天井にはヘラ記号を残している。2は口径8.8cm、最大径11.2cm、器高2.2cm、かえり高0.3cmを測る。天井部は平坦でヘラ記号を残している。3と4は壺身で立ち上りを有している。3は口径8.7cm、最大径11cm、器高4.1cm、立ち上り高1.3cmを測る。胴部は全体に丸味をおび、立ち上りは基部では内傾しているが、上部では垂直になっている。底部にヘラ記号を残していた。胎土、焼成共に良く乳灰色



第36図 17号横穴出土遺物実測図

を呈している。4は口径8.1cm、最大径11cm、器高4cm、立ち上り高1.3cmを測る。底部はやや光り気味で、ヘラ記号を有している。受け部は全面に剥離が見られる。これはさらに色調の違いが円形に認められるところから焼成時蓋を被せた状態で行ったため接合してしまい、その後蓋との分離を計ったものと考えられた。

5と6は立ち上りを有しない坏身である。共に胎土に砂粒を含み焼成も良く土師器との中間タイプと言える。5は口径10.3cm、器高3.6cmで底部にヘラ記号を有している。6は破片であるが復原で口径10.5cm、器高3.6cmになる。

7と8は高坏である。7は口縁部の一部を欠いているが、口径8.6cm、器高8.8cm、裾部径5.9cmになり、脚内部にヘラ記号を残している。8は脚部のみで赤焼け土器である。裾部径6.8cmである。

## 17-B号横穴

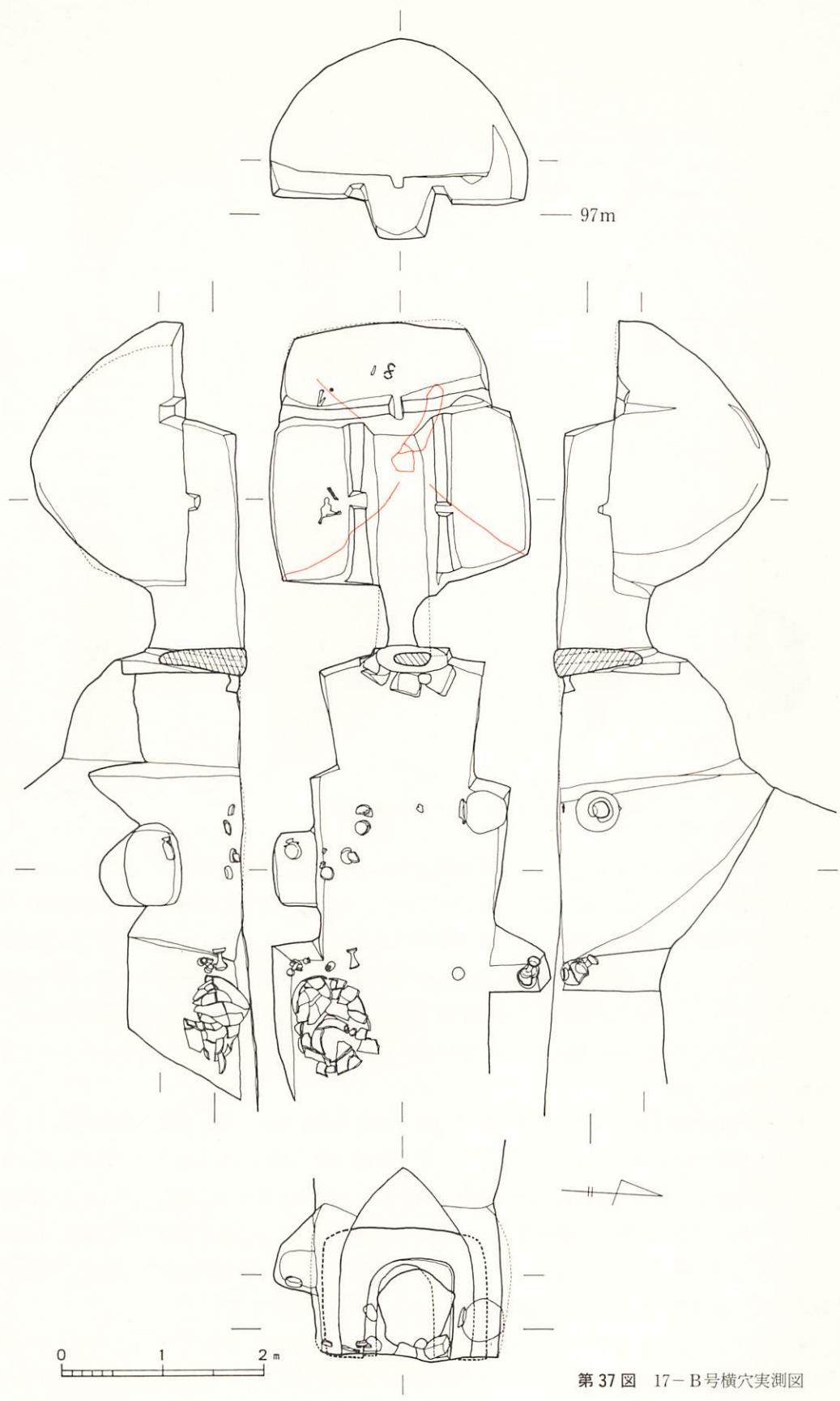
16号横穴から右へ15mの所に17-B号横穴が存在する。この横穴は今回新たに発見したもので、構造的にも、遺物副葬状況からも特筆すべき横穴であった。横穴は主軸N87°Eとほぼ東に向いている。前庭部が極めて長く、四重の飾縁を造り、羨門まで420cmの長さを測る。飾縁は外から内側に向かって僅かに広がり、さらに次の飾縁へと続いている。とくに左側では床面から56cmの位置に、高さ55cm、幅73cm、奥行45cmの張り出しが造られていた。この張り出しへには提瓶1個(9)が置かれていたところから、後世の二次加工でないことが明らかであるが、昭和59年度の第1次調査においても131号横穴で同様の張り出しが検出されている。(高さ55cm、幅100cm、奥行45cm)この時は張り出しへの中に遺物が残っていなかったため、さほど気にもとめていなかったが、今回の例が出て改めてその意味を考えなければならなくなってしまった。たとえ提瓶1個であれ遺物を置いていたことは供物台的性格を考えるべきであろう。ましてや、131号横穴のものと、この横穴のものと長さに多少の差が見られるが、高さ、奥行とも同じ数値であったのは、単なる偶然の一致とは考えられず興味が引かれた。前庭部では須恵器を中心に多数の遺物が検出されたが、出土状況については後で詳細に述べることとしよう。

羨門には凝灰岩割石の閉塞石を立てかけ、根固石4個を置いていた。アーチ形の羨門は高さ92cm、幅57cmで、その外例には小さく飾縁を刻んでいた。羨門から玄室まで62cmを測り、玄室は入口部分243cm、奥壁172cm、左側壁237cm、右側壁225cmの大きさであった。屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を有し、中央には排水溝を刻んでいた。また、通路から屍床までの高さが他の横穴に比べ高くなり、左右屍床で40cm、奥屍床では50cmに達している。

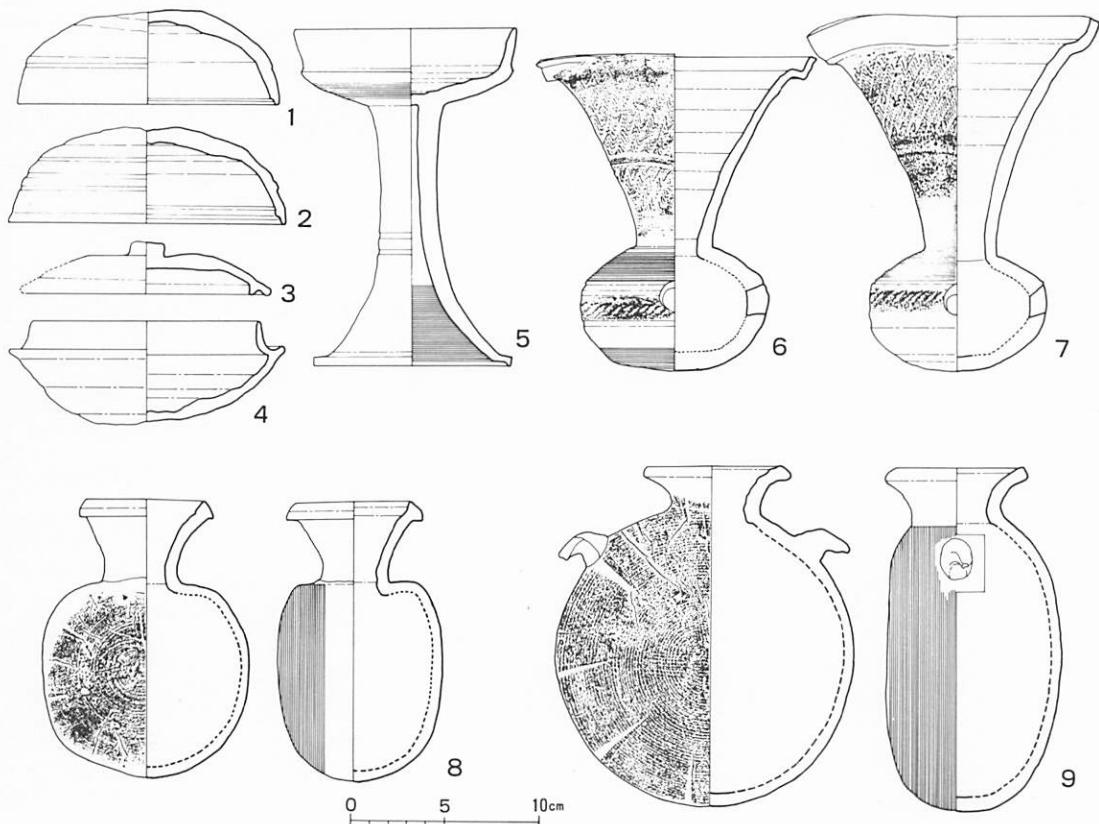
右側壁では奥屍床と右屍床とが一直線にならず、右側屍床が張り出した様に見える。しかし詳細に見ると、右側屍床は左側屍床と同じ幅となっており、本来の姿であり、奥屍床右端が短く作られていることが理解される。このことが何に起因するかは断定できなかった。天井部は隅棟線が中心に集中する方形造となっている。

### 遺物

遺物は前庭部と玄室内から出土しており、前庭部では須恵器と土師器が出土し、玄室内からは馬



第37図 17-B号横穴実測図



第38図 17-B号横穴出土遺物実測図

具、武具、貝製品等が出土した。前庭部手前から、左側では須恵器の大甕(1)、高坏(5)、提瓶(8)、甕(6)、土師器の小型壙3個(16~18)が置かれており、右側には須恵器の甕(7)と土師器甕(19)が、左側の甕と壙に対峙する様に置かれ、やや中央寄りに土師器坏が出土した。前庭部中位では左側に張り出しを作り、その中に提瓶(9)を置き、真下には須恵器(1~4)と土師器の坏(12~14)を重ねる様に置いていた。右側では須恵器大甕(10)を横に倒した状態で置き、これは底部を意識的に欠いていた。玄室内では左屍床から轡が出土し、奥屍床からは鉄鎌2点、刀子1点、耳環2点、イモガイ製腕輪2点が出土した。

1~3は須恵器坏蓋である。1は口径13.9cm、器高5cmを測る、天井部は回転ヘラケズリを施し、肩部と口縁部内側に浅い沈線をめぐらしている。器壁は厚く砂粒も多く含んでいるが焼成は良い。2は4とセットになる。口径14.7cm、器高5cmを測る。肩部に2本の凹線をめぐらし、口縁部内側にもめぐらしている。胎土、焼成は良く、色調は茶褐色を呈し、赤焼け土器に似た感じである。

3はつまみを有する坏蓋の破片である。復原口径11.2cm、最大径13.3cm程度になり、器高2.7cm、かえり高0.2cmを測る。つまみは鉗状で、かえりも短い。乳灰色を呈している。

4は坏身で2とセットになる。口径12cm、最大径14.6cm、器高5.5cm、立ち上り高1.5cmを測る。身は比較的深く立ち上りも高い。胎土、焼成良好で茶褐色である。

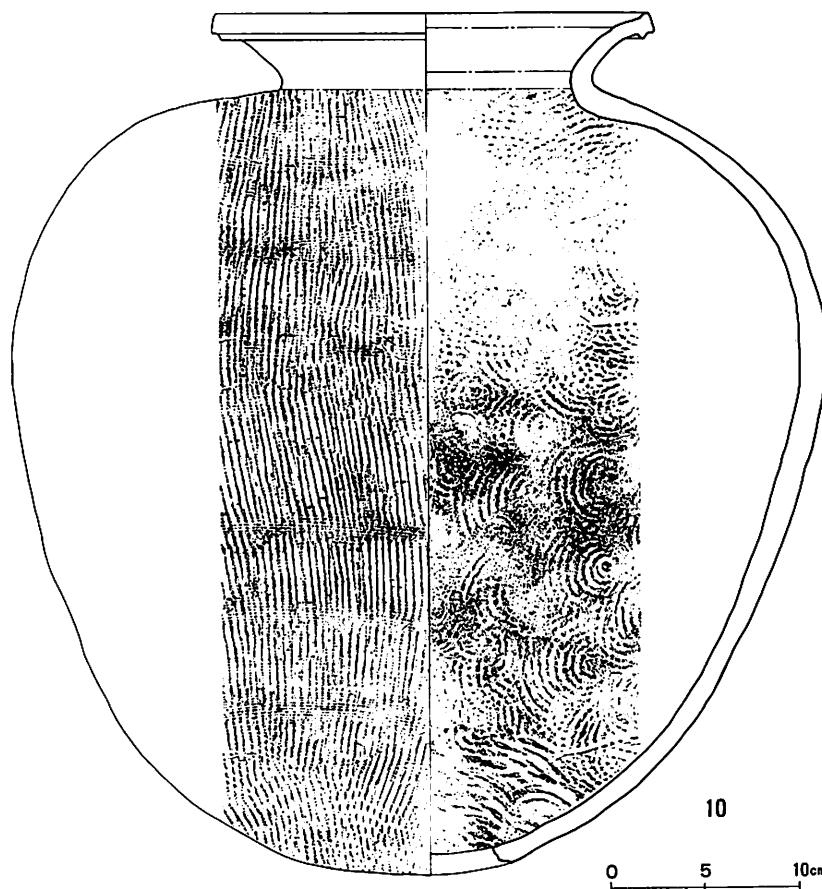
5は無蓋の高壺で口径11.7cm、器高17.7cm、裾部径10.4cmを測る。口縁部は垂直に近く立ち上り下端に段をめぐらし壺身は浅い。脚は細長く中位よりやや下に2条の凹線をめぐらしている。なお裾部近くにヘラ記号を記している。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く灰色である。

6と7は壺である。6は口径14.9cm、器高16.8cmの端正な造りである。口縁部は「く」字に大きく開き、先端部では折れて段を有している。また外面中位には2本の線をめぐらし、その上下には櫛描小波状文を施している。胴には浅い凹線をめぐらし、その中に孔と櫛描簾状文を施している。底部は回転ヘラケズリを残していた。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。小豆色をしている。7は口縁部が歪んでいて最大口径15.6cm、短径14.4cm、器高17.7cmを測る。口縁部中位に浅い凹線をめぐらし、その上位に櫛描小波状文を施している。胴部中位に凹線と櫛描簾状文を施している。底部には回転ヘラケズリである。胎土、焼成も良いが、表面に多くの気泡が出ており、整形の段階でのミスであろう。灰色を呈している。

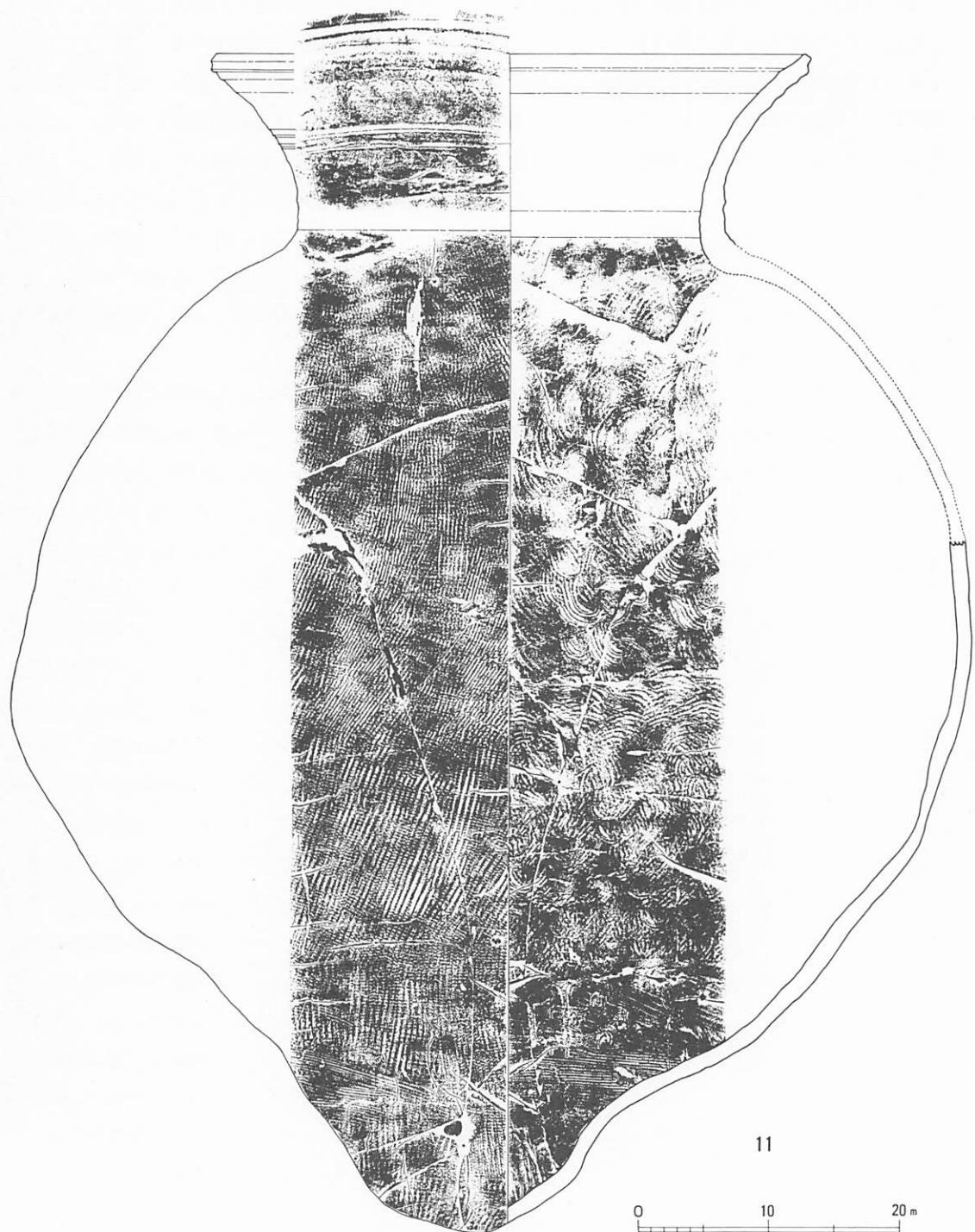
8と9は提瓶である。8は口径6cm、最大径10.9cm、器高14.8cmを測る。口縁部は先端部が山形になり、下端部も僅かに摘み出している。胴部は角張った感じである。9は胴部肩部につまみを有している。環状にならず亀の手状になっている。口径7cm、最大径15.7cm、器高18.1cmを測り、胴

部は扁平で全面にカキ目を残している。

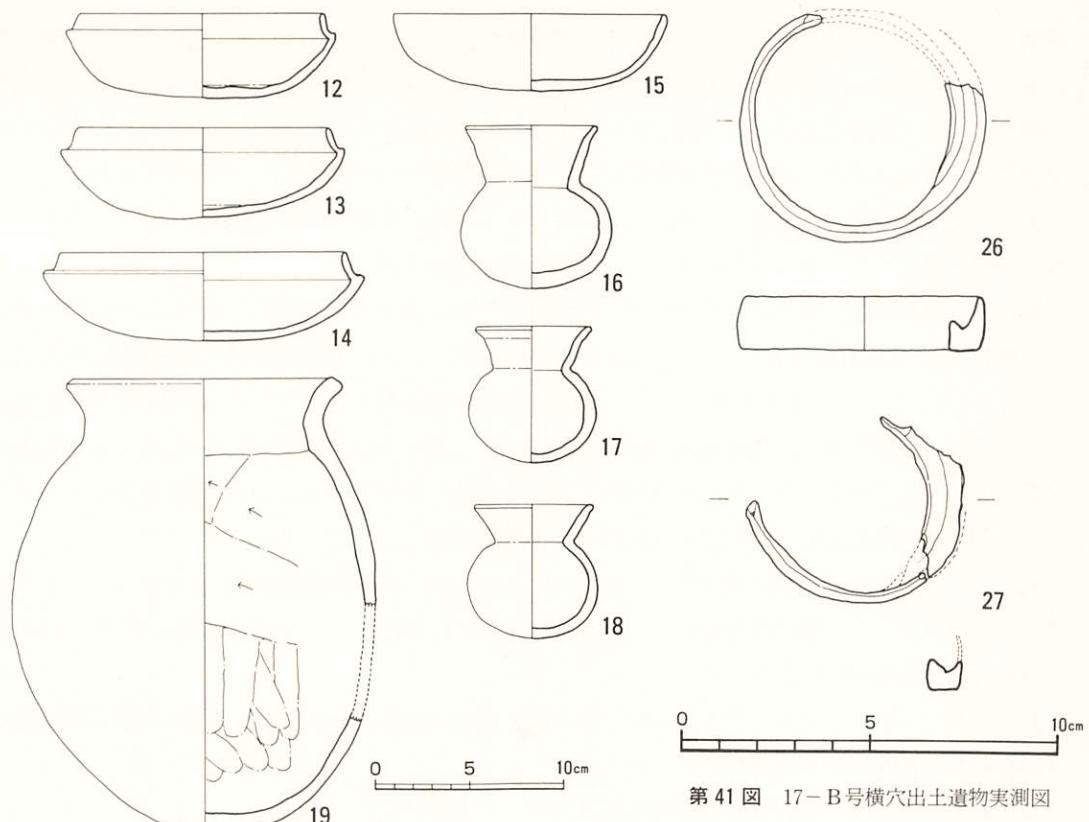
10と11は甕で、とくに11は大型品である。10は口径22.8cm、最大径43cm、器高45.5cmを測り、底部は意識的に欠いていた。上縁部は短いが大きく開き、端部は摘み出している。胴部は大きく肩が張り、安定性の多い丸底となっている。11は口径45cm、最大径73.5cm、器高90.2cmである。口縁部は大きく開き外面中位に粗い2本の凹線をめぐらし、さらにその上下に粗い波状文を施している。胴部は最大



第39図 17-B号横穴出土遺物実測図



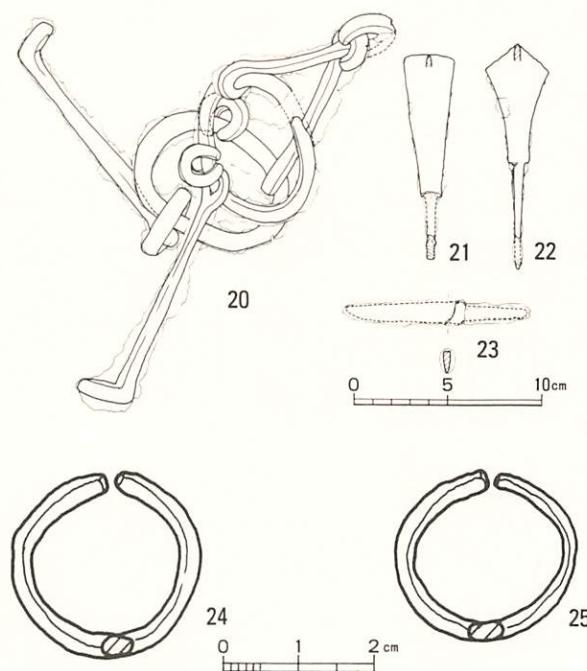
第40図 17号-B号横穴出土遺物実測図



第41図 17-B号横穴出土遺物実測図

径を中位に有していたがかなりいびつで、とくに底部近くではその極みであった。これも底部に穿孔の跡が認められた。

12~19は土師器である。とくに12~14は坏身で表面はいずれも黒漆塗りでヘラ研磨を施している。12は口径12.8cm、最大径14.3cm、器高4.4cm、立ち上り高1cmを測る。13は口径13.2cm、最大径15cm、器高4.7cm、立ち上り高1.1cm、14は口径15cm、最大径17.1cm、器高4.7cm、立ち上り高1.2cmになる。15は赤色顔料を全面に施し、その後ヘラ研磨を行っている坏である。口径14.3cm、器高4.1cmを測る。16~18も表面に黒漆を塗り、その後ヘラ研磨を施した小型丸底壺である。16は口径6.9cm、最大径8cm、器高8.6cmで、17は口径6cm、最大径6.8cm、器高7.2cm、18は口径6.3cm、最大径6.9cm、器高7.1cm



を測る。16の口縁部は直線的に長く延びて先端で僅かに外反するが、17、18は短いが大きく開いている。19は甕である。口径13.7cm、最大径19.2cm、器高23.9cmになる。口縁部は短いが大きく広がり端部は平端に調整している。胴部の張りも小さく中位に最大径を有している。底部は平坦に近い丸底で安定性に欠ける。器面はナデ調整を粗いハケ目を施し、内面はヘラケズリであった。

20は左屍床から出土した轡である。現場ではそれと判断できない程鏽が付着していた。引手壺、喰、鏡板と残っていて重さ376.2gを測る。保存状態は極めて悪い。

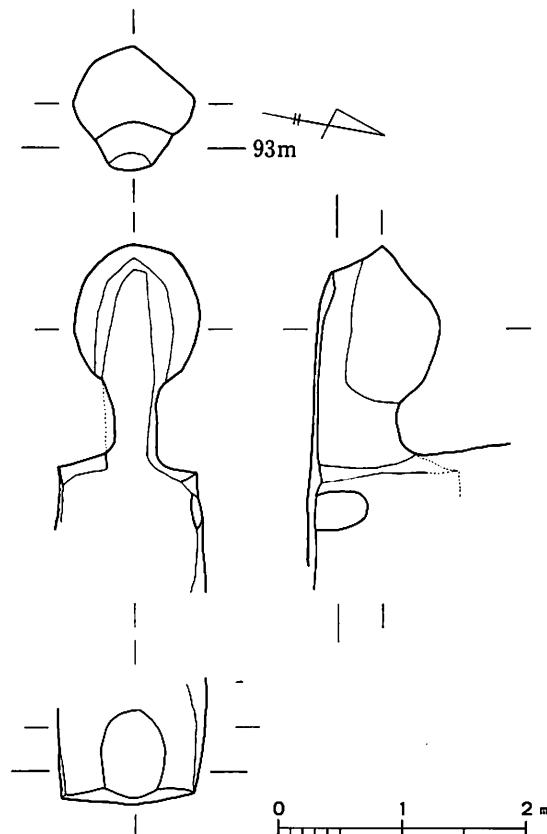
21～27は奥屍床から出土したもので、21と22は鏃である。21は平根斧前式で全長10.9cm、重さ19.2gを測る。茎には木質が付着し、先端部には樹皮を数条巻いている。22は圭頭式で全長12cm、重さ21.7gを測る。茎にはやはり木質を残している。23は全面に木質を残した刀子である。中心から折れていたので刀子と確認できる。現長10cm、重さ13.7gを測る。24と25は耳環で対となる。24は埋土水洗中に発見したものである。共に断面は楕円形で全面に緑青をおびているが、一部金が顔をのぞかせている。24は最大径2.5cm、重さ4.2g。25は2.4cmと重さ2.7gとなっている。

26と27は貝輪である。奥屍床中央から並んで出土したが、保存状態が悪く原形のまま取り上げることができなかった。26は外径6.5cm、内径5.6cm、高さ1.4cmで、27は復原値であるが外径5.8cm、内径4.5cm、高さ1.4cm程度になろう。

貝の種類については長崎大学医学部松下孝幸氏を経て長崎県立野母崎高校教諭山本愛三氏に同定をお願いした結果、イモガイ科「クロザメガイモドキ」とされた。なおこの貝は現在奄美以南の浅海に生息し、フィリッピンには多産することである。イモガイ科の貝輪は縦に切った縦型と、輪切にした横型とがあり、弥生時代から古墳時代にわたって使用されている。とくに横型の貝輪はこれまで女性の使用は確認されているが、男性の使用例が未確認であるため、女性専用の貝輪と考えられている。その意味からこの横穴の被葬者は女性の可能性が高いと言えよう。また、イモガイ横型貝輪が横穴から出土する例は福岡県行橋市、飯塚市を中心とした地区に多く、宮崎県下においては地下式横穴から出土の例が知られている。従ってこれらの地域との関連も考えてみなければならない。

### 17-C号横穴

17-B号横穴の右側3mに位置していた。



第42図 17-C号横穴実測図

この横穴も今回新たに発見したもので、未完成の横穴であった。主軸は N80°E で北と東北東の中間方向に開口する様築かれていた。羨門は高さ72cm、幅52cmのアーチ形で、前庭部右側壁に17-D号

横穴と接する穴が開口していた。恐らくこのため横穴築造を中止したものと理解され、従って閉塞石は残っていない。

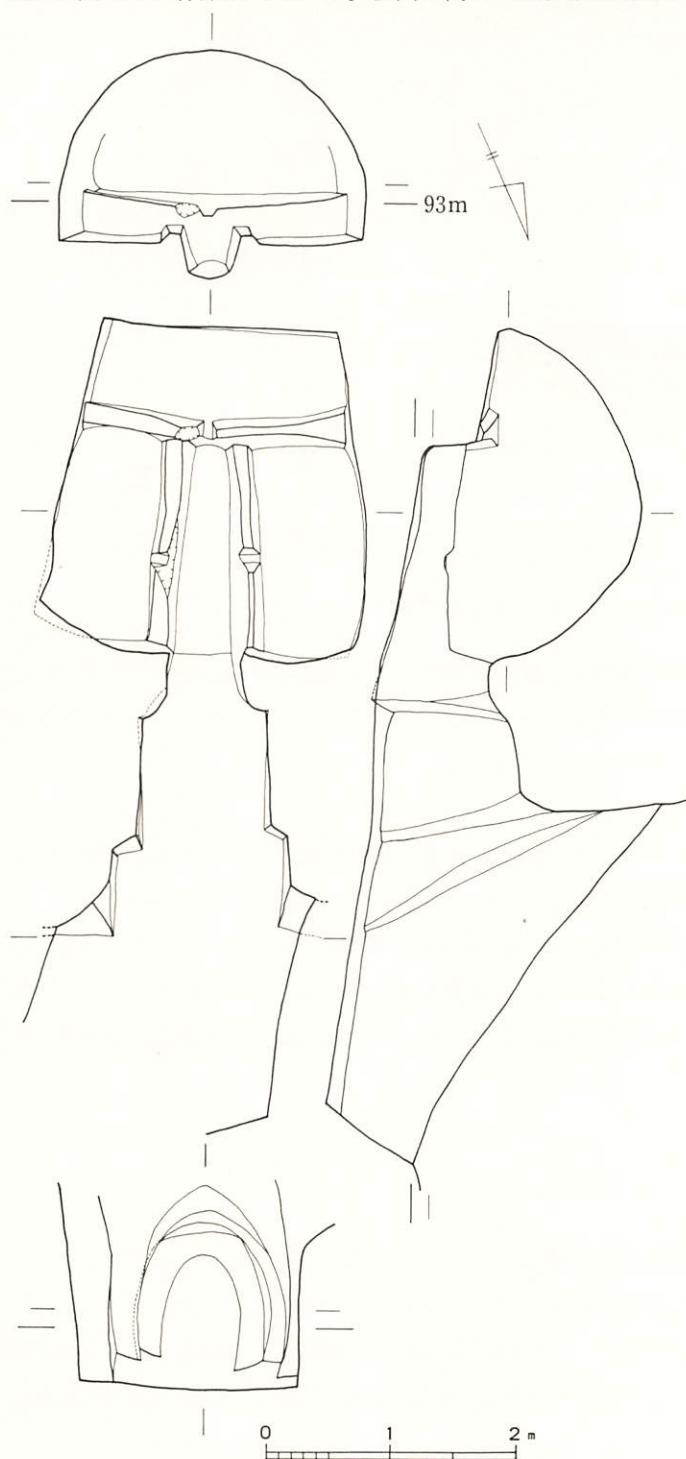
玄室は丸味を呈し、僅かに通路と屍床の区分を行っている状態で、屍床も明確な配置は認められなかった。

#### 遺物

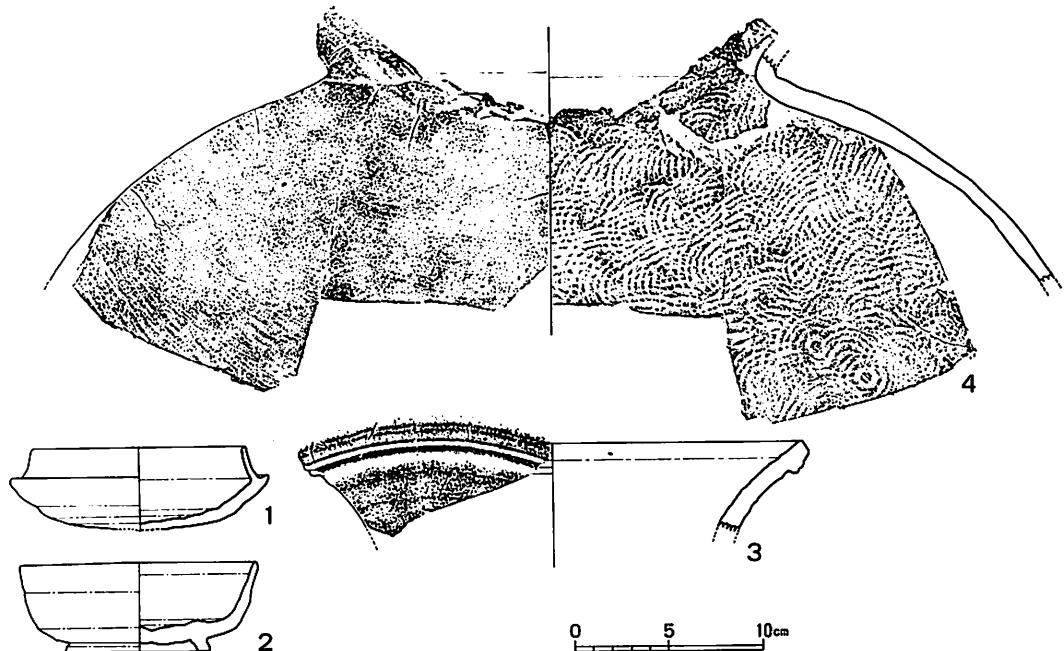
前庭部より甕破片が1点出土しているが、未完成の横穴のため副葬品の可能性が薄く、上部からの転落による出土と考えられるため図化しなかった。

#### 20-C号横穴

3番目の谷にはこれまで9基を確認していたが、今回の調査で新たに9基を発見し、合計18基の存在が明らかとなった。この20-C号横穴も今回新たに発見したもので、谷の奥壁中央に位置している。主軸は N24°E でほぼ北北東に向かって開口する様築かれている。羨門は高さ90cm、幅63cmのドーム状で、二重の飾縁を配していた。なお羨門全体を覆う様に人頭大の軽石を積み上げ閉塞石としていたが、時間的に困難を極めたので図化し得なかった。玄室は台形状で、入口部分幅250cm、奥壁183cm、左側壁230cm、右側壁250cmを測



第43図 20-C号横穴実測図



第44図 20-C号横穴出土遺物実測図

った。この横穴の屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を有し、排水溝を中央に配していたが、通路の勾配が強く、羨門より高い位置に奥屍床を造っていた。天井部からは水が滲み出しており、壁面の剝落が著しかったが、ドーム状になるものと思われる。

#### 遺物

前庭部からの出土だが床面には接しておらず上からの転落と思われるが、一応ここで紹介しておく。1は壊身の破片で、復原口径11.2cm、最大径13.7cm、器高4.3cm、立ち上り高1.4cmになる。2は高台付碗で口縁部を僅かに欠いた状態である。口径12.5cm、器高4.7cmを測る。3と4は甕である。3は口縁部の破片で先端部を折り返している。4は頸部から肩部にかけての破片である。外面はタタキの後全面にカキ目を施し、内面は青海波状文である。尚これらの資料は焼成、色調等から同一物の可能性がある。

#### 20-D号横穴

20-C号横穴の左側に並ぶ様に築かれている横穴で、ここも今回新たに発見したものである。主軸はN45°Eで北東に向かって開口する様に築かれていた。羨門にはすでに閉塞石を欠いているが、前庭部には遺物が置かれていた。アーチ形をした羨門は高さ120cm、幅63cmで比較的狭く、天井部は一部剝落していた。玄室は長方形で、入口部分幅257cm、奥壁286cm、左側壁306cm、右側壁290cmを測る。

屍床は「コ」字形で、屍床には仕切を有し、中央部には排水溝を刻んでいる。とくに右側屍床には2個の排水溝を刻んでいた。天井は大部分を剝落しているが、軒先線の残存状態からドーム状に

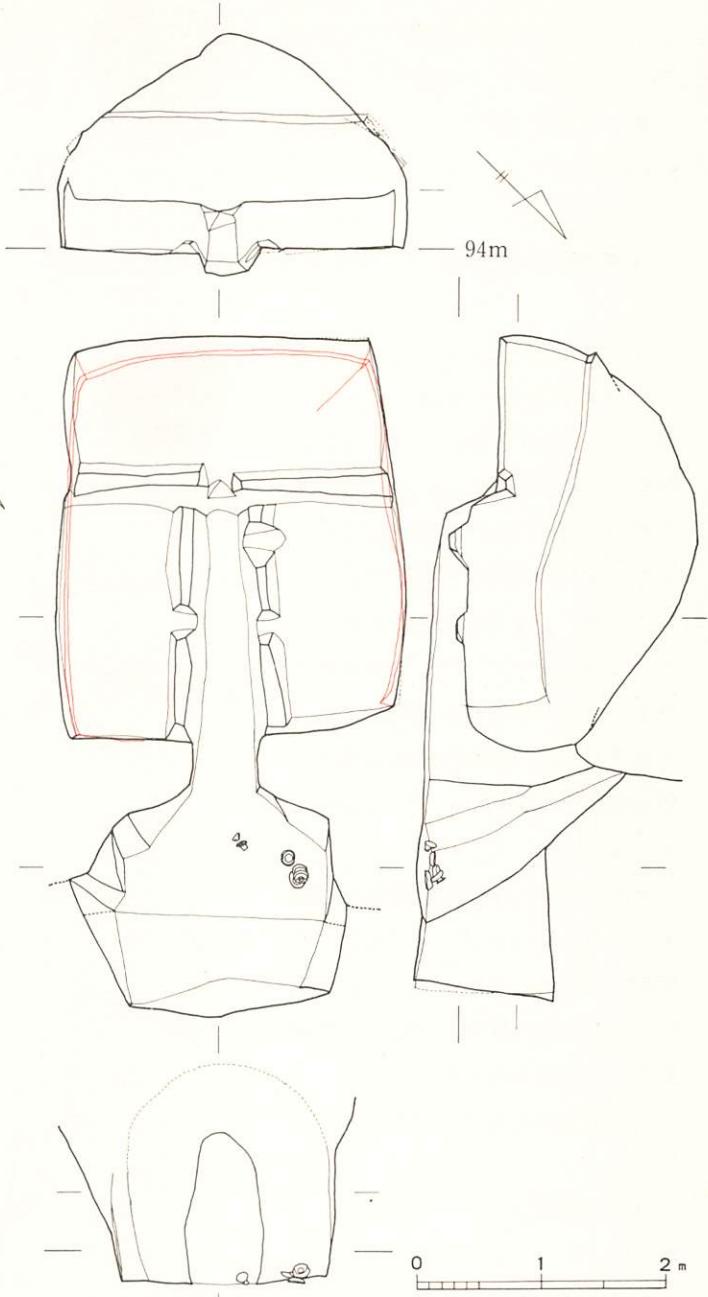
なるものと考えられる。

### 遺物

前庭部より須恵器と土師器が出土しているが、これらの多くは安置する様な格好で出土している。1の上に2が、さらに5の高坏がかぶさり、それらの横に3が置かれていた。1と2はセットになる須恵器である。1は坏蓋で口径10.3cm、最大径13cm、器高2.7cm、かえりは内傾して0.4cmを測り短い。天井にはタタキ目が残っている。2は口径11.7cm、器高3.9cmの坏身である。坏内部には土と共に纖維物が残っており（図版26）当初からの遺物である。これが自然の纖維か人工的な纖維かは判断に苦しむが、意識的に置いた点は注目しなければなるまい。なお底部にはヘラ記号を有していた。

3は土師器の坏である。口径11cm、器高4.5cmで外面はナデ調整、内面はヘラ研磨を行い、底部ではヘラケズリであった。なお口縁部の半分には全面にススの付着が認められる。4は高台付碗で口縁部を欠いており口径、器高等は不明である。

5は土師器の高坏で口径11.3cm、器高7.3cm、裾部径8.7cmを測る。口縁部はナデ調整で、胴部から脚部はヘラ研磨を施していて、僅かに黒漆を確認することができる。6は赤焼け土器の高坏である。口径15cm、器高10.2cm、裾部径9.8cmを測る。口縁部は大きく開き、外面には6～7本の線をめぐらしている。脚裾部内面にも1条の凹線をめぐらしている。



第45図 20-D号横穴実測図

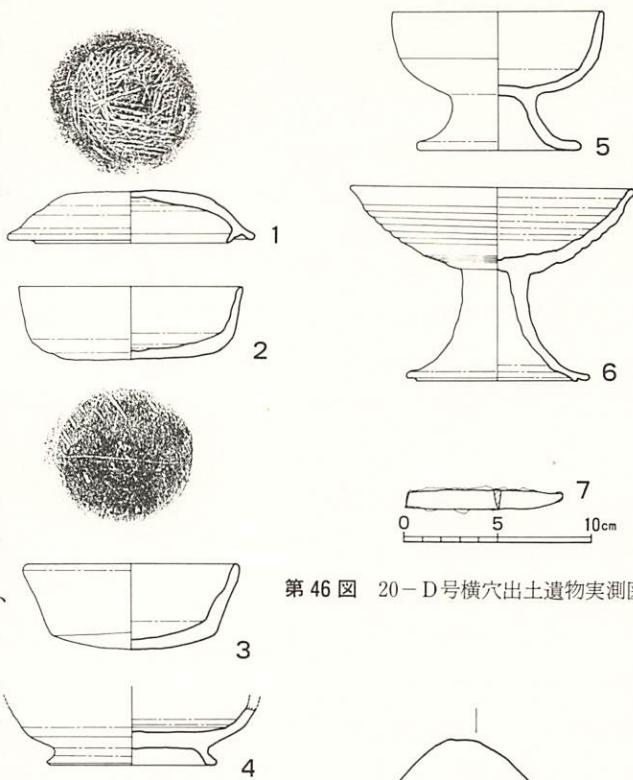
7はこの横穴から出土したのではなく、上部に閉塞石が倒れており、そこから出土したものである。刀子で茎の先端を欠けているため現長8.4cmを測る。

### 21号横穴

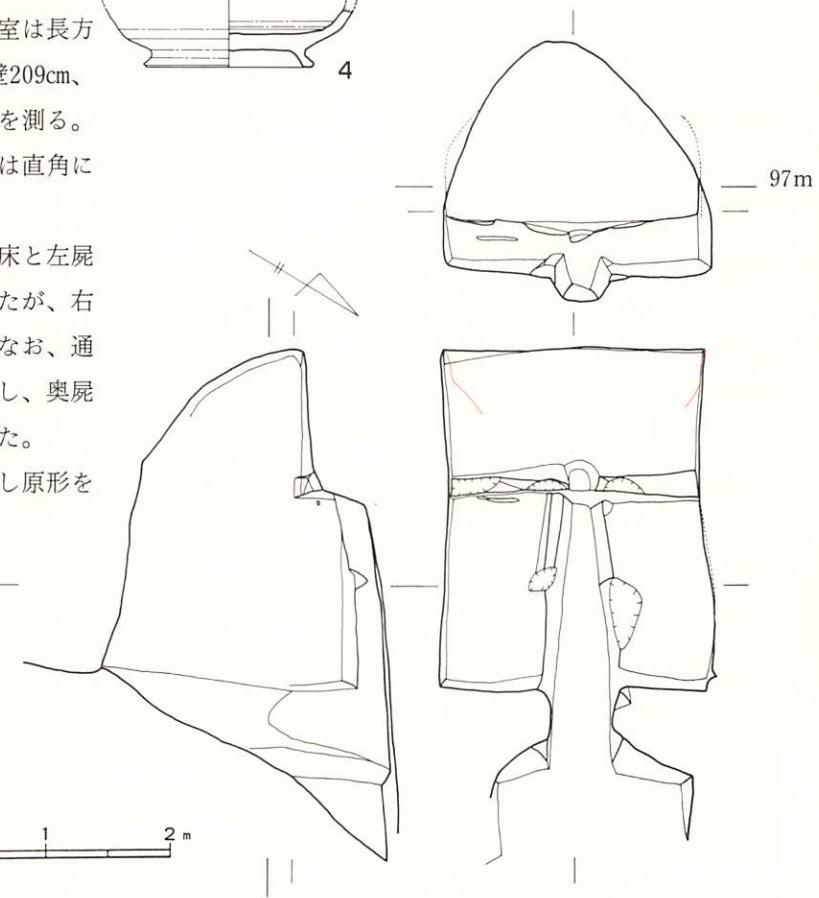
この横穴はすでに開口していたもので谷奥壁右側に位置している。20-C、D号横穴より4~5m高い位置に存在する。主軸はN59°Eで東北東から北東に向けて開口しており、すでに羨門天井部と玄室天井部の一部を崩壊し、さらに閉塞石も残されていない状態であった。玄室は長方形で入口部分幅211cm、奥壁209cm、左側壁252cm、右側壁263cmを測る。壁面は直線的で各コーナーは直角に近い状態であった。

屍床は「コ」字形で奥屍床と左屍床の一部に仕切を残していたが、右屍床では見られなかった。なお、通路および左右の屍床に比較し、奥屍床が極めて高く造られていた。

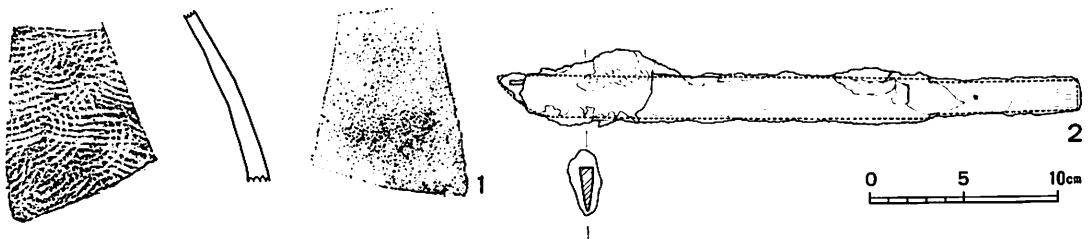
天井部はその大半を剥落し原形を留めていないが、僅かに隅棟線2本を残している。現状ではドーム状になるのか寄棟造になるのか決定しかねるが、寄棟造の妻入りの可能性が強い。



第46図 20-D号横穴出土遺物実測図



第47図 21号横穴実測図



第48図 21号横穴出土遺物実測図

#### 遺物

左屍床から直刀が出土しているが、床面より18cmの高さからの出土で、追葬時の副葬品と考えられるのが妥当である。

1は埋土中であるが甕胴部の破片である。2は全面に木質を残しており鞘に入れた状態を保っている直刀である。全長31cm、刃渡り23cm、重さ163gを測る。

#### 26-B号横穴

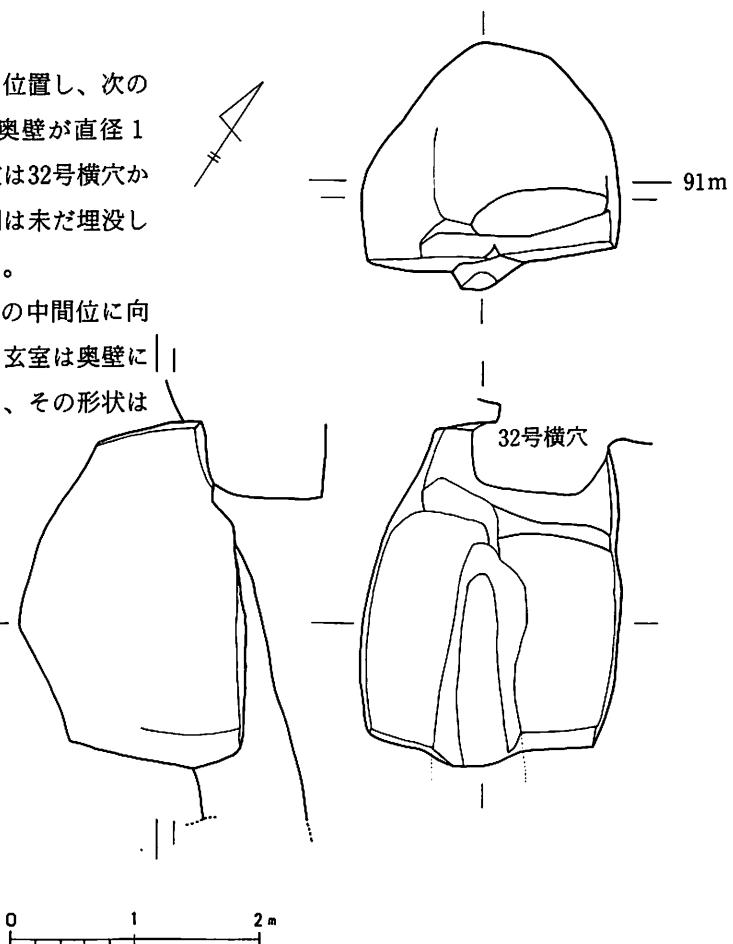
この横穴は谷右側壁の先端近くに位置し、次の谷の左側壁に開口する32号横穴と奥壁が直径1mの穴で接している。現在この横穴は32号横穴から内部に入らなければならず、羨門は未だ埋没した状態で外から見ることができない。

主軸はN146°Eで南東と南南東との中間位に向かって開口する様に築かれている。玄室は奥壁に穴が空いたため未完成となっており、その形状は不整形であった。従って入口部分幅182cm、左側壁250cm、右側壁243cmを測るのみであった。

屍床も「コ」字形を呈しているが、通路も未完成であった。天井一部も形状不明で仕上げの段階まで至っていなかった。このことから32号横穴が先行し、その後この横穴が築かれたことがうかがえる。

#### 遺物

須恵器大甕破片が玄室内より出土したが、未完成品であることを考えると二次的に混入した可能性



第49図 26-B号横穴実測図

が高い。従って30号横穴の遺物の可能性も考えられたので実測しなかった。

### 30号横穴

3番目の谷と4番目の谷の間に延びる尾根には両側から横穴が築かれ、先端部に至っても27~29号横穴が存在している。この様な状態において30号横穴は先端からやや右側にまわりこんだ位置に開口している。

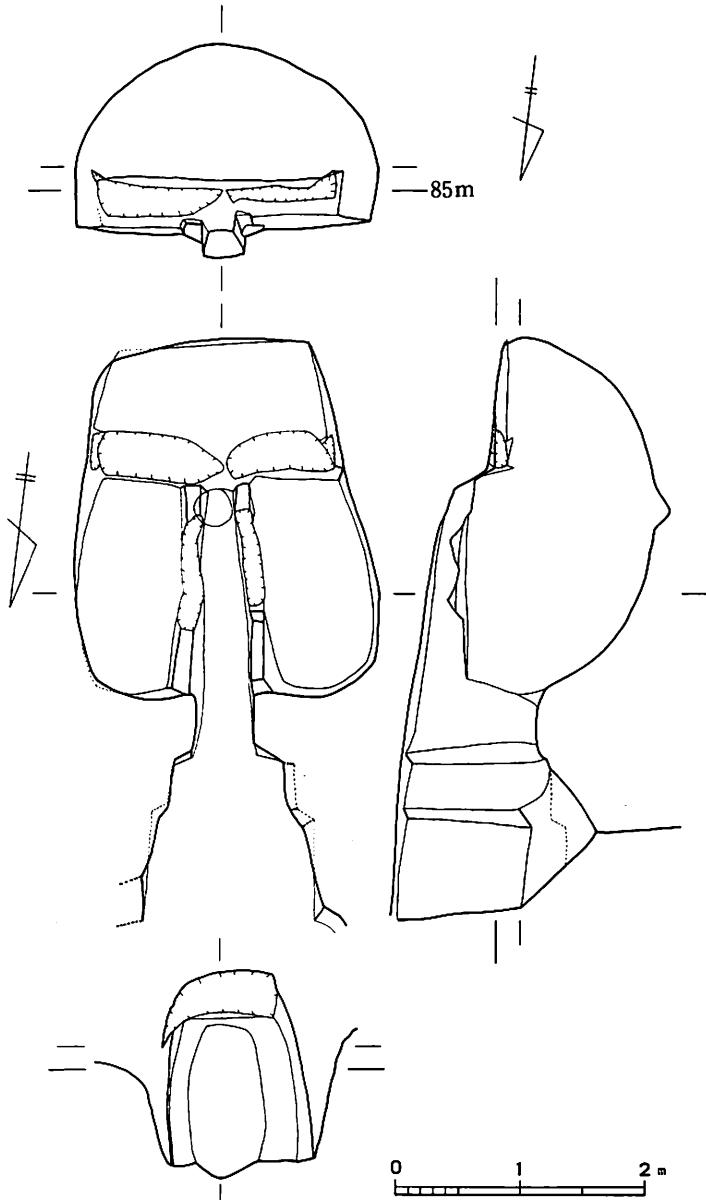
すでに閉塞石を欠いていたが、羨門の状態は良く、高さ123cm、幅60cmのアーチ形で二重の飾縁を有している。玄室は主軸をN 6°Wにとり、ほぼ北に向かって開口する形をとっている。入口部分幅223cm、奥壁152cm、左側壁266cm、右側壁255cmを測るが、壁面は張りをもちコーナーも丸味をもっているため測点が決めにくく数値が不安定なものとなつた。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を有しているが、破損が著しく僅かに左右屍床で残っている。天井はドーム形で中央部が僅かに凹んでいた。

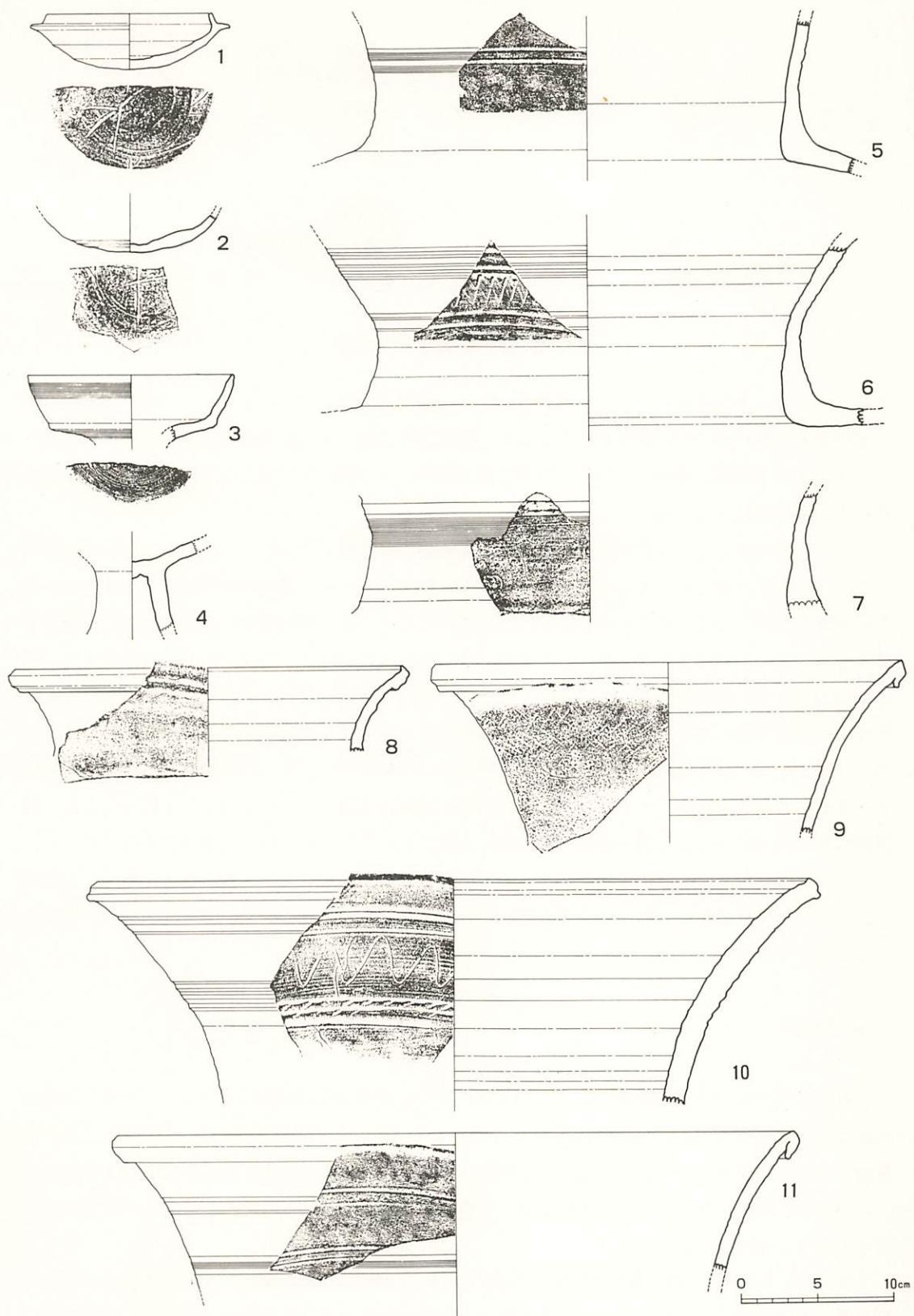
### 遺物

羨門より須恵器大甕片が多数出土した。完全な姿を留めているものではなく、全て破片の状態である。位置的にも横穴群の中では下位にあたり、人目に触れる位置に開口した状態であったため、二次的に集まつた可能性も残されている。

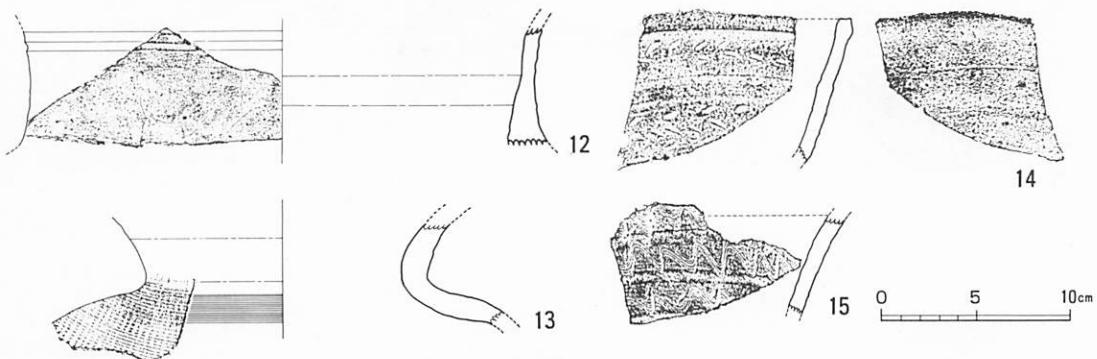
1は壊身で半欠の状態であるが、口径10.8cm、最大径13.1cm、器高3.7cm、立ち上り高0.6cmを測る。立ち上りは短く、受け部も水平に近くなつていて、底部には回転ヘラケズリを施し、ヘラ記号



第50図 30号横穴実測図



第51図 30号横穴出土遺物実測図



第52図 30号横穴出土遺物実測図

も残している。2も壊身片で口径、器高等不明、ヘラ記号を残している。

3は無蓋の高壊で、壊口縁部の破片である。復原口径は13.5cmになる。壊底部にはカキ目を施している。4は土師器の高壊で、壊部と脚部の接合部分のみで器高等不明。なお脚内部を除く全ての面に赤色顔料を塗っている。

5～15は甕の破片で、5は口縁部先端部を欠き頸部までを残している。口縁部には細い櫛描波状文と下に2条の凹線をめぐらしている。櫛描文の状態から11と同一資料の可能性も残している。6も口縁部を欠いている。外面には櫛描波状文を施しその上には3条の凹線、下には2本の凹線をめぐらさせている。7では僅かに2本の凹線をめぐらしているのが判る。8は口縁部のみの破片で口径は25.3cmになる。端部を摘み上げていて、僅かにヘラ記号を残している。9は口径30.5cmになる破片で、口唇部は折り返している。外面には不鮮明ながら斜格子文を残している。8、9共に器壁は薄くなっている。10は口径46.5cmになる。口唇部には凹線をめぐらし、口縁部外面には3本の凹線に挟まれて波状文を施している。なお下段の凹線には刻目を施している。11は口径44cmになり、口唇部は折り返している。外面には細い櫛描文を3段にめぐらし、その間には2本の凹線をめぐらしている。12は頸部のみで口径等不明だが、上部に凹線をめぐらしており、施文されていたことが判る。13は短頸の甕になる。14と15は口縁部片で、14には刻目による羽状文が施され、15には櫛描波状文を3段に施文している。

### 32号横穴

30号横穴直上5mの位置に開口している。羨門に対し玄室全体が右側に寄っているため、主軸方向が不安定だがN 8°Eで、ほぼ北に向かって開口していた。すでに閉塞石を失っているが、羨門部床面から鉄鎌1点が出土した。羨門は上部を欠いているため現状では高さ143cm、幅90cmを測り、アーチ形になるものと思われる。右側には小さく棚状の掘り込みが見られたが、横穴との関係が不明なので図化しなかった。

玄室は入口部分幅251cm、奥壁190cm、左側壁304cm、右側壁285cmを測る。なお奥壁上部には26-B号横穴奥壁と接する穴が開口し、通路床面下と左屍床床面には31号横穴天井と接する穴が開口し

ていた。26-B号横穴との先後関係は先に述べたとおりだが、31号横穴との関係は今のところ不明である。

床面は「コ」字形で各戻床には仕切を有していたが、今では破損が著しく僅かに一部を残しているに過ぎない。天井はドーム形である。

#### 遺物

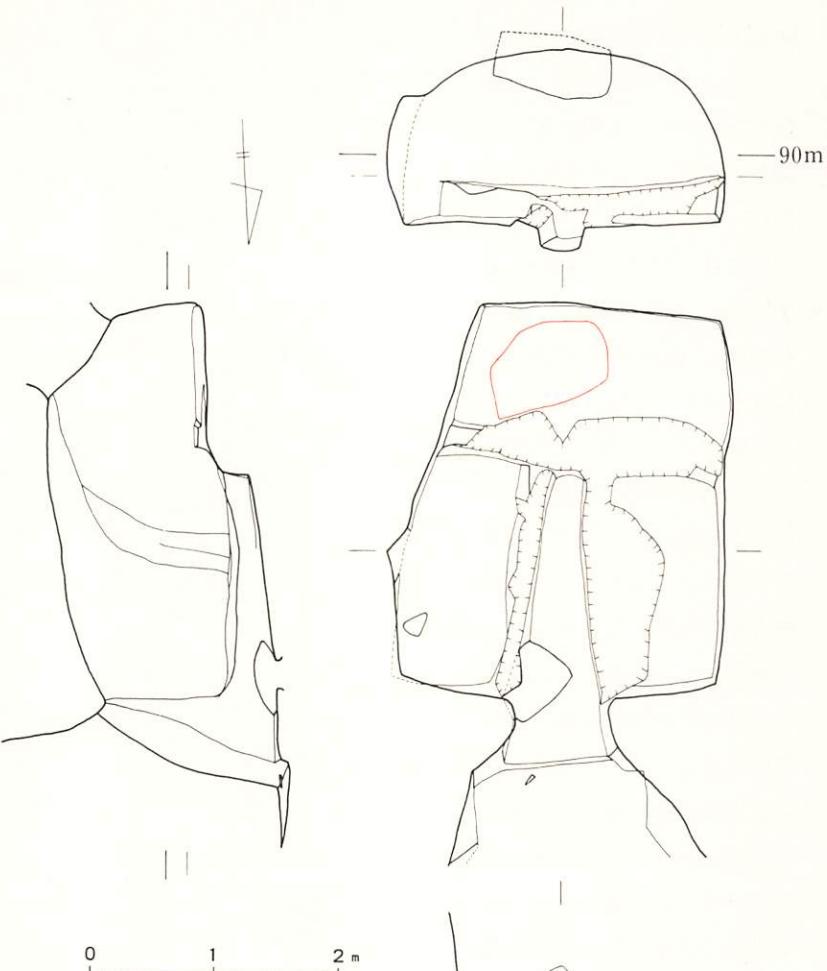
先にも述べたが羨門床面より鉄鏃1点が出土し、内部から須恵器破片が少量出土した。1は甕の破片で頸部を中心として残っている。器壁は薄く焼成も良い。

2は平根斧箭式の鏃で全長13.1cmを測る。茎で僅かながら「く」字に折れている。

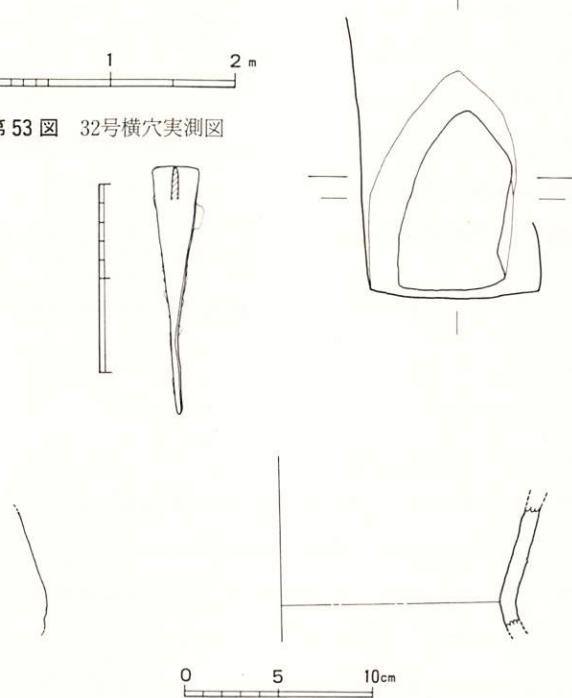
#### 33号横穴

30号横穴の右側上段に位置し、32号横穴の右下段になっている。すでに閉塞石を欠いて開口していたが、横穴自体の造りも保存状態も極めて良好な状態であった。

主軸はN21°Wで北北西に向かって開口している。羨門は高さ95cm、幅



第53図 32号横穴実測図



第54図 32号横穴出土遺物実測図

60cmのアーチ形で飾縁を有していた。羨門から玄室への通路床面には小さな段を配しており、玄室との区別を行っていた。

玄室は入口部分幅250cm、奥壁190cm、左側壁285cm、右側壁294cmを測り、壁面は僅かに張りをもっている。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を有し、中央部には排水溝を刻んでいるが、奥屍床のそれは「ゴンドラ」形の舷を形どっていて、その高さは羨門より上になっていた。

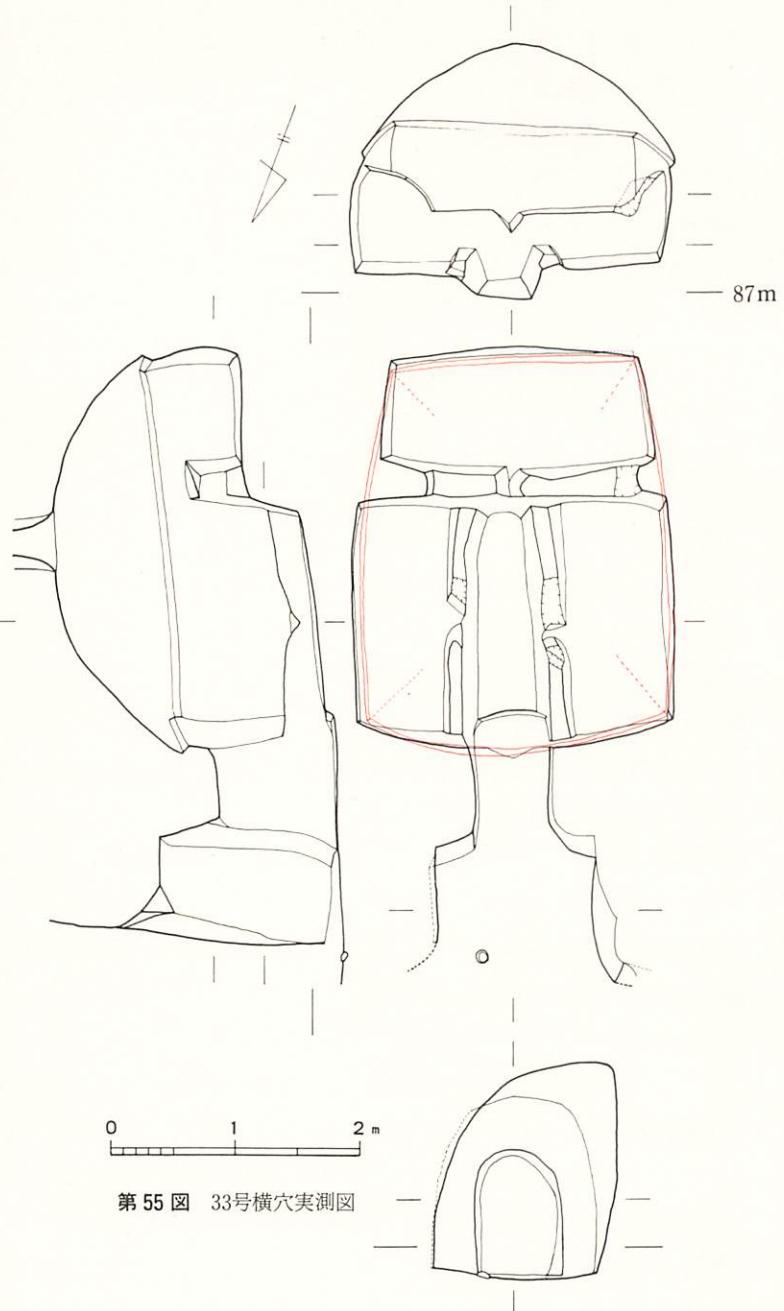
天井はドーム形で全面に軒先線を刻んでいて、通路先端部直上の天井には直径50cmの穴が約3mの長さで口を開いていた。この種の穴は他にも見ることができると、自然の穴か、人工のものか各自によって状況が変わっているので、その性格が判断できない。ただ、基本的には通路先端直上が多い。

#### 遺物

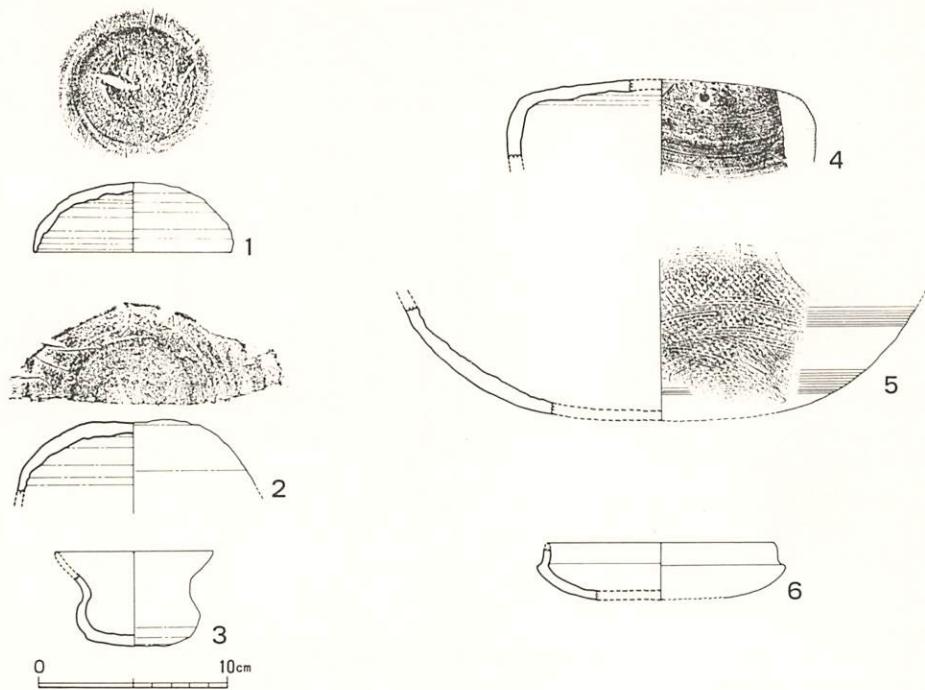
主に須恵器破片であるが、羨門部より壺蓋(1)が出土し、他は内部埋土中よりの出土で

あった。1と2は壺蓋で1は口径10.5cm、器高3.5cmを測る。天井部にはヘラ記号を残している。2は破片のため口径、器高不明、天井部は回転ヘラケズリを行っている。3は子持壺の子壺である。口縁部の一部を欠いているが、口径8.3cm程度で、器高5cmを測る。底部は不整形で、明らかに色調も異なっている。本体から剝離したものであろう。

4は平瓶の破片で5は提瓶の破片である。6は土師器の壺身片で口径12cm、最大径13.2cm、器高3cm程度になる。



第55図 33号横穴実測図



第56図 33号横穴出土遺物実測図

### 34号横穴

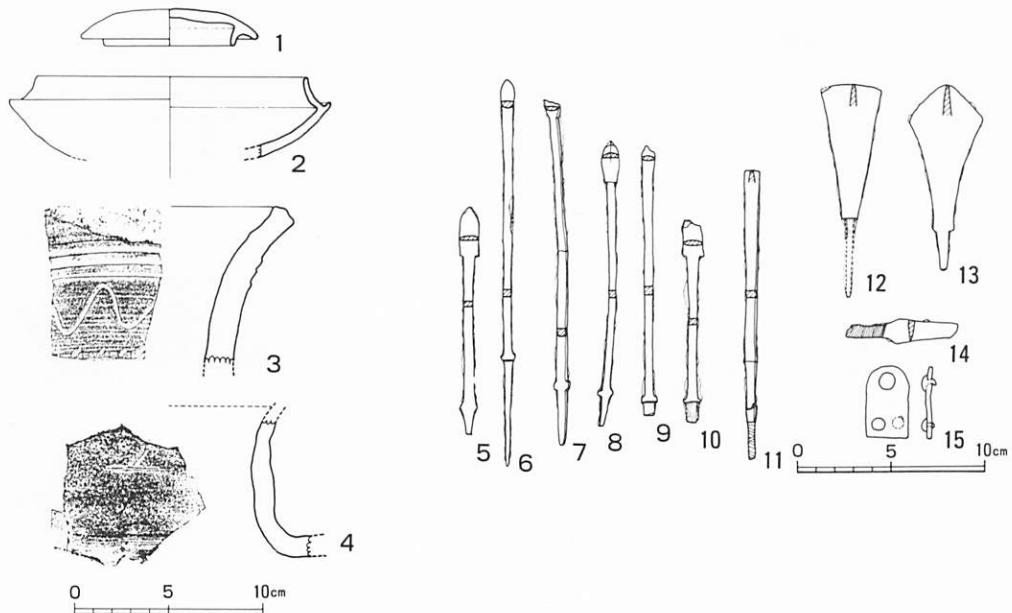
谷の奥壁近くに位置し、すでに閉塞石を欠いて埋没していた。前庭部を排土した段階で玄室内の堆積が厚く、日程的にも全体の排土作業を完遂するには無理があったため、内部の観察と遺物の取り上げのみを行って埋め戻した。

羨門はアーチ形で保存状態は良好であった。玄室は一見正方形に見え、端正な造りであったが、入口部分が250cm、奥壁196cm、左側壁229cm、右側壁252cmと数値に変化が見られた。床面は埋土で見られなかつたが、ボーリングステッキで「コ」字形の屍床を配していることが判明した。

天井には軒先線を全面に刻み、寄棟造の平入りとなっていた。

#### 遺物

前庭部より鉄鏃および留金具が出土し、埋土から須恵器片数点が出土した。1は壊蓋の破片で口径で6.9cm、最大径9.4cm、器高1.8cm、かえり高0.6cmを測る。天井部は平坦でつまみをもたない。2は壊身の破片で復原口径14.3cm、最大径17.1cmになる。3は甕の口縁部片である。粗い波状文とその上に3本の凹線をめぐらしている。4も甕の破片で頸からやや上にかけて残している。外面にヘラ記号を残している。5～11は尖根式鉄鏃である。5は茎先端を欠くため現長12cm、重さ8.5gを測る。身は三角形の片丸造りで関も小さい。籠被と茎の間には棘突起を有している。6は全長20.4cm、重さ16.5gを測るが、中央部で「く」字に曲がっている。身は三角形の片丸造りであるが関は不明。茎との関には棘突起を有している。7も中央で折れ曲がった鏃で、身の先端を欠いているため



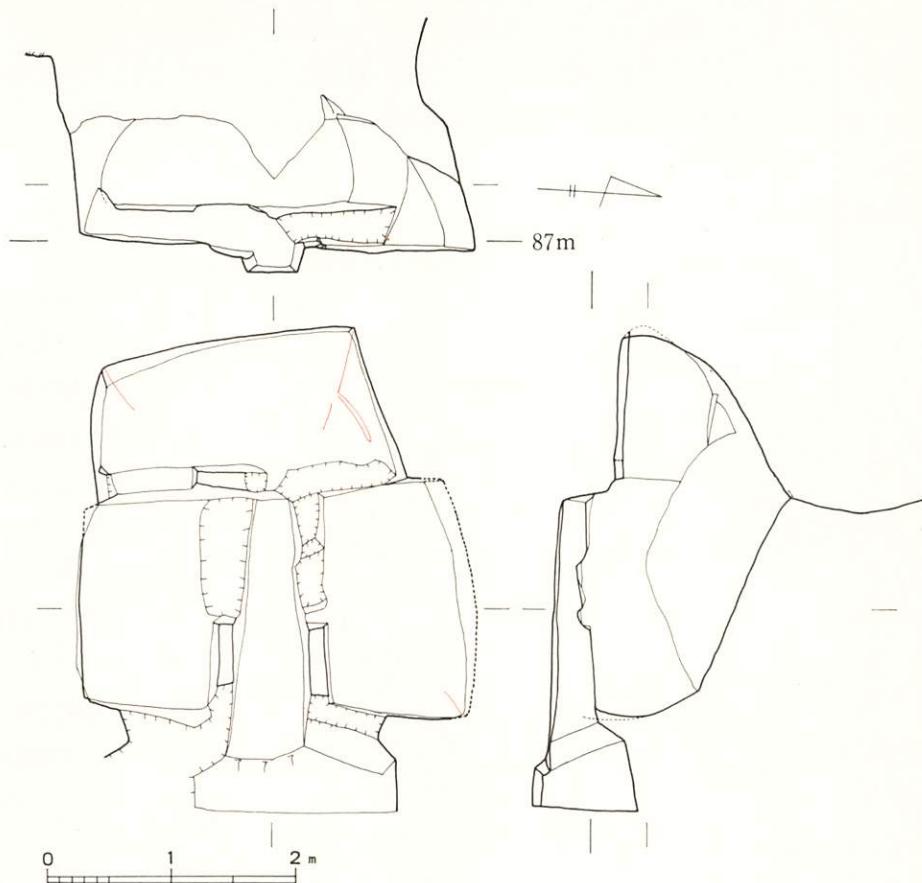
第57図 34号横穴出土遺物実測図

現長18.7cm、重さ20.7gを測る。身は三角形の片丸造りで関は小さい。茎との間には棘突起を有している。8も三角形で片丸造りの身をもち中央部で折れ曲がっている。また茎先端も欠けており現長14.9cm、重さ14.2gを測る。9も三角形の身で茎との間に棘突起を有している。両端部を欠いているため現長14.3cm、重さ10.4gである。10も両端を欠いているため現長10.7cm、重さ10gを測る。身は柳葉形の両丸造りで茎との間に棘突起を有している。茎には木質を残している。11は鑿頭式で関がない。茎先端を欠いているが樹皮を巻いている。現長15.2cm、重さ14gを測る。12と13は広根式鏃で12は斧箭式である。茎には木質を残し全長11.2cm、重さ22gである。13は圭頭式で茎の先端を欠いているため現長9.7cm、重さ24gを測る。14は刀子で茎端部を欠いているため現長5.9cm、重さ5.5gを測る。茎には樹皮を巻いている。15は留金具で3本の鏃を残している。表面は全面に鍍金を施し、裏面には木質を残している。この留金具は現場では全面に鏃が付着していたため気にもとめなかつたが、遺物整理の段階で初めて鍍金してあることに気がついたのであった。

#### 41号横穴

32号横穴と谷を挟んで対峙する様に開口している。すでに羨門および天井部の大半を欠いているため、保存状態は悪い。さらに、右側に横穴が先行していたため玄室プランも大きく左側に傾いた格好をしている。そのため主軸はN86°Eでほぼ北に向かっているが、奥壁は左側に寄っていた。この様な構造は13号横穴と非常に類似している。なお玄室の大きさは入口部分で306cm、奥壁201cm、左側壁265cm、右側壁320cmとなっている。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を有し、中央に排水溝を刻んでいるが、一部破損している。



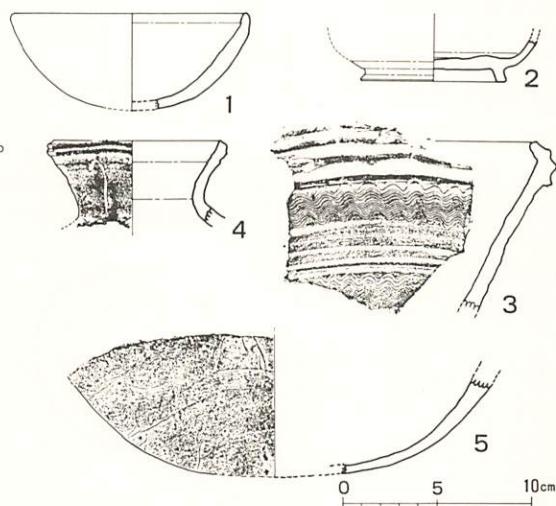
第58図 41号横穴実測図

天井は大半を崩壊しているが、僅かに軒先線と隅棟線の一部を残している。現状では形態は不明と言わざるを得ない。

#### 遺物

埋土中より須恵器大甕破片が多く出土した。1は土師器碗の破片で全面ヘラ研磨を施していた。口縁部は僅かに立ち上り端部は丸味をおびていた。口径は12.3cm、器高5.1cm程度になる。2は須恵器の高台付碗である。口縁部を欠くため口径、器高不明。底部はヘラ記号を残していた。

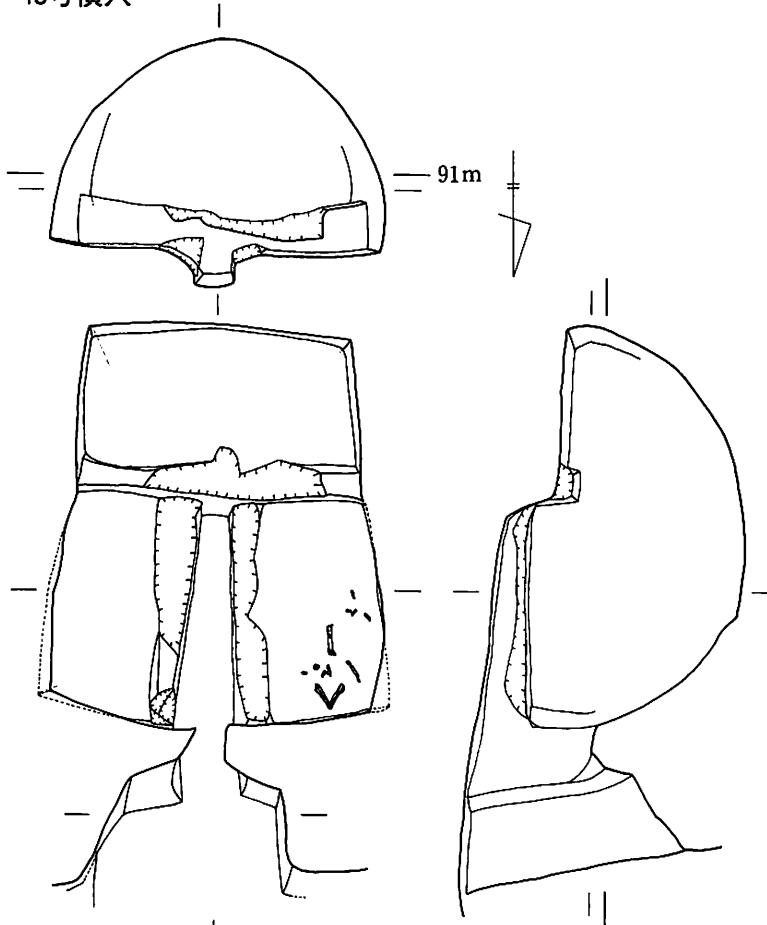
3は甕の口縁片で口唇部は内傾し、外側には3本の凹線をめぐらし、下位には櫛描波状文を2段にわたって施している。4は提瓶もしくは平瓶の口縁部片である。外部にはヘラ



第59図 41号横穴出土遺物実測図

記号を残している。6も提瓶もしくは平瓶の胴部片である。5と色調がレンガ色で似ているが、胎土、焼成に相違が見られ別個体と判断した。6は壺の胴部である。底部には二次的な穿孔が見られ17-B号横穴で見られた例と類似している。現状では器高、最大径等不明である。

43号横穴

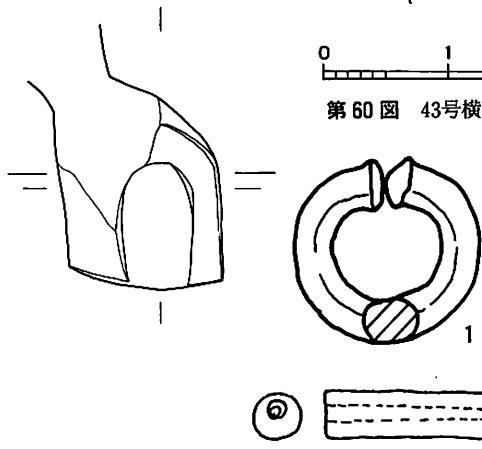


第60図 43号横穴実測図

5番目の谷の左側壁の中位に位置している。この横穴は昭和59年度調査の際羨門近くを一部排土したが、時間の都合で中止していたものであった。その時からすでに閉塞石を欠いていたが、羨門も上部を一部崩壊していた。高さ100cm、幅57cmのアーチ形で飾縁を有していた。

主軸はN 2°E でほぼ北に向かって開口していて、玄室は入口部分258cm、奥壁220cm、左側壁303cm、右側壁278cmを測り、台形に近いプランとなっている。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を有し



第61図 43号横穴出土遺物実測図

ていたが、大半は破損して両端部が僅かに残っている程度である。天井はドーム形で原形を保っていた。

#### 遺物

右側屍床から人骨と耳環1個が出土した。骨は露出した状態で出土した。そのため、前回の調査で確認しておけばもっと出土状況が明確になったのではと惜しまれる。また玉類も出土している。

1は全面に緑青をふいているが、一部に金を残していた。最大径2.54cm、重さ12.5gを測る。玉類は管玉、小玉が計12個出土したが、詳細は別表に譲る。

表-1 43号横穴出土玉類集成表

番号	図面番号	材質	色調	高さ(ミリ)	直径(ミリ)	孔径(ミリ)
1	55図-2	碧玉	モスグリーン	21.75	6.15	2.25 1.1
2	55図-3	ガラス	ブルー	2.7	4.7	0.7
3	55図-4	ガラス	グリーン	3.0	5.0	0.95
4	55図-5	ガラス	グリーン	3.1	4.75	0.9
5	55図-6	ガラス	黒	3.0	4.4	0.65
6	55図-7	ガラス	黒	3.3	4.65	0.60
7	55図-8	ガラス	黒	3.3	4.00	0.70
8	55図-9	ガラス	ブルー	2.0	3.0	0.60
9	55図-10	ガラス	黒	3.1	4.7	1.1
10	55図-11	ガラス	グリーン	3.25	5.05	1.2
11	55図-12	ガラス	紺	3.85	5.1	1.25
12	55図-13	ガラス	紺	2.3	5.6	1.3
13	図なし	ガラス	紺	2.2	3.8	1.0
14	図なし	ガラス	黒	6.3	7.0	1.0

## 46号横穴

谷の奥壁左側に埋没していたもので、すでに閉塞石を欠いていた。主軸は N27°E でほぼ北北東に向かって開口する様築かれている。羨門は高さ 87cm、幅 56cm の長方形で三重の飾縁を有している。

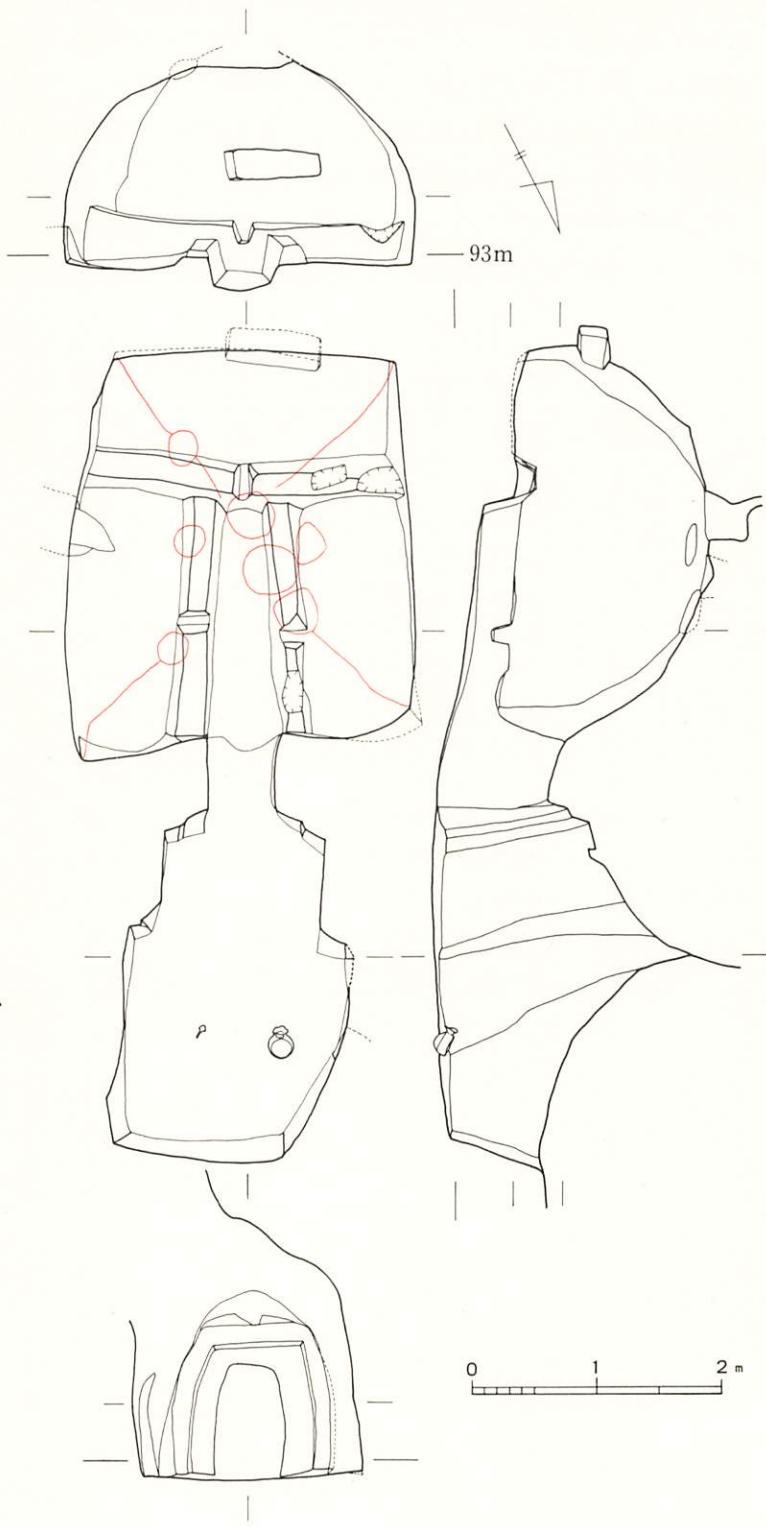
玄室は入口部分幅 265cm、奥壁 220cm、左側壁 303cm、右側壁 278cm を測る大きさで、壁面が僅かに曲線を描いている。

屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を有し、中央には排水溝を刻んでいた。左側壁には自然による直径約 50cm の穴が左側へ延びており、約 3~4 m 先に別の横穴が確認できた。また、奥壁には長さ 73cm、高さ 23cm、奥行 18cm の棚状の張り出しが造られていた。これには遺物は見られなかったが、供物台的性格を考えなければなるまい。

天井は隅棟線を有し、寄棟造と思われるが、穴が 7 個穿たれているため棟のラインが不明である。

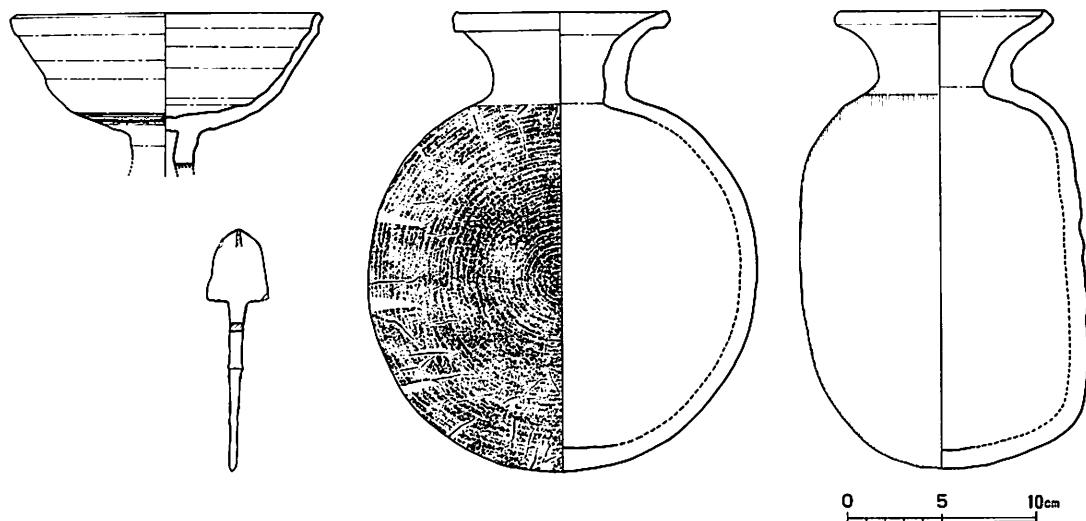
### 遺物

前庭部から赤焼けの提瓶と鉄鎌が各 1 点出土している。また埋土中から赤焼け



第 62 図 46号横穴実測図

土器の高坏が出土した。1は高坏の破片で、復原口径15.5cmを測るが、脚部を欠いているため器高は不明。2は提瓶で僅かに口縁部の一部を欠く極めて保存状態が良好である。口径10.5cm、最大径20.6cm、器高24.2cmを測る。胴部にはカキ目を残し、扁平な面には指頭圧痕を残している。3は三角形の身をもつ鎌である。全長12.8cmでほぼ完全な姿を留めている。



第63図 46号横穴出土遺物実測図

### III 小 結

第1次調査では湯の口溜池を中心として、一部抽出する様な形で調査を実施し、総数についても横穴群全域を探査したため十分な成果が出ず、今後の課題として残っていたのであった。

その反省もあって、今回の調査は横穴群の東端部から西へ200mの区域を中心として実施し、さらに、第1次調査で作成できなかった横穴配置図の作成に務めた。

調査の結果、かつてこの区域には72基を確認していたが、新たに60基を発見したのである。従ってこれまで総数198基を確認していたが、少なくとも258基の存在が明らかとなった。

僅か200mの区域においてこれだけ未確認であったことは、単純に計算しても、全長1km以上の区域では300基以上の横穴が未確認のまま眠っている可能性があり、総数500基以上は存在しているものと推察される。

これらのうち実測を行ったのは29基であるが、これまでの調査と合せると82基の実測調査を終了したことになる。

また、今回の調査で注目されるのは、5-B号横穴と17-B号横穴から出土した一連の遺物である。

5-B号横穴から出土した轡と一対の鎧は保存状態の良さに驚かされ、さらに、鎧の使用頻度を示す金具の磨耗が著しいものであった。

また17-B号横穴においては、横穴自身の構造も他を圧倒する様に豪華な造りとなっており、前庭部から羨門まで4m強を測り、そこには整然と置かれた須恵器と土師器が存在していた。内部からは馬具、武具、装身具が出土した。とくに装身具の中には一対の貝輪が含まれ、県下でも数少ないイモガイ製横切り形貝輪であることが判明した。

これらの資料は横穴に葬られた人々を考えるうえにおいて重要な資料であると言えよう。

前回の調査でも指摘した様に、横穴群構築に際して、工人集団と被葬者集団の解明が課題として残っているが、少なくとも遺物の内容から被葬者集団の解明に一步前進することができるのではなかろうか。

第1次調査も含め轡3点、鎧5点が出土しており、馬具がかなり使用されていたこともうかがうことができる。とくに5-B号横穴出土の一式の馬具は使用頻度が極めて高かったことを示しており、日常的に使用していたものと推察することができる。

さらに、横穴出土遺物の多くが、土器のほか武具、馬具および装身具であるという事実である。このことはとりもなおさず、これまで横穴被葬者は古墳の被葬者より低い階層で、一般民衆の墓であると理解されていたが、果たしてそれだけで十分であろうかと思われるるのである。

とくに菊池川中流域における横穴装飾の例からも、横穴外壁に人物、武具、馬等を中心としたレリーフを多く刻んだ事実とも関連させると、横穴に葬られた人々は武装集団的性格をおびた人々の墓であろうと理解されるのである。

このことについては別の機会に詳細な検討を加えることとして、今回の小結としたい。

## IV 付 論

### 熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨

松下孝幸\*・分部哲秋\*・佐伯和信\*・弦本敏行\*

#### はじめに

山鹿市立博物館では、山鹿市内における古墳や横穴群の詳細な資料を作成するために「菊池川中流域古墳・横穴群総合調査」を4ヶ年計画で実施している。

湯の口横穴群は熊本県山鹿市大字蒲生に所在する熊本県内でも大規模な横穴墓群のひとつである。本横穴群の調査は昭和59(1984)年度から行われており、人骨は昭和60(1985)年の1月から3月までの間に検出された。これらの人骨については既に報告したが(松下、他、1986)、昭和62(1987)年度の調査においても、人骨が新たに検出された。

残念ながら、前回同様人骨の保存状態は著しく悪いものであったが、なかには性別や年齢を推測することができるものもあったので、各横穴ごとの人骨の体数や性別などの推定結果を報告しておきたい。

#### 資料

各横穴墓から出土した人骨の数は表1に示すとおりである。今回の調査では合計23体の人骨が検出されたが、各横穴ごとの数は3-A号横穴と5号横穴で検出された人骨が最も多く、両者共6体を確認した。この23体のうち性別を判別できたのはわずか4体のみで、男女それぞれ2体ずつで、幼小児は4体、残りの15体は性別を明らかにすることはできなかった。なお、各人骨の性別・年齢は表2のとおりである。

これら出土人骨の所属時代は、別項で述べられているように、考古学的所見から古墳時代の後期である。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によった。

なお、比較資料として、今回は熊本県の津袋古墳人(松下、他、1986)、古城古墳人(松下、他、1985)、福原古墳人(松下、他、1985)、小路古墳人(松下、1985)、清水古墳人(内藤、他、1980)

\* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI, Toshiyuki TSURUMOTO

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

(長崎大学医学部解剖学第二教室(主任:内藤芳篤教授))

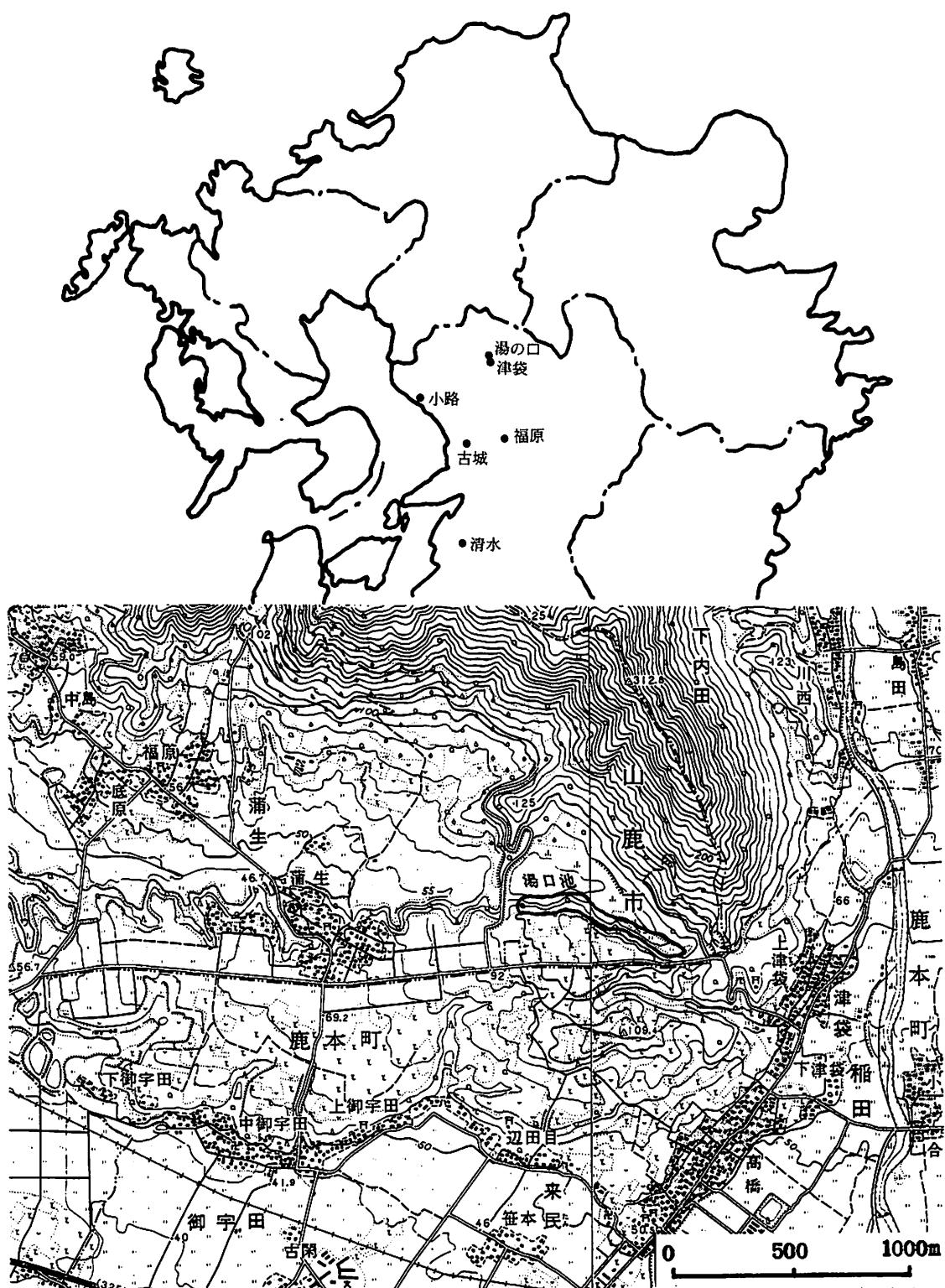


図1. 遺跡の位置 (Fig. 1. Location of Yunokuchi tunnel-tombs, Yamaga City, Kumamoto Prefecture)

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

	成 人			幼小兒 (含成年)	合 計
	男性	女性	不明		
2 - B 号横穴	0	0	1	0	1
3 - A 号横穴	0	0	5	1	6
3 - C 号横穴	0	0	1	1	2
5 号横穴	1	1	4	0	6
5 - B 号横穴	0	0	1	1	2
6 号横穴	0	1	1	0	2
7 号横穴	0	0	0	1	1
17 - B 号横穴	0	0	1	0	1
42 号横穴	1	0	0	0	1
43 号横穴	0	0	1	0	1
合 計	2	2	15	4	23

表2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

横穴墓番号	床別	体数	人骨番号	性別	年齢
2 - B 号横穴	左床	1	2 - B 号横穴 1 号人骨	不明	不明
3 - A 号横穴	奥床	1	3 - A 号横穴 1 号人骨	不明	不明
	左床	3	3 - A 号横穴 2 号人骨	不明	不明
			3 - A 号横穴 3 号人骨	不明	不明
			3 - A 号横穴 4 号人骨	—	幼兒
	右床	2	3 - A 号横穴 5 号人骨	不明	不明
			3 - A 号横穴 6 号人骨	不明	不明
3 - C 号横穴	奥床	1	3 - C 号横穴 1 号人骨	不明	不明
	右床	1	3 - C 号横穴 2 号人骨	—	小兒
5 号横穴	奥床	3	5 号横穴 1 号人骨	男性	壯年
			5 号横穴 2 号人骨	不明	壯年
			5 号横穴 3 号人骨	不明	不明
	左床	2	5 号横穴 4 号人骨	不明	不明
			5 号横穴 5 号人骨	不明	不明
	右床	1	5 号横穴 6 号人骨	女性	不明
5 - B 号横穴	左床	1	5 - B 号横穴 1 号人骨	不明	不明
	奥床	1	5 - B 号横穴 2 号人骨	—	成年
6 号横穴	不明	2	6 号横穴 1 号人骨	不明	壯年
			6 号横穴 2 号人骨	女性	熟年
7 号横穴	右床	1	7 号横穴 1 号人骨	—	小兒
17 - B 号横穴	左床	1	17 - B 号横穴 1 号人骨	不明	不明
42 号横穴	右床	1	42 号横穴 1 号人骨	男性	壯年
43 号横穴	右床	1	43 号横穴 1 号人骨	不明	壯年

を用いた。

なお、本稿では、成人骨は松下、佐伯、弦本が、幼小児骨（含成年）については分部がそれぞれ担当した。

## 所 見

### 《2-B号横穴》

#### 2-B号横穴 1号人骨（性別、年齢不明）

前頭骨の右側部分が6cm×7cm大の大きさで残存しており、側頭線は明瞭である。性別、年齢は不明である。

### 《3-A号横穴奥床》

#### 3-A号横穴 1号人骨（性別、年齢不明）

尺骨か腓骨と思われる骨の一部が残存していた。性別、年齢は不明である。

### 《3-A号横穴左床》

現場では大腿骨と頭蓋片および歯冠を検出したが、大腿骨の保存状態は著しく悪く、取り上げることができなかった。歯冠片はその形態と咬耗状態から推測すると、3体分存在するようである。しかし、攢乱が著しいことから、左床に3体分の遺体が埋葬されていたかどうかは不明である。

#### 3-A号横穴 2号人骨=歯1（性別、年齢不明）

残存歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	/	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	
/	/	/	P <sub>2</sub>	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	P <sub>1</sub>	/	/

その他に下顎大臼歯冠片が6片残存していた。

咬耗度はBrocaの1~2度である。

性別、年齢は不明である。

#### 3-A号横穴 3号人骨=歯2（性別、年齢不明）

上顎の左右の第二大臼歯冠が残存していた。咬耗度はBrocaの1度である。

性別、年齢は不明である。

#### 3-A号横穴 4号人骨=歯3（小児）

上顎右側の犬歯冠が残存していた。咬耗はほとんど認められない。従って、年齢は小児の可能性が強い。

### 《3-A号横穴右床》

#### 3-A号横穴 5号、6号人骨（いずれも性別、年齢不明）

1体分の頭蓋と大腿骨が3本、脛骨が2本残存していた。従って右床には2体分の人骨が認められるが、このうちの1本の大蔡骨は奥床あるいは左床からの混入と考えられる。人骨の保存状態は著しく悪く、ほとんど取り上げることができず、計測も観察も不可能である。

### 《3-C号横穴奥床》

#### 3-C号横穴1号人骨（性別、年齢不明）

現場では大腿骨と脛骨とを検出することができた。残存人骨は1体分の人骨と考えられる。保存状態は著しく悪く、取り上げることができず、従って、その特徴は不明である。

### 《3-C号横穴右床》

#### 3-C号横穴2号人骨（6歳、小児I期）

##### 1. 頭蓋

頭蓋は脳頭蓋の小片が残存しているが、骨種および部位は不明である。骨壁は薄く、幼児期後半から小児期前半のものと考えられる。歯はすべて遊離歯で、上顎の乳歯が1本と永久歯が13本残存している。これを歯式で示すと、次のとおりである。

／	(P <sub>2</sub> )	(P <sub>1</sub> )	(C)	(I <sub>2</sub> )	(I <sub>1</sub> )	／	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>2</sub> )	(C)	(P <sub>1</sub> )	(P <sub>2</sub> )	(M <sub>2</sub> )	( )	：歯槽内埋伏	
M <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	M <sub>1</sub>	／	：不明

先ず咬耗の状態は、右第二乳臼歯がBrocaの2度、左右第一大臼歯は1度で、その他には認められない。次いで歯根の形成程度は、中切歯および第一大臼歯は欠損のため不明、側切歯と第一小白歯は歯冠が完成直後、犬歯および第二小白歯は歯冠が完成していない。

##### 2. 四肢骨

四肢骨の骨片が残存しているが、小片のため骨種および部位は不明である。

##### 3. 年齢

歯の萌出と歯根の形成状態から年齢を推定してみると、先ず萌出状態は、咬耗の有無から上顎の第一大臼歯まで萌出している。藤田（1965）の現代人の萌出時期によれば、上顎の第一大臼歯は男性平均6歳8ヶ月、女性平均6歳4ヶ月で萌出し、また未萌出の上顎中切歯は男性平均7歳5ヶ月、女性平均7歳2ヶ月で萌出することから、萌出状態からの年齢は6歳後半から7歳前半と推定される。次いで歯根の形成程度は、観察できる歯すべてが金田（1957）による現代人の歯根形成時期の7歳未満である。以上のことから、現代と古墳時代の歯の萌出および歯根の形成時期が大差ないと仮定すれば、この人骨の年齢は約6歳の小児（I期）と推定される。

### 《5号横穴奥床》

#### 5号横穴奥床人骨

奥床には、2体分の頭蓋と大腿骨5本、脛骨1本、上腕骨1本および骨種不明の長骨が3本残存していたが、保存状態が著しく悪く、四肢骨を取り上げることはできなかった。現場で、できるかぎりの観察を行ったが、上腕骨は太く、大腿骨5本のうちの2本も太く、これらはおそらく同一個体（5号横穴1号人骨）で、男性骨と考えられる。

残存していた大腿骨の数から、奥床に残存していた人骨は少なくとも3体分と推定される。

また、歯冠が残存していた。

#### 5号横穴1号人骨=歯1（男性、壮年）

残存歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

/ M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C / /	I <sub>1</sub> / / P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>	(/ : 不明(破損))
M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C / /	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> / / / M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>	

咬耗度は Broca の 1 度である。

歯の径がかなり大きいことから、男性の歯冠と推定した。また、年齢は歯の咬耗が著しく弱いことから、壮年と考えられる。この歯冠はおそらく上記の男性骨と同一個体と思われる。

5号横穴 2号または3号人骨=歯 2 (性別不明、壮年か成年)

残存歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / / / / / /	/ / / / / / M <sub>2</sub> /	(/ : 不明(破損))
/ / / / / / / / /	/ / / / P <sub>2</sub> / M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>	

咬耗度は Broca の 1 度で、M<sub>3</sub>は未萌出だった可能性もある。

性別は不明であるが、年齢は咬耗状態が著しく弱いことから、壮年あるいは成年の可能性が考えられる。

### 〈5号横穴左床〉

5号横穴 4号、5号人骨 (共に性別、年齢不明)

2体分の頭蓋と大腿骨、脛骨がそれぞれ 1 本および寛骨が残存していたが、保存状態が著しく悪く、その特徴を明らかにすることはできなかった。

### 〈5号横穴右床〉

5号横穴 6号人骨 (女性、年齢不明)

大腿骨が 2 本残存していた。右側は保存状態が良く、取り上げが可能であった。右側は骨体上部が残存しており、殿筋粗面部は著しく陥凹しているが、骨体の径は細い。

計測値は、骨体上横径が 28mm(右)、骨体上矢状径は 22mm(右) で、上骨体断面示数は 78.57 (右) となり、骨体上部は扁平である。

径が細いことから、女性大腿骨と推定したが、年齢は不明である。

次いで、この計測値を周辺地域の例と比較してみた。表 3 に示しているとおり、計測値は距離的に最も近い津袋古墳人の 1 例と全く一致した。

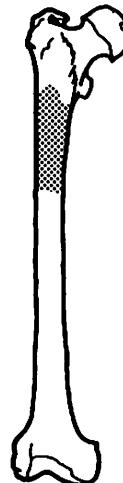


図 2. 人骨の残存部、アミかけ部分  
(5号横穴 6号人骨、女性)  
(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton.  
Shaded areas are preserved.)

表3 大腿骨計測値（女性、mm）（Table 3. Measurements and indices of female femora）

	湯の口		津袋		古城		福原		小路		清水		
	古墳人		古墳人		古墳人		古墳人		古墳人		古墳人		
	(松下、他)		(松下、他)		(松下、他)		(松下、他)		(松下)		(内藤、他)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
9.	骨体上横径	1	28	1	28	1	26	1	30	1	27	2	29.00
10.	骨体上矢状径	1	22	1	22	1	22	1	22	1	19	2	22.50
10/9	上骨体断面示数	1	78.57	1	78.57	1	84.62	1	73.33	1	70.37	2	77.50

## 〈5-B号横穴左床〉

## 5-B号横穴1号人骨（性別、年齢不明）

大腿骨と考えられる長骨の骨体が残存していたが、保存状態が悪く、詳細は不明である。

## 〈5-B号横穴奥床〉

## 5-B号横穴2号人骨（16～20歳、成年）

## 1. 頭蓋

頭蓋は歯のみが残存しており、これを歯式で示すと次のとおりである。

／ M <sub>2</sub> ／ P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> ／ ／ ／	／ ／ ／ P <sub>1</sub> ／ M <sub>1</sub> ／ (M <sub>3</sub> )	( ) : 齒槽内埋伏
(M <sub>3</sub> ) M <sub>2</sub> ／ P <sub>2</sub> ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ : 不明

歯は合計13本で、すべて遊離歯である。咬耗は第三大臼歯には認められず、第一大臼歯にはBroca 2度、その他には1度の咬耗が認められる。歯根の形成程度は、欠損のためすべて不明である。

## 2. 四肢骨

四肢骨は、大腿骨、脛骨および骨種が不明の小骨片が残存している。このうち大腿骨ははっきりした部位および左右の別は不明であり、脛骨は前縁部であるが、右側か左側か不明である。いずれも骨質はかなり厚くて、年齢は成人に近いものと推測される。

## 3. 年齢

歯の萌出状態と四肢骨の大きさから年齢を推定してみると、先ず歯は、咬耗の有無から第二大臼歯まで萌出し、第三大臼歯は未萌出である。藤田（1965）の現代人の萌出時期によれば、萌出している歯の中で最も遅く萌出する歯は上顎の第二大臼歯で、男性平均11歳11ヶ月、女性平均12歳であることから、少なくとも12歳以上である。さらに、この歯の咬耗はBrocaの1度であるが、やや強いため、歯からの年齢は小児II期の後半から成年期にかけて（14、15歳から20歳）と推定される。また、四肢骨の骨質の厚さは成人に近いことから、これも考えあわせると、この人骨の年齢は16歳から20歳の成年と推定される。

## 〈6号横穴〉

2体分の遊離歯冠が残存していた。これを歯式で示すと、次のとおりである。

表4 大腿骨計測値（mm）（Femur）

	湯の口
	5号横穴
	6号人骨
	女性
	右
9.	骨体上横径
10.	骨体上矢状径
10/9	上骨体断面示数

### 6号横穴1号人骨=歯1（性別不明、壮年）

/ M <sub>2</sub> / P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> / / / /	/ / / / / P <sub>2</sub> / M <sub>2</sub> /	(/ : 不明(破損))
/ M <sub>2</sub> / / P <sub>1</sub> / / / /	/ / C / / / / / /	

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗が著しく弱いことから、壮年の可能性が強い。

### 6号横穴2号人骨=歯2（女性、熟年）

/ / / / / / / / /	/ / / / / / M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>	(/ : 不明(破損))
/ M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> / P <sub>1</sub> / / / /	/ / / / P <sub>2</sub> / M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>	

咬耗度は Broca の 1~2 度である。径は小さい。

性別は、歯の径が小さいことから女性の可能性が強い。年齢は歯の咬耗状態から、熟年と推定した。

### 〈7号横穴〉

#### 7号横穴1号人骨（4~5歳、幼児）

##### 1. 頭蓋

下顎の遊離歯が合計 4 本残存しており、すべて永久歯である。これらを歯式で示すと、次のとおりである。

( ) : 歯槽内埋伏
/ / / / / / / / / (I <sub>2</sub> ) / (P <sub>1</sub> )(P <sub>2</sub> ) (M <sub>1</sub> ) / / : 不明

これらの歯には咬耗は認められない。歯冠と歯根の形成程度は、第一小白歯は歯冠の約 2/3 が、第二小白歯は約 1/2 が完成している。側切歯と第一大臼歯は歯冠の下部が欠損しており、不明である。

##### 2. 年齢

この人骨の年齢を歯の萌出および歯冠の形成程度から推定してみると、先ず、残存した歯には咬耗が認められないので、すべて未萌出であったと推測される。藤田（1965）の現代人の萌出時期によれば、これらの歯の中で最も早く萌出するのは第一大臼歯で、男性平均 6 歳 4 ヶ月、女性平均 6 歳である。したがって、萌出状態からは 6 歳未満である。また、第一および第二小白歯の歯冠の形成程度は約 1/2 から 2/3 でかなり形成しているので、この人骨の年齢は、4 歳から 5 歳の幼児と推定される。

### 〈17-B号横穴〉

#### 17-B号横穴1号人骨（性別、年齢不明）

大腿骨体が残存していたが、取り上げに耐えられる状態ではなかった。

### 〈42号横穴右床〉

#### 42号横穴1号人骨（男性、壮年）

遊離歯と四肢骨が残存していた。今回の発掘調査では最も保存状態が良好な人骨であった。

##### 1. 歯

残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

／／／／／／／／／／	／ I <sub>2</sub> ／／／／／／／／	〔／：不明(破損)〕
／／ M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> ／／／／	／／ C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> ／／／／	

咬耗度は Broca の 1 度である。

## 2. 四肢骨

上腕骨、脛骨および腓骨が残存していた。

### ①上腕骨

左右不明の骨体が残存していたが、保存状態は悪く、計測や観察は不可能である。

### ②脛骨

左右の骨体が残存していたが、乾燥による変形が認められ、緻密質が剥落しているため計測はできない。観察したところでは骨体の径は大きいようであるが、ヒラメ筋線の発達は悪い。

### ③腓骨

左側骨体の遠位部が残存していた。骨体の径はやや大きい。

## 3. 性別・年齢

性別は、骨体の径があまり小さくないことから男性と推定した。年齢は歯の咬耗が弱いことから、壮年と推定した。

### 《43号横穴》

#### 43号横穴 1号人骨 (性別不明、壮年)

遊離歯冠 3 本が残存していた。これらを歯式で示すと、次のとおりである。

M <sub>3</sub> ／／／／／／／	I <sub>1</sub> ／／／／／／／／	〔／：不明(破損)〕
／ M <sub>2</sub> ／／／／／／／	／／／／／／／／／／	

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗状態が弱いことから、壮年と考えられる。

## 要 約

熊本県山鹿市大字蒲生にある湯の口横穴群から、昭和59（1984）年度に引き続き昭和62（1987）年度の調査においても、人骨が新たに検出された。人骨の保存状態は著しく悪く、被葬者群の特徴を明らかにすることはできなかったが、女性大腿骨 1 例の計測が可能で、また、性別、年齢を推定することができたものもあった。その結果などは次のとおりである。

1. 今回の調査では合計23体の人骨が検出された。そのうち男性骨は 2 体、女性骨も 2 体、幼小児骨（含成年）は 4 体で、残りの15体は性別を明らかにすることはできなかった。
2. これらの人骨群は古墳時代後期に属する人骨群である。
3. 今回人骨を検出した横穴では人骨はすべて攪乱を受けており、自然の状態を示すものは認められなかった。
4. 保存状態が著しく悪く、大部分の骨は取り上げることすらできなかったが、わずか 1 例ではあ

るが、女性の大腿骨体上部の計測ができた。この例は骨体が細く、かつ骨体上部は扁平であった。

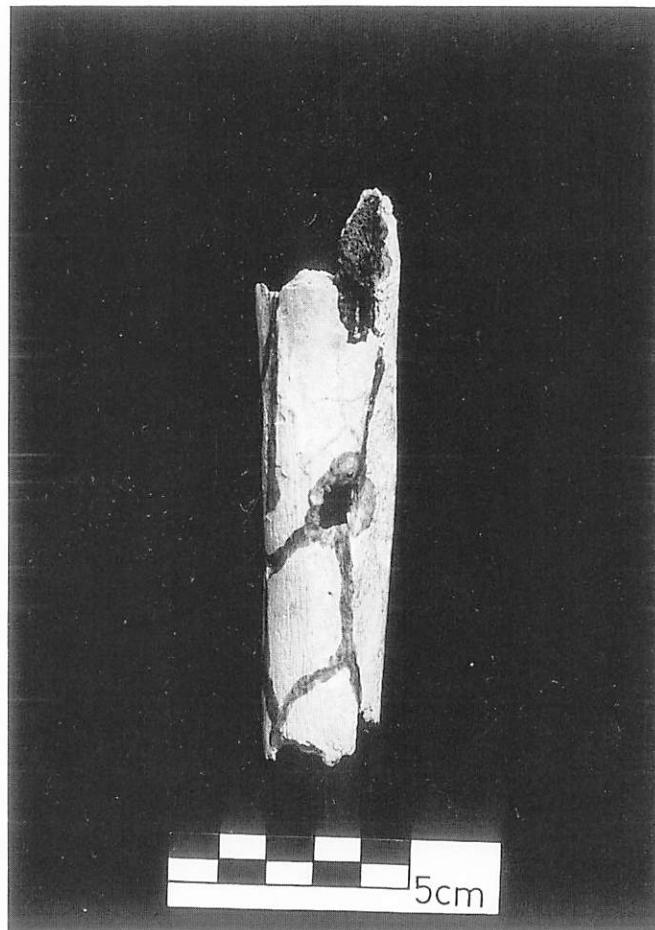
5. 前回の調査では、男性の大腿骨の特徴の一部をかろうじて明らかにすることができた。今回はやはり1例ではあるが、女性大腿骨の骨体上部の計測が可能で、その計測値は隣接する鹿本町の津袋古墳人の値に一致した。前回報告したとおり、男性大腿骨の径は津袋古墳人よりは大きいが、女性は男性の場合とは異なり、津袋古墳人との間に差は認められない。

本横穴群の規模は、熊本県でも有数な横穴群であり、これから出土する人骨の特徴が把握できれば、熊本県北部地域の古墳人の特徴を一気に解明できるものと期待している。しかしながら現時点では保存良好な人骨に恵まれていない。本遺跡では300基に近い横穴が存在することが予想されるので、将来保存良好な人骨が発掘されることもまだ十分期待できるし、また期待したい。

《擷筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた山鹿市教育委員会および山鹿市立博物館の諸先生方、特に中村幸史郎先生に感謝致します。》

#### 参考文献

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸、他、1985a : 熊本市古城横穴群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129-146.
3. 松下孝幸、1985b : 玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第6集）：32-48.
4. 松下孝幸、他、1985c : 熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29-42.
5. 松下孝幸、他、1986a : 熊本県鹿本町津袋大塚東側1号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第2集）：5-33.
6. 松下孝幸、他、1986b : 熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)）：111-122.
7. 内藤芳篤、1975 : 塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集：317-322.
8. 内藤芳篤、分部哲秋、1980 : 清水1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓（熊本県文化財調査報告第41集）：22-28.



湯の口 5 号横穴 6 号人骨 (女性、年令不明) ・ 大腿骨  
(Right female femur of No. 6 skeleton, Yunokuti tunnel-tomb No. 5)

# 図版



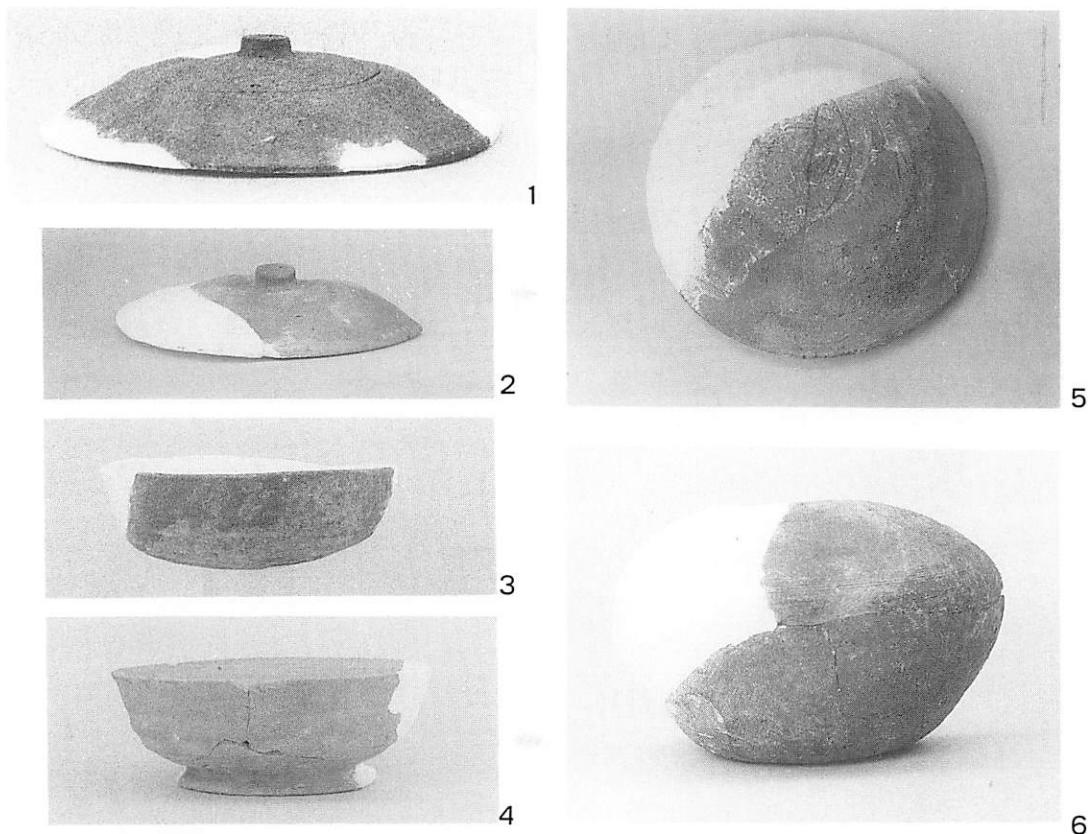
湯の口横穴群遠景



1、2号横穴



2号横穴



2 - B 号横穴出土遺物



3 号横穴

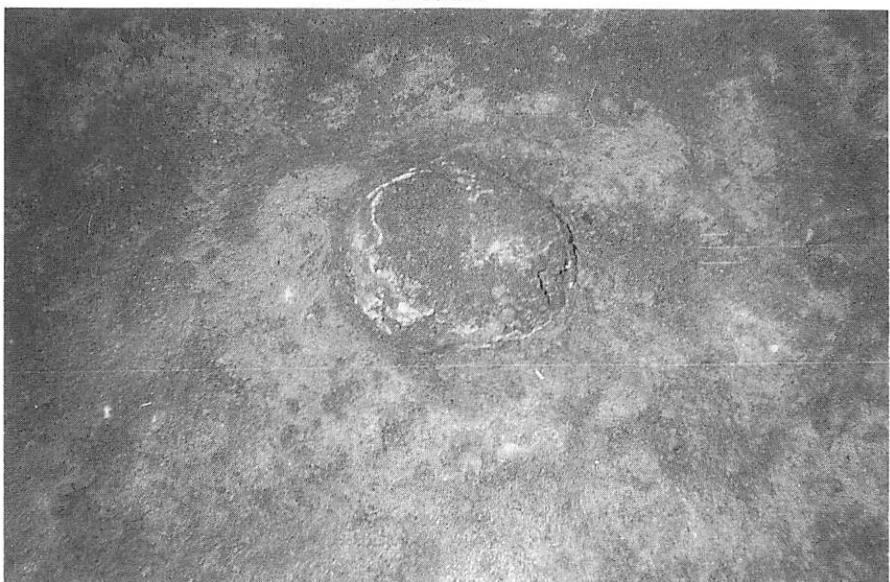


3—A号横穴人骨出土状況



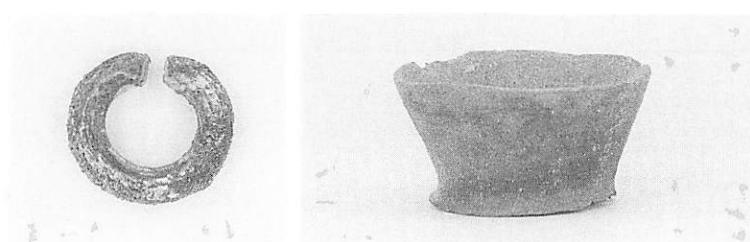
3-C号横穴

1



2

3-C号横穴人骨出土状況

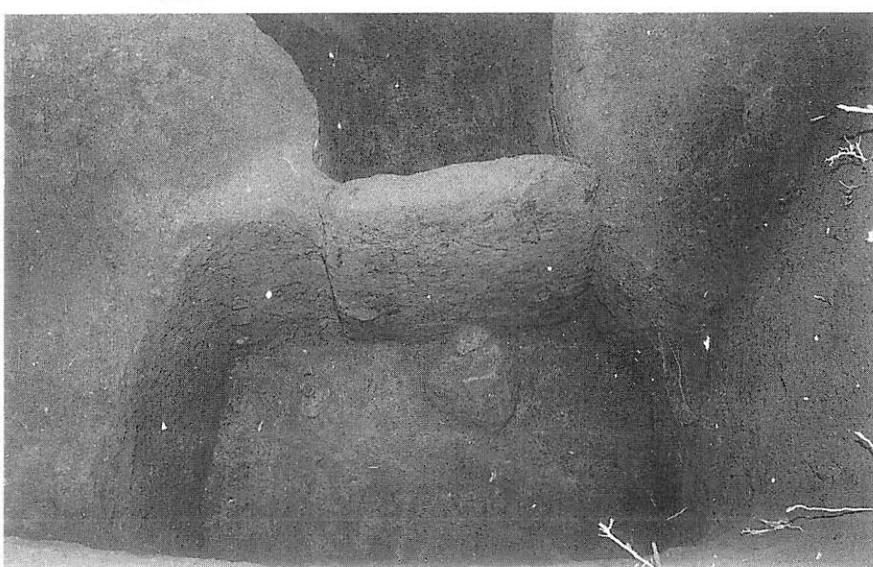


3-C号横穴出土遺物

3-B号横穴出土遺物

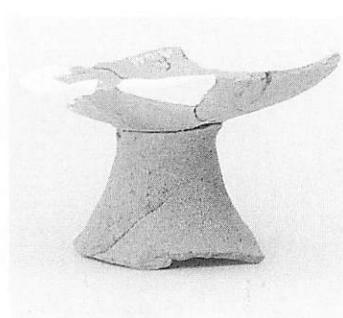


1



2

4号横穴

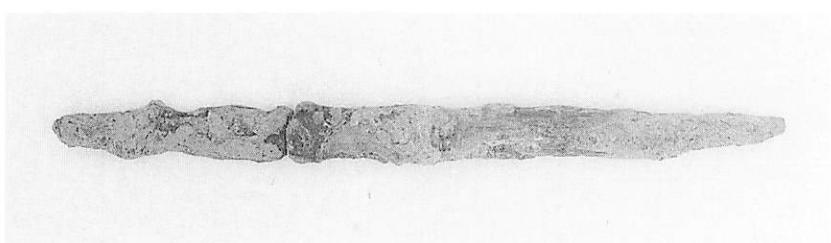


閉塞石及び遺物出土状況 (1~2)  
4号横穴出土遺物 (3~5)



1

5号横穴（内部より羨門を見る）



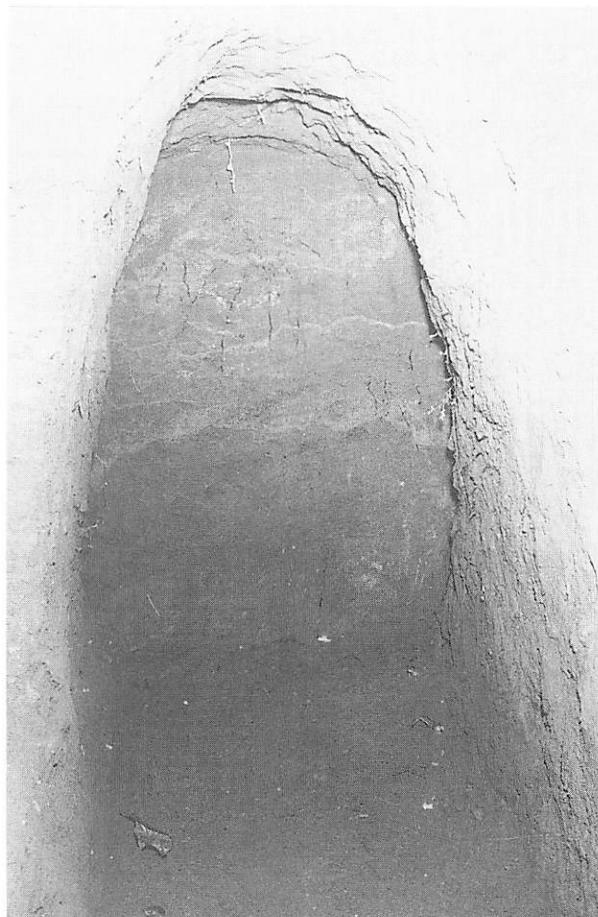
2

5号横穴出土遺物



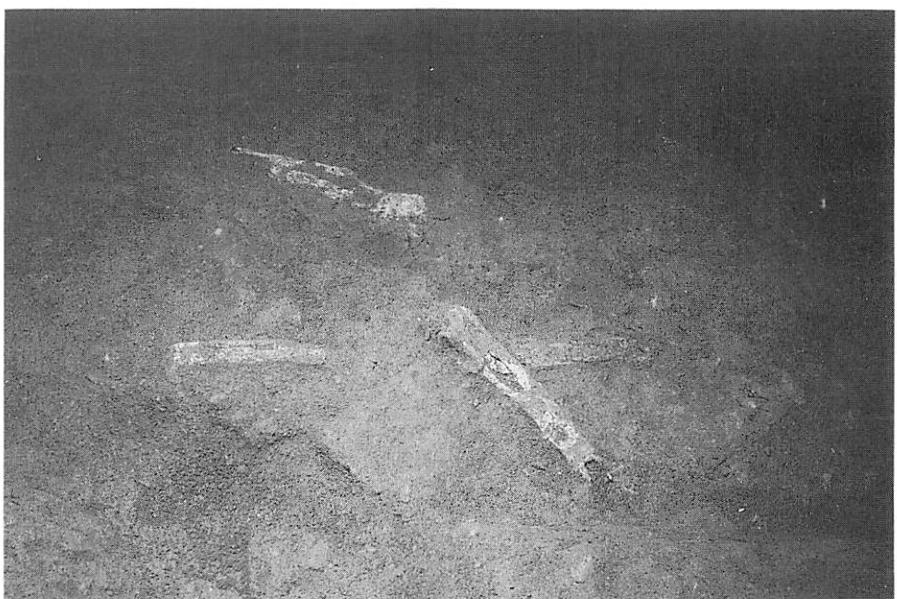
3

5-B号横穴



1

5-B号横穴閉塞石（内部より）



2

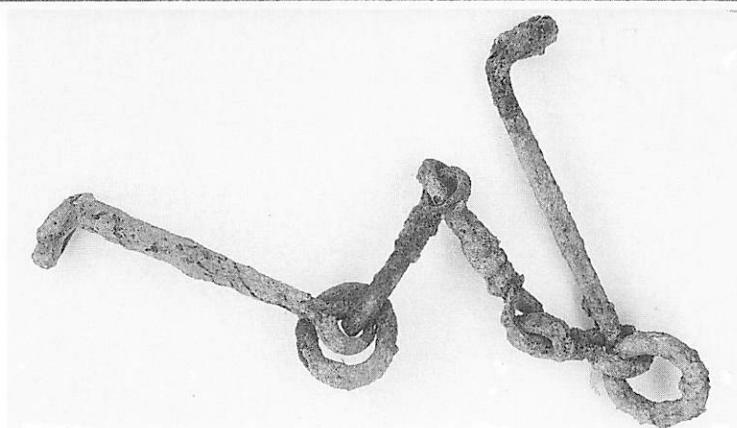
5-B号横穴人骨出土状況



1



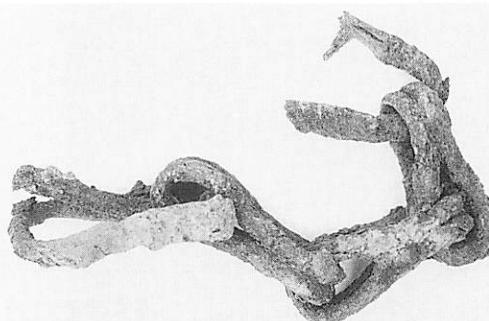
2



3

5-B号横穴遺物出土状況（1～2）

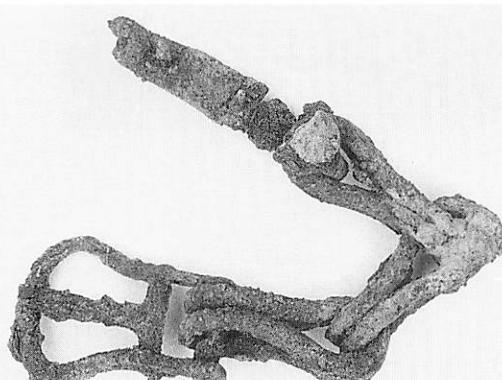
5-B号横穴轡物出土状況（3）



1



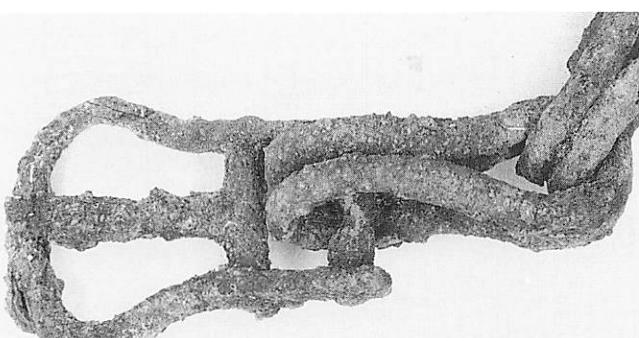
5



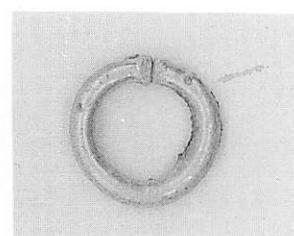
2



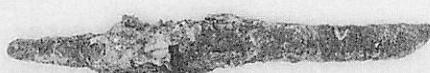
6



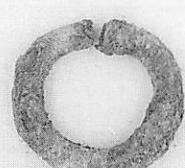
3



7

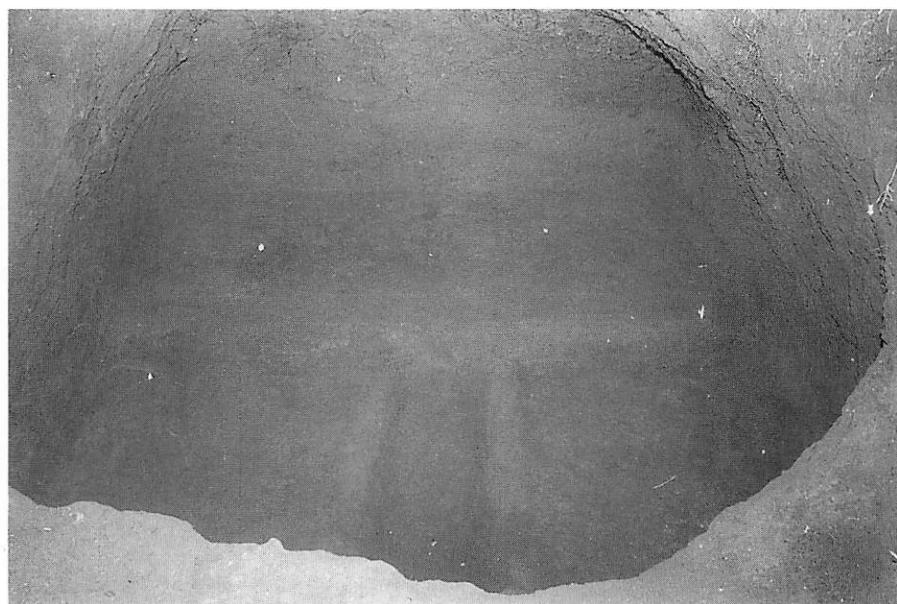
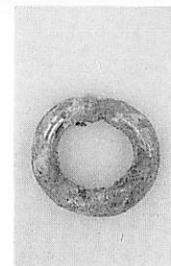
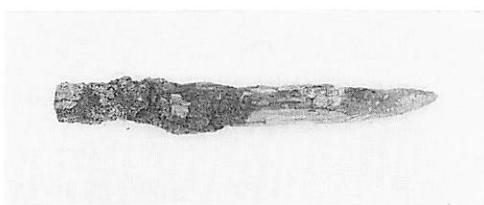


4

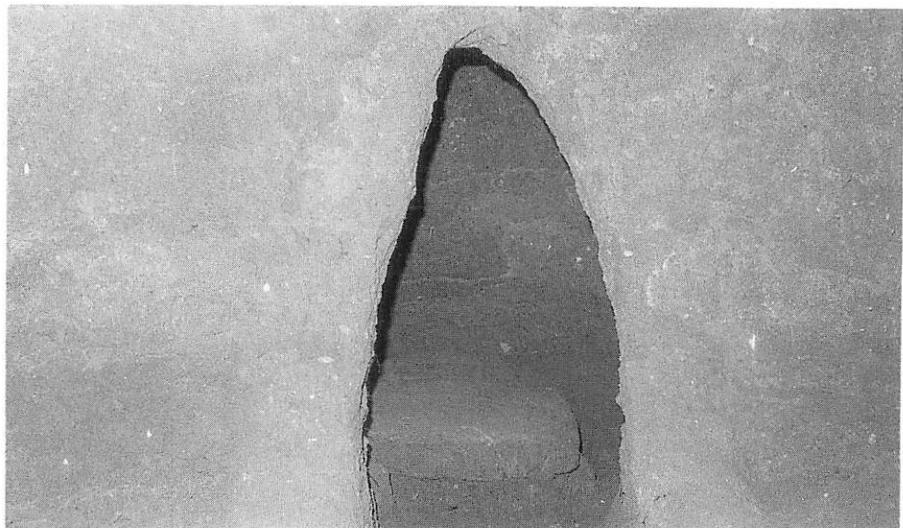


8

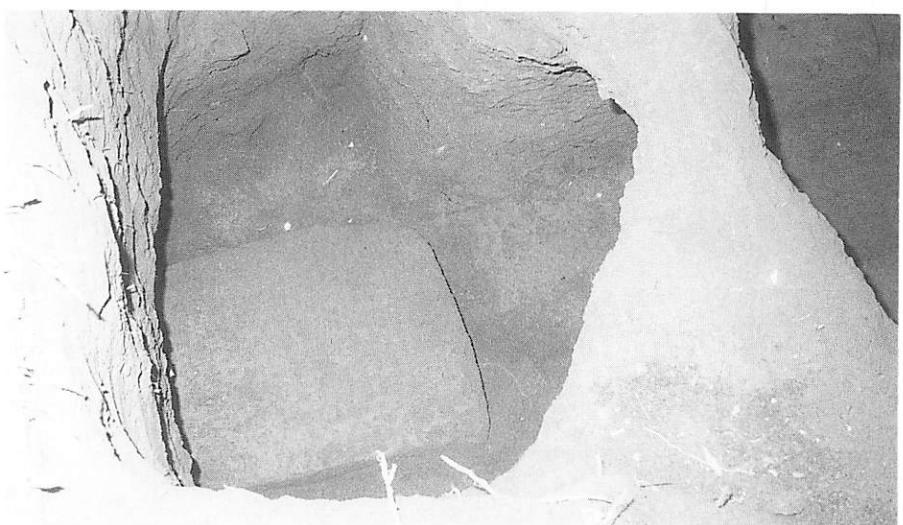
5 - B号横穴出土遺物



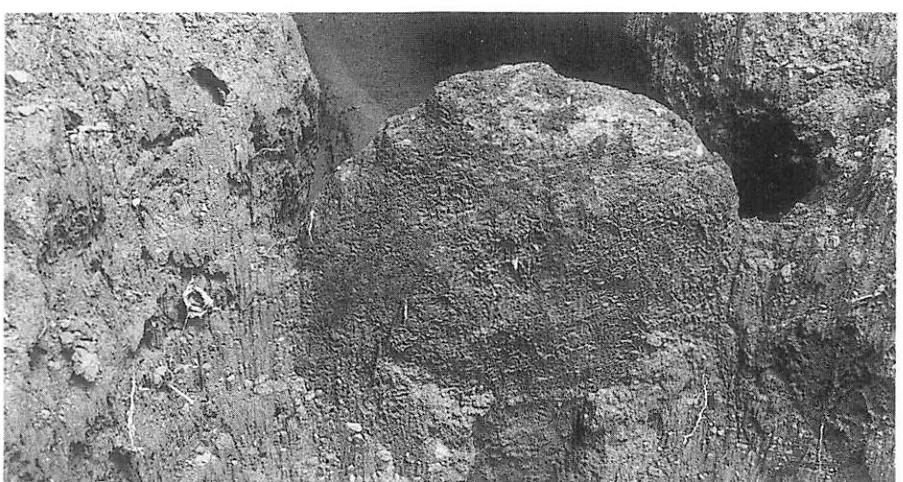
6号横穴奥壁 ( 1 )  
6号横穴出土遺物 ( 2 ~ 3 )  
7号横穴 ( 4 )



1

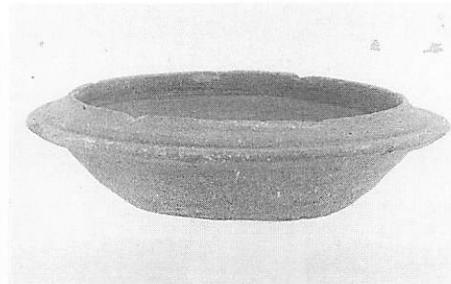


2



3

7号横穴閉塞石出土状況 (1~2)  
9号横穴閉塞石出土状況 (3)



2

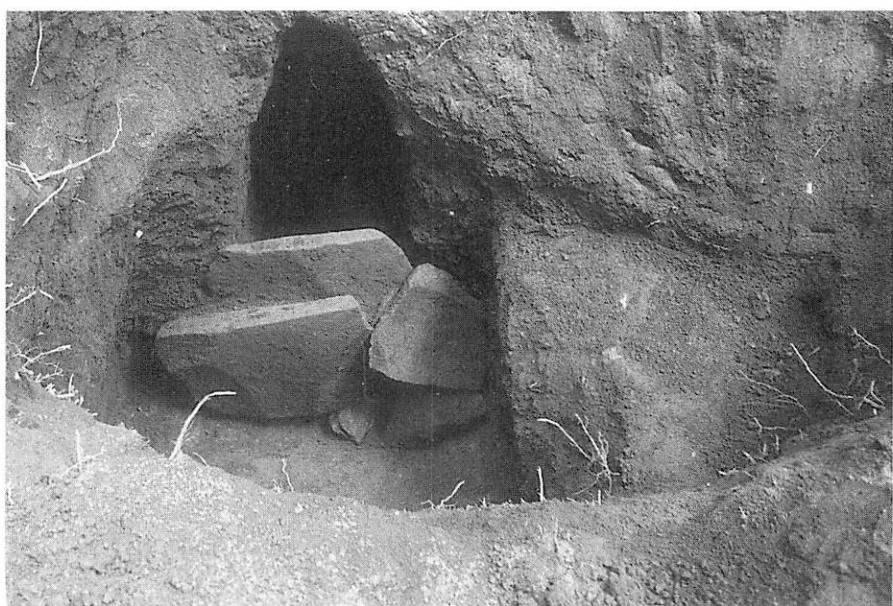


3

11号横穴出土遺物

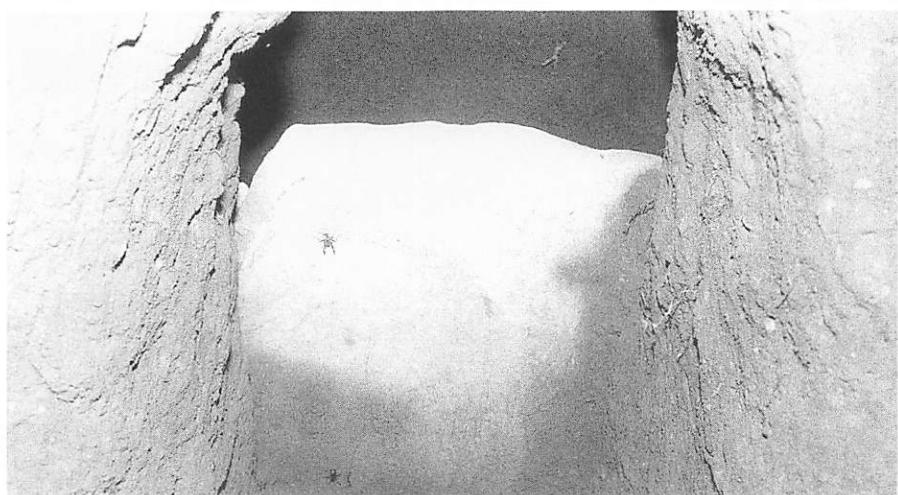
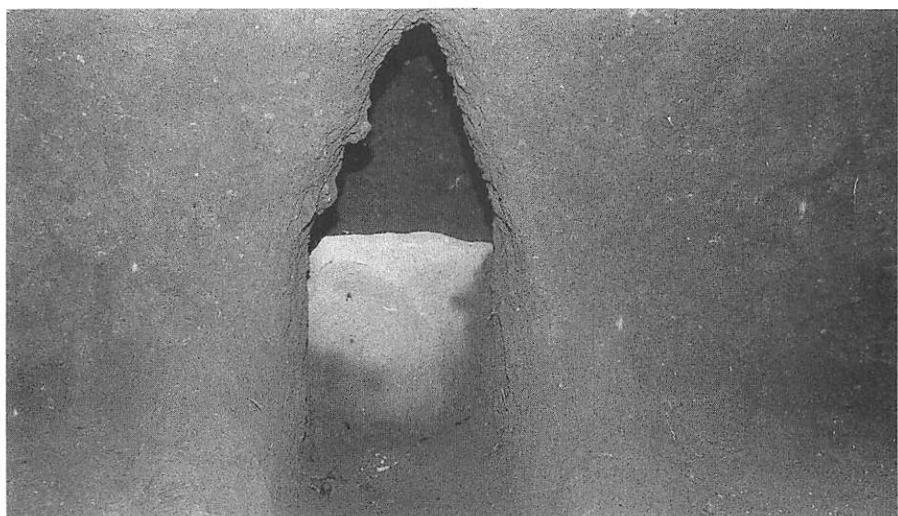
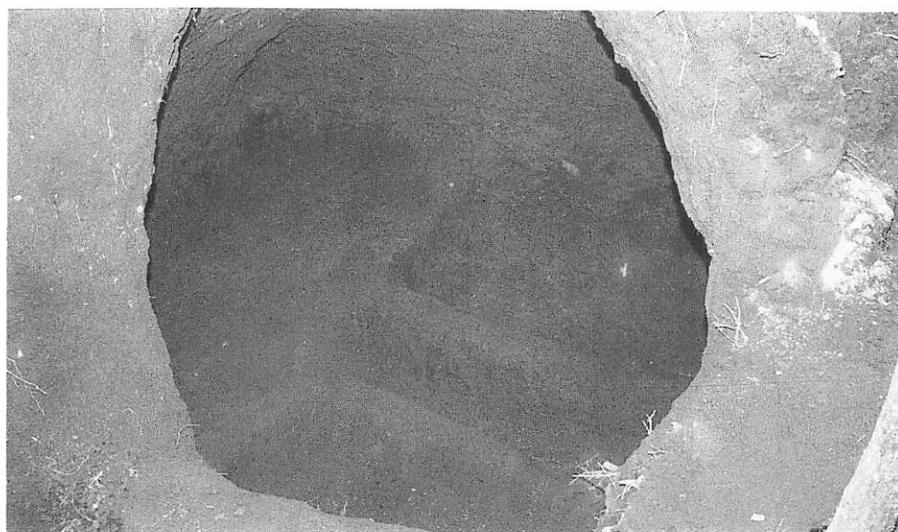
1

9号横穴

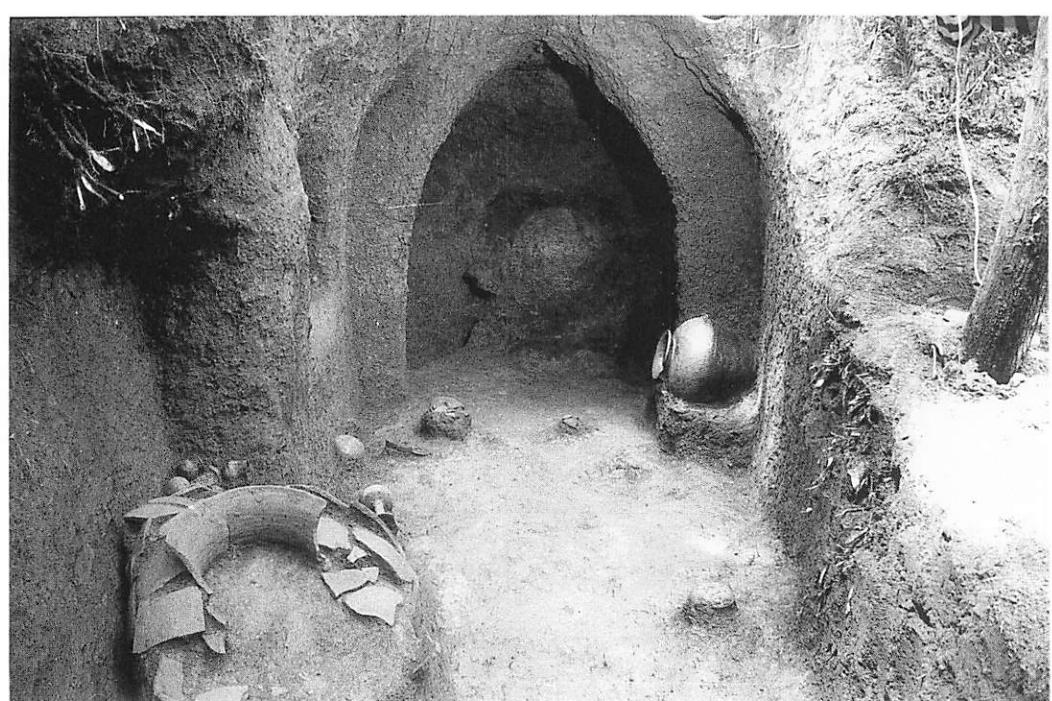
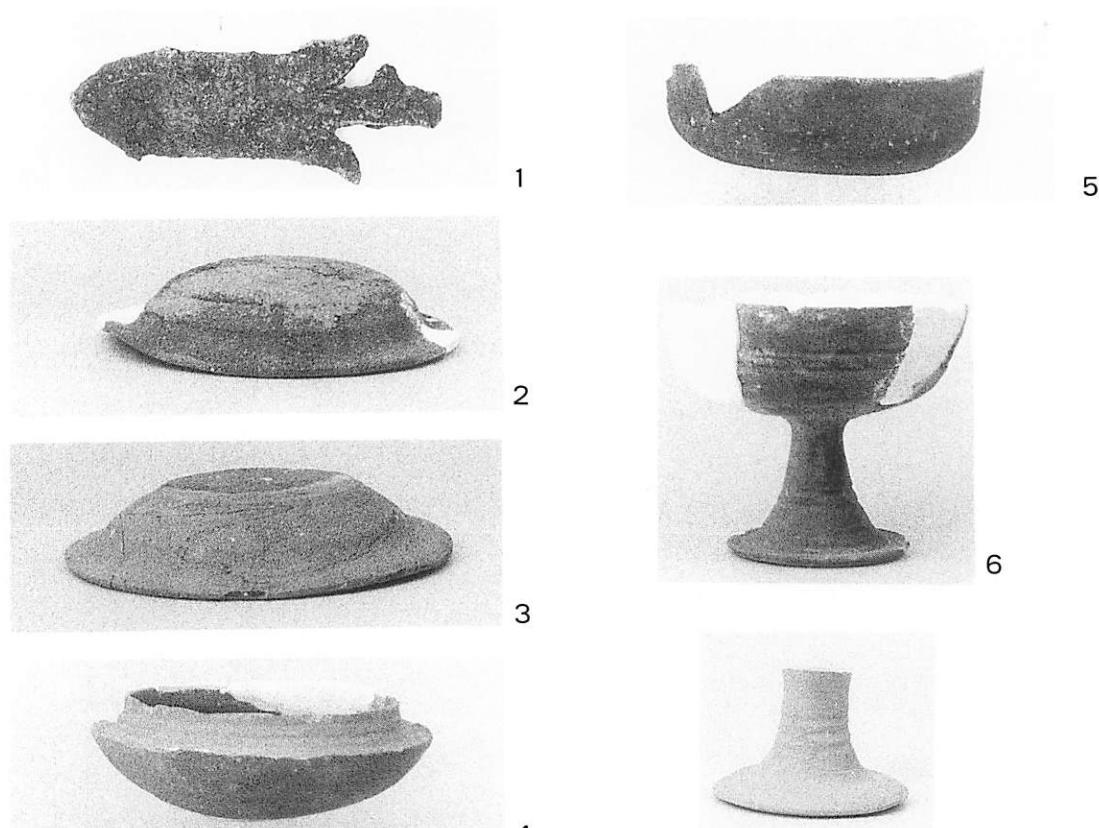


4

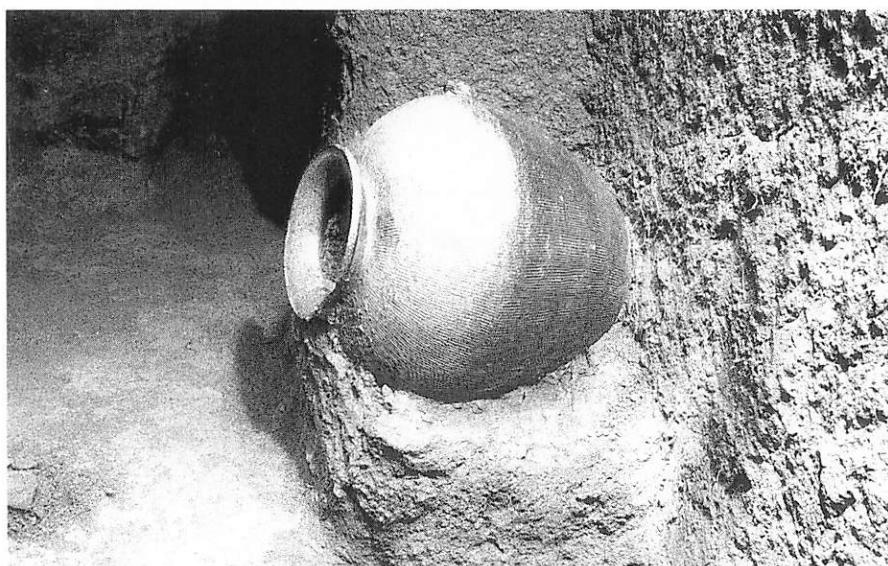
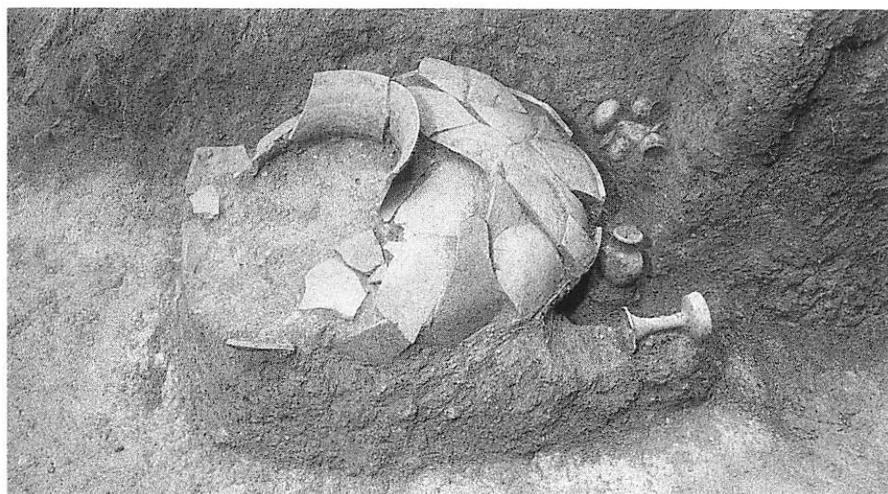
13号横穴羨門部



13号横穴



17号横穴出土遺物 (1～7)  
17-B号横穴羨門部 (8)



17-B号横穴遺物



17-B号横穴  
羨門閉塞状況

1



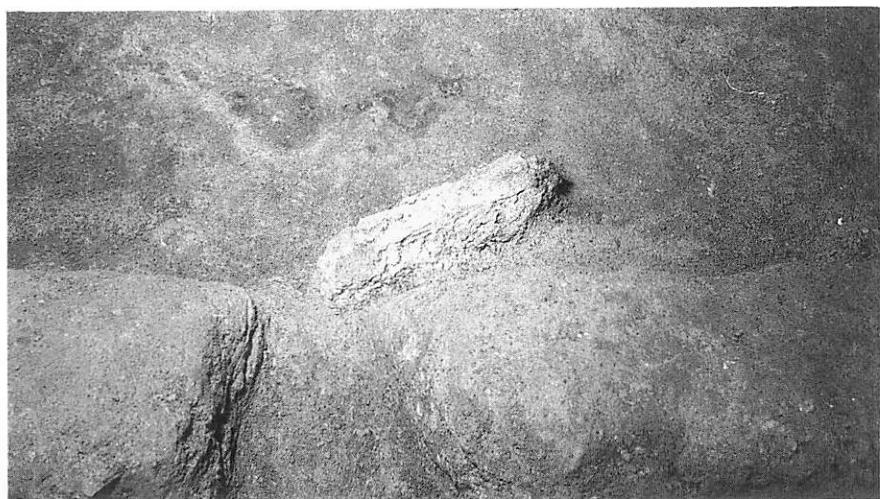
17-B号横穴  
羨門閉塞石除去状況

2

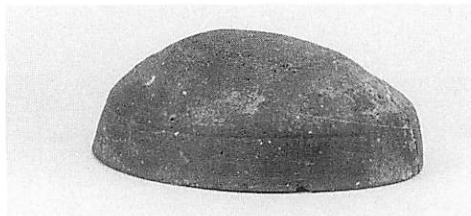


貝輪出土状況

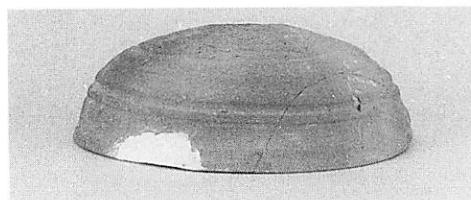
3



17—B号横穴遺物出土状況



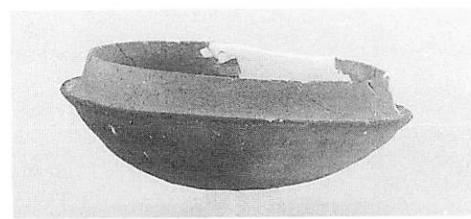
1



2



4



3



7



5



6



8

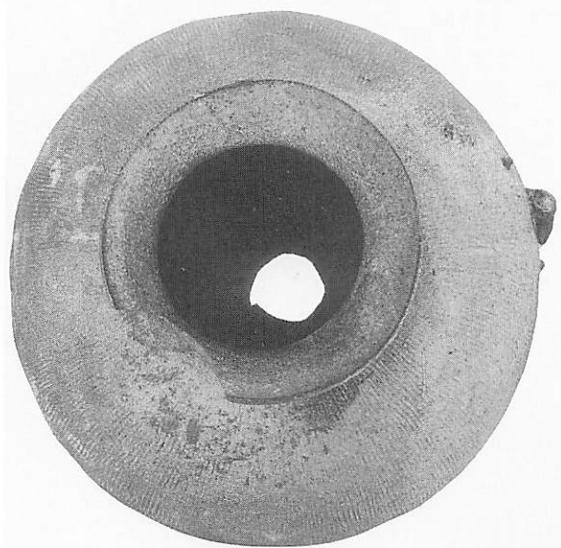
17-B号横穴出土遺物



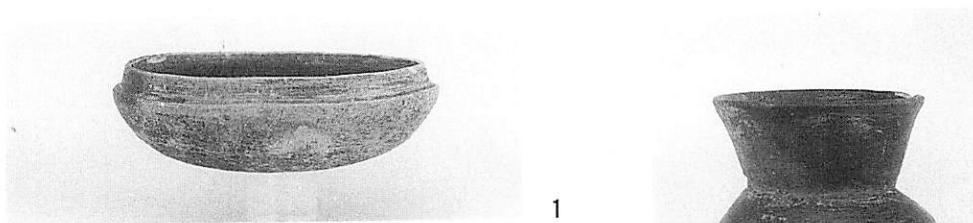
1



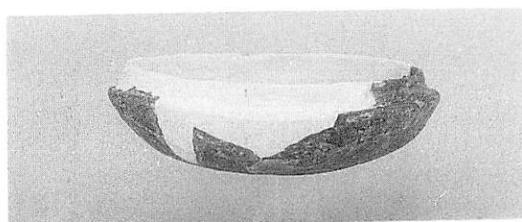
2



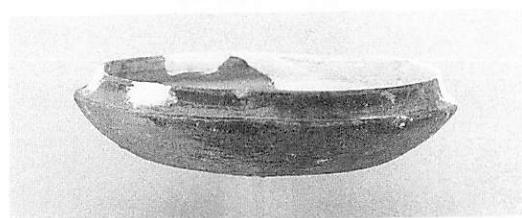
3



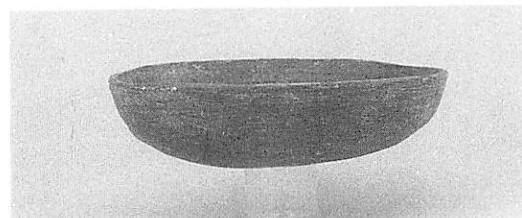
1



2



3



4



5



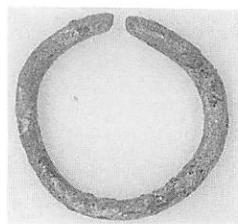
6



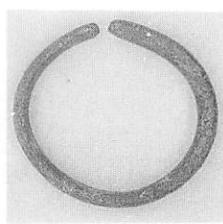
7



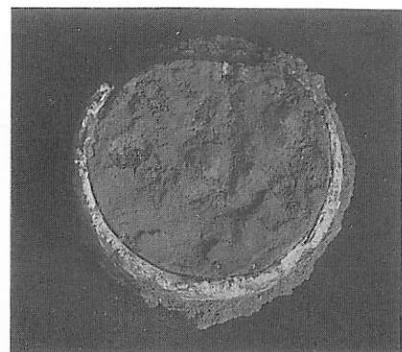
8



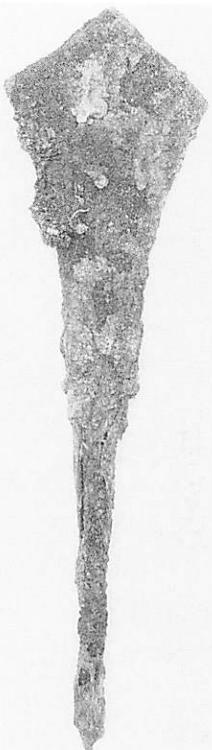
1



2



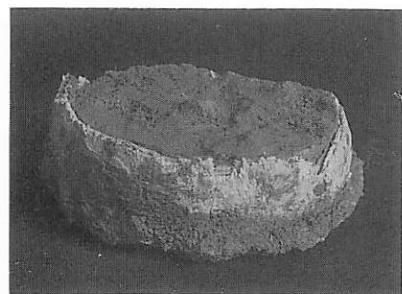
7



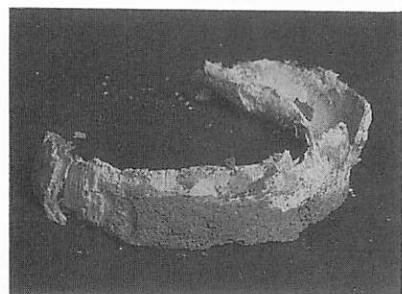
3



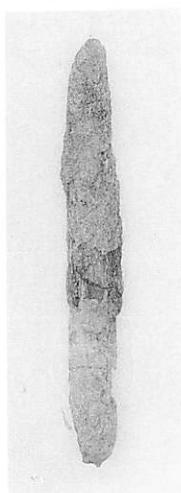
4



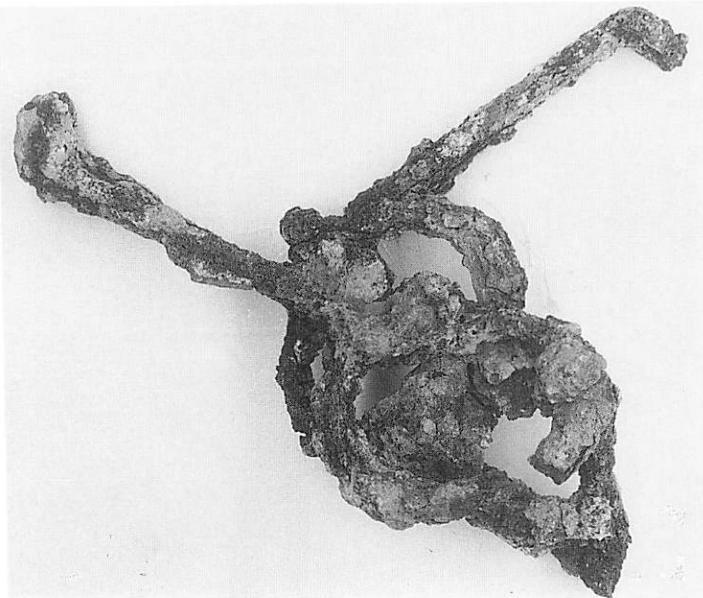
8



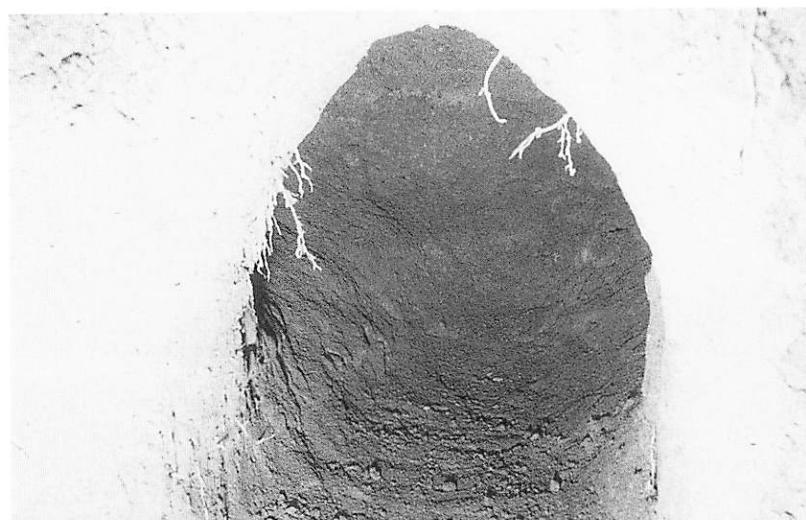
9



5

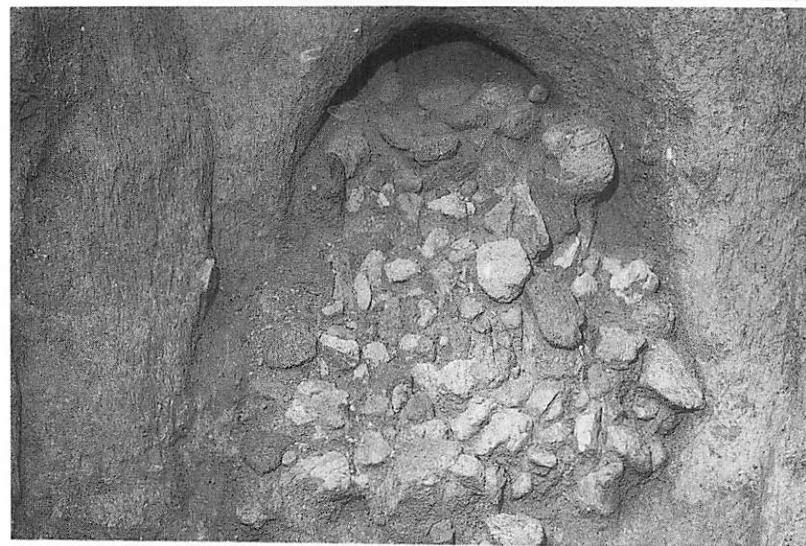


6



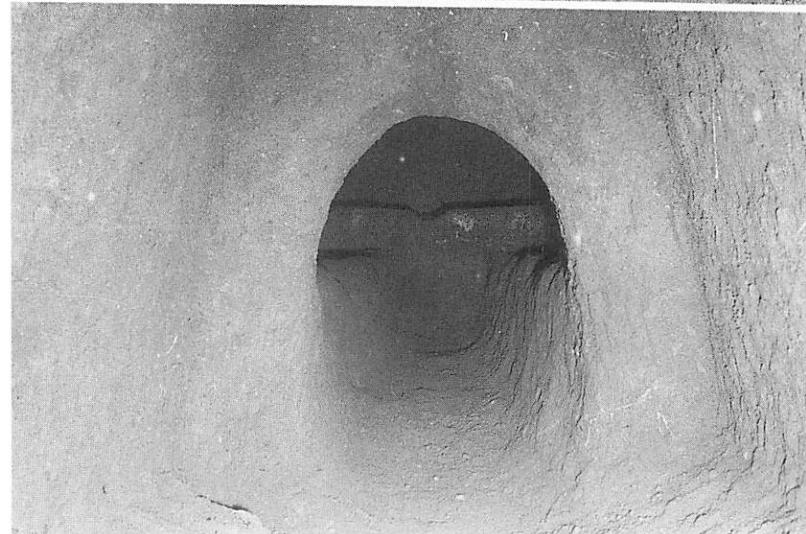
17-C号横穴

1



20-C号横穴  
閉塞状況

2

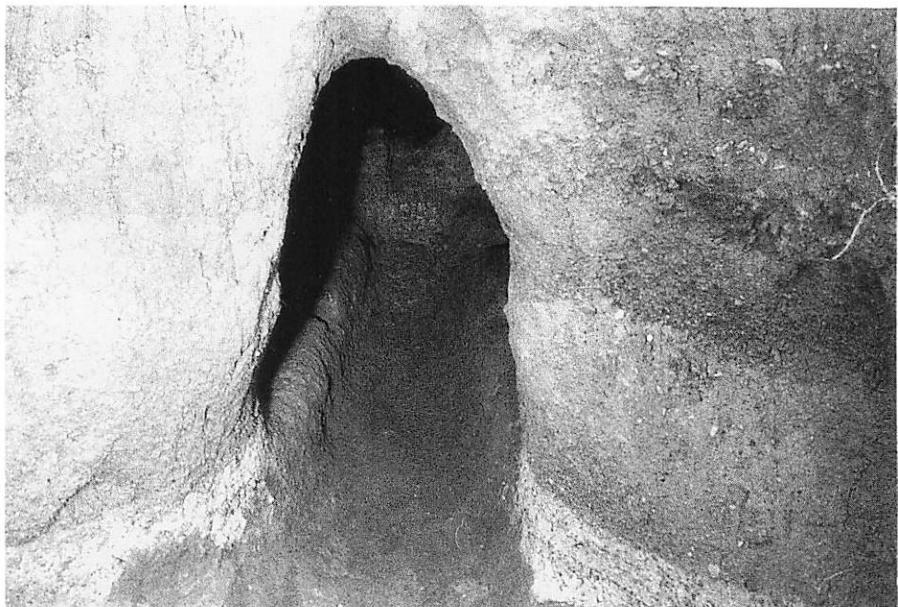


20-C号横穴  
閉塞状況

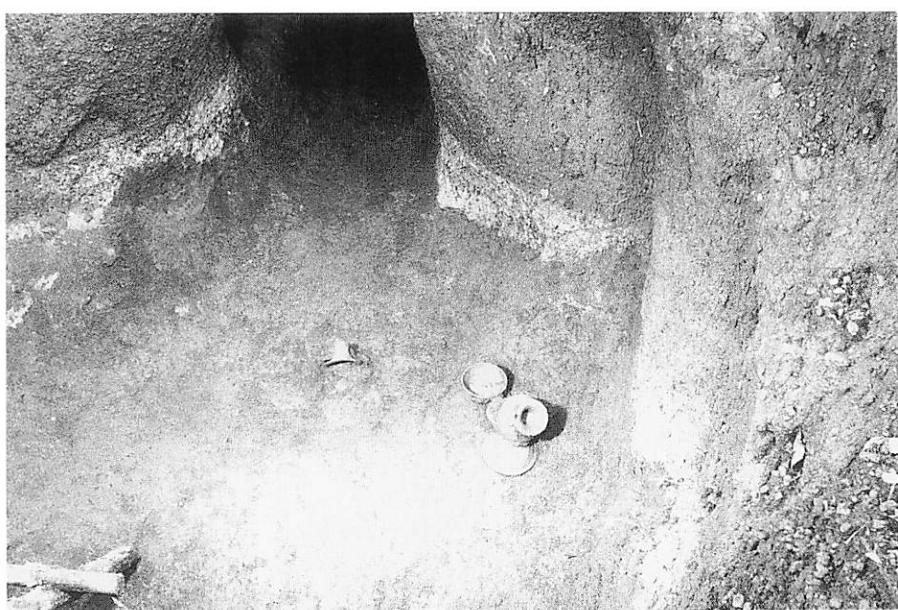
3



1

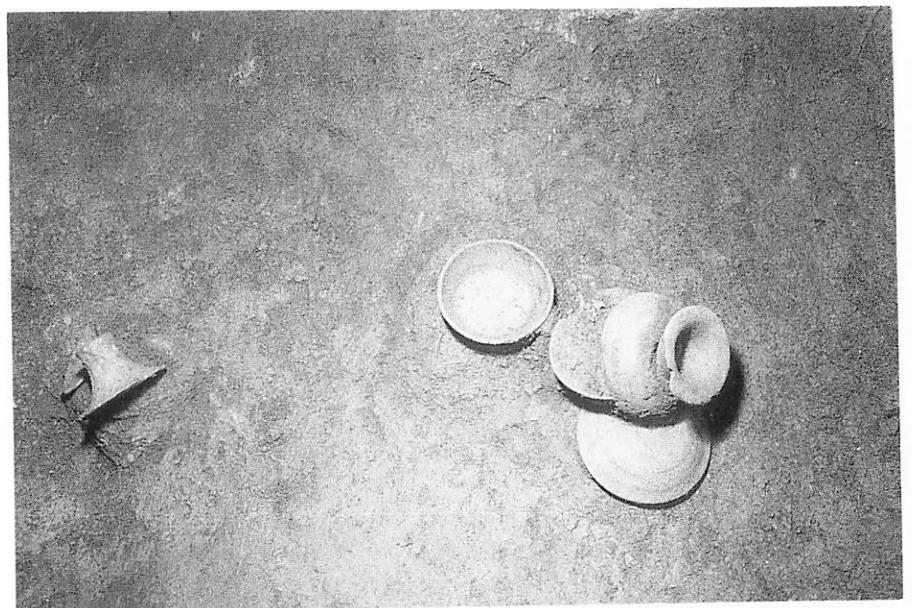


2

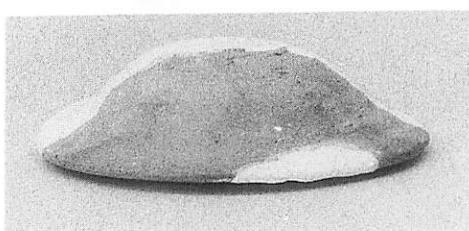


3

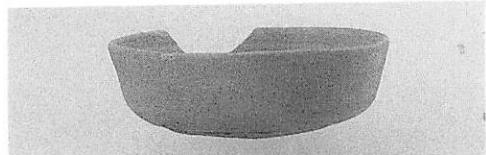
20-C号横穴出土遺物 ( 1 )  
20-D号横穴出土遺物 ( 2 ~ 3 )



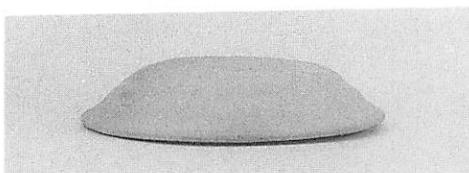
1



2



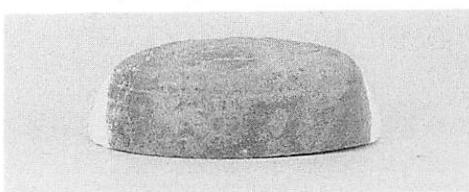
6



3



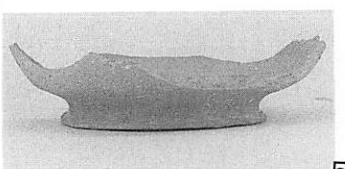
7



4



8



5

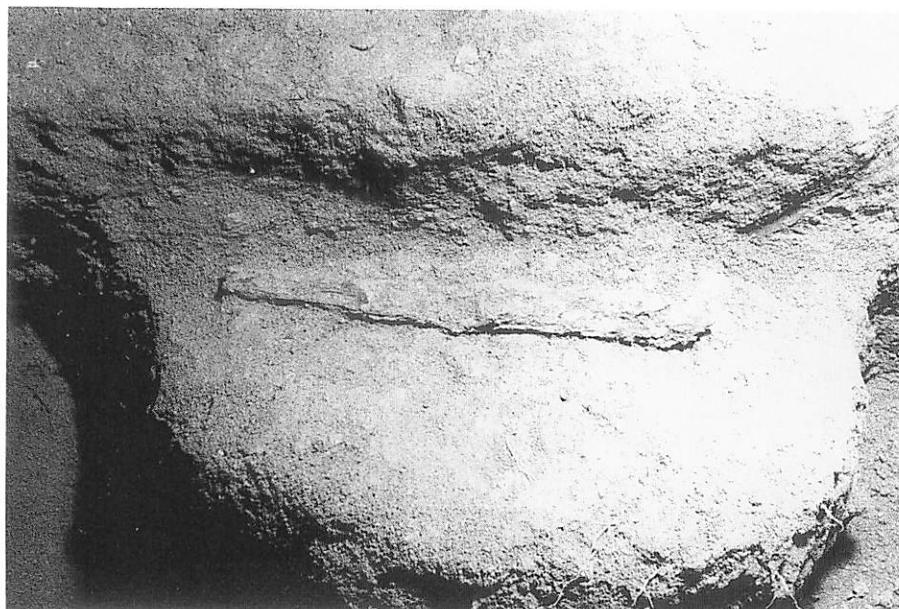


9

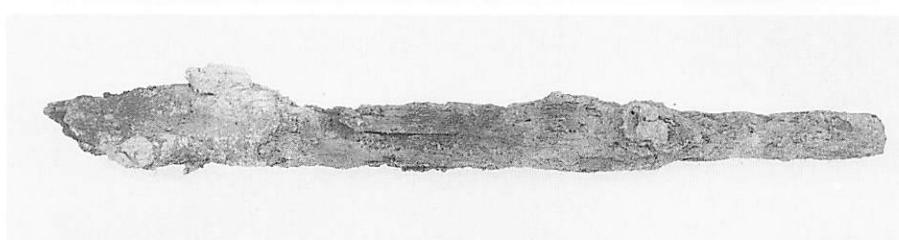


10

20-D号横穴遺物出土状況 ( 1 )  
20-D号横穴出土遺物 ( 2 ~ 11 )



21号横穴  
遺物出土  
状況



21号横穴  
出土遺物



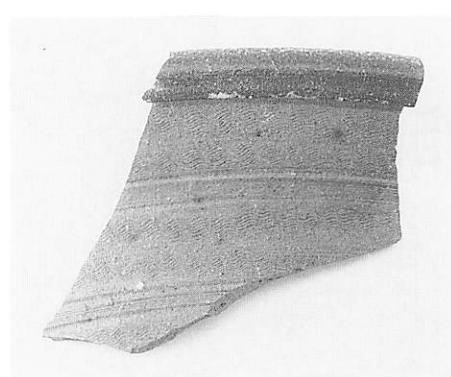
30号横穴



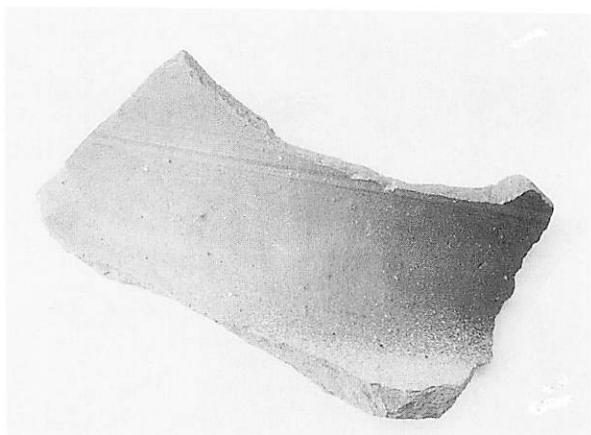
1



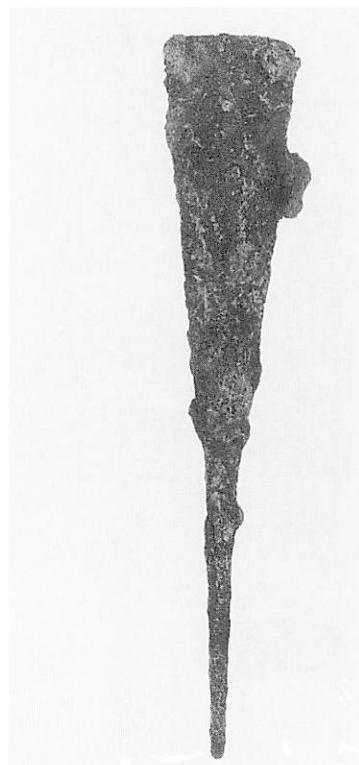
3



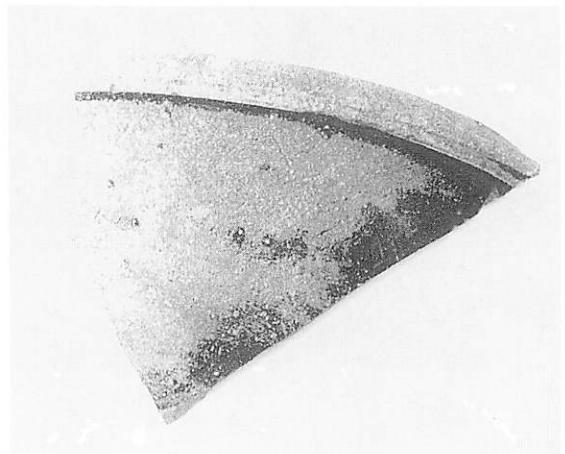
2



4



6



5

30号横穴出土遺物 (1~5)  
32号横穴出土遺物 ( 6 )



1



2



3



4

33号横穴  
33号横穴出土遺物

( 1 ~ 2 )  
( 3 ~ 4 )



34号横穴羨門

34号横穴出土遺物

( 1 )

( 2 ~ 9 )



1



2



3

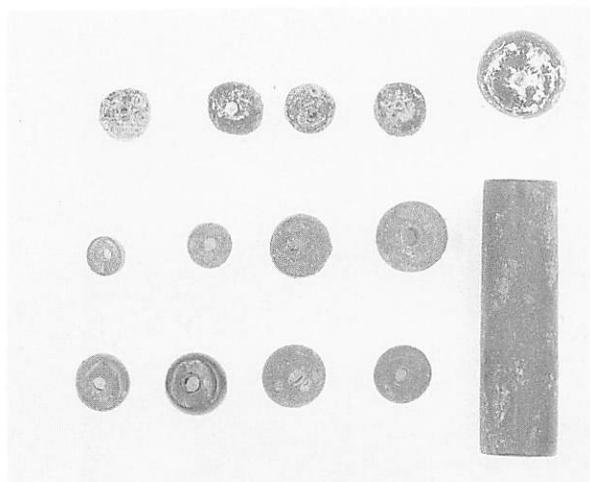


4

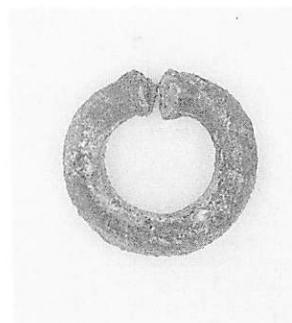


5

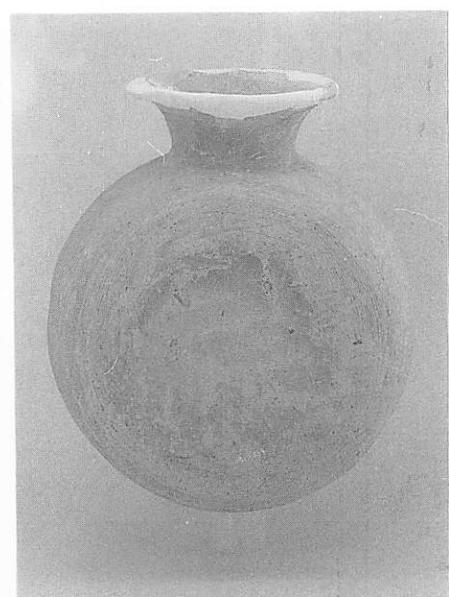
34号横穴出土遺物 (1~3)  
43号横穴 (4)  
43号横穴人骨出土状況 (5)



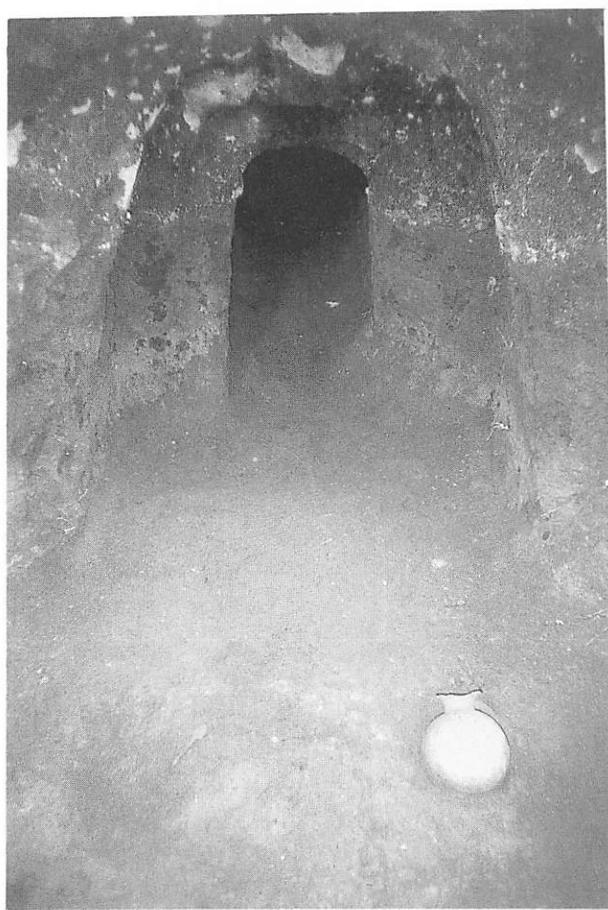
1



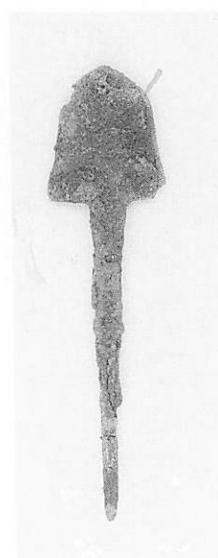
2



4



3



5

43号横穴出土遺物 (1～2)  
46号横穴遺物出土状況 (3)  
46号横穴出土遺物 (4～5)

山鹿市立博物館調査報告書第8集

**湯の口横穴群(II)**

昭和63年3月31日

編集 山鹿市立博物館  
〒861-05 熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行 山鹿市教育委員会  
〒861-05 熊本県山鹿市堀明町1026-2

印刷 下 田 印 刷

### 正誤表

『湯の口横穴群(Ⅱ)』 山鹿市立博物館調査報告書 第8集 山鹿市教育委員会 1988年  
菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)

頁	行・図番	誤	正
7	19 行	1は平瓶の口縁部で12径8cmを	1は平瓶の口縁部で口径8cmを
14	第15 図	(スケールの数値が記載漏れ)	(スケールの数値)0 5 10cm
43	第54 図	図中の図番号記載漏れ	(図番号)甕を1 鏃を2
48	2 行	6は甕の胴部である。～最大径等不明である。	削除
51	第63 図	図中の図番号記載漏れ	図左上の高壙を1、右の堤瓶を2、図左下の鉄鏃を3
	図版16	17号横穴出土遺物 (1～7)	15号横穴出土遺物 (1)、17号横穴出土遺物 (2～7)
	図版26	(刀子の写真に番号記載漏れ)	刀子を11

## 文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第8集 湯の口横穴群(Ⅱ)』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:山鹿市立博物館調査報告第8集 湯の口横穴群(Ⅱ)

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)

発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025 年6月 26 日